

月の薬師は魔法使いの夢を見るか？

十六夜××

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

八意永琳の一番弟子だった薬師が蓬莱の薬を研究した罪で1960年代のイギリス魔法界に落とされる話。

月の都で数万年を生きた彼女は、シリウス・ブラックの妹として生を受け、その身が穢れによって朽ち果てるまで地上で罪を償い続ける。そう、罪を償い続ける……気はさらさらなく更に罪を積み上げ続ける話。月まで届け、薬師の大罪。

## 目次

第一話	穢れに満ちたこの世界で	1
第二話	皮の弾ける音	12
第三話	針と鍋	21
第四話	赤い目の噂	30
第五話	満月の夜の邂逅	39
第六話	アポロ計画	48
第七話	兎の引越	56
第八話	家出少女の集うホテル	64
第九話	魔法使いの街	72
第十話	赤い髪の東洋人	82
第十一話	地下通路に潜む影	91
第十二話	貴方がそれを望むのならば	102
第十三話	もう一人の私	110
第十四話	入れ替わり	119
第十五話	セレネ・ホワイト	128
第十六話	少女は一人燃え続ける	137
第十七話	闇癒者ごっこ	146
第十八話	不老の魔法使い	155
第十九話	命の水	162
第二十話	人間牧場	171
第二十一話	永遠に完成しない薬	179
第二十二話	名前を言ったら飛んでくるあの人	187
第二十三話	肉の塊	196
第二十四話	高みを目指して	205

第二十五話	最強最悪のサラブレッド	212
第二十六話	物語の主人公	221
第二十七話	ガラスの破片	229
第二十八話	死の呪い	237

## 第一話 穢れに満ちたこの世界で

一九六一年、私はイギリスのロンドンにある屋敷の一室で生を受けた。

私はこの身が穢れきるまでこの穢れた地で生きていかなければならない。

私は淨く美しい月の土地を思い出し、静かに涙を流した。

力のない人間が短い生を無駄に消費する様子を私はベンチに座って眺める。

ある男性は腕時計を睨みつけながら早足で改札を抜けていく。

ある子供はお菓子の屋台の前で駄々を捏ね、母親を困らせている。

どこを見回しても人、人、人、人。

人混み、人ゴミ、ここはまさに地獄だ。

「すまんセレネ、待たせたな」

私が群衆に顔を顰めていると、穢れに満ちた人間が一人、私の前に立つ。

人間の名前はシリウス・ブラック。

私の二つ上の兄だ。

「よし、それじゃあ九と四分の三番線に行くぞ。確かセレネは初めてだよな。しっかり俺についてくるんだぞ」

シリウスはそう言うのとベンチの横に停めていた荷物が満載のカートを押して駅の中へと入っていく。

私は小さくため息を付くと自分の荷物が乗ったカートを押してシリウスの後を追った。

通勤ラッシュの時間は過ぎているが、ロンドンの主要な駅の一つであるキングズ・クロス駅は多くの人間で賑わっていた。

シリウスはそんな人混みの中をぶつからないようにカートを押しながらズンズンと進んでいく。

シリウスは親と仲が悪い。

きつと、家を離れられることが嬉しくて仕方がないのだ。

「七番線……八番線……九番線……よし、ここだ」

シリウスはホームの途中で立ち止まると、私の方を振り返る。

「いいかセレネ。ホグワーツ特急が停まる九と四分の三番線はあのレンガの壁の向こうだ。あの壁に向かって真つすぐカートを押していけばいい」

「……はい」

私はカートを掴む手に力を込め、レンガの壁に向かって歩く。

そしてそのまま壁をすり抜け、魔法で隠されたホームに出た。

私が後ろを振り返ると、すぐにシリウスが私の後を追ってホームへ入ってくる。

そして目の前に停まっている赤い汽車を指さした。

「あれがホグワーツ特急だ。あれに乗り込めばホグワーツ近くのホグズミード駅につく。ホグズミード駅についたらハグリッド……大きな男の人の指示に従えばいい」

私はシリウスの顔を見上げる。

どうやら彼は私の世話など放り出して、さっさと学友の元へ向かいたいようだ。

だとしたら、そのようにしたらいい。

どうでもいいとすら思っている妹の世話に、その短い命を無駄にすることはない。

私はシリウスの言葉に頷くと、自分から離れ、汽車の客車に乗り込む。

カートを埋めている大きなトランクを引き上げるのには少々難儀したが、通路まで上げてしまえばこちらのものだ。

私は大きなトランクを押しながら開いているコンパートメントを探す。

まだ出発まで時間があるためか、すぐに誰もいないコンパートメントを見つけてきた。

私はコンパートメントの座席の下にトランクを押し込むと、窓際の席に座る。

そして、窓に映る自分の姿を見て、小さくため息を付いた。  
真つ白な髪に青い瞳。

白く透き通った肌に整った顔。

これは、まさに私の姿そのものだ。

穢れに満ちた人間から産み落とされた私の姿は、月にいた頃の私の姿そのものだった。

私は、月の都で薬の調合を行う薬師だった。

かの大天才、八意<sup>×</sup>の一番弟子であり、私自身も優秀な薬師であると自負している。

流石に師匠である八意<sup>×</sup>には遠く及ばないが、それでも月の都で発生する薬の需要に応えられる程度には技術も知識も身につけていた。のんびりと流れる時間、平和な月の都。

時に月の兎と歌い、桃を齧り、薬を調合する。

平穏な日々が何千、何万と続いただろうか。

今から千年以上前、そんな平穏な日々が突如崩れ去った。

師匠である八意<sup>×</sup>が月の姫である蓬莱山輝夜の協力のもとに禁忌とされる不老不死の薬、『蓬莱の薬』を調合したのだ。

蓬莱の薬を飲んだ輝夜は罰として地上へと落とされ、数年その穢れた土地で生活させられることになったのだ。

とはいえ、数年という時間は月に住む我々からしたら瞬きするほどの短い時間だ。

蓬莱の薬を服用したという禁忌を犯した罰にしてはあまりにも軽い。

いや、地上に落とされるといえるのはこれ以上ない極刑だ。

殺しても死なない身になった以上、妥当な罰なのかもしれない。

輝夜が地上に落とされて数年が経ち、ついに地上にいる輝夜を迎えに行く日になった。

迎えに行くのは月の使者のリーダーである八意<sup>×</sup>を筆頭に、私や月の使者が十数名ほど。

だが、出発の直前になって八意××の指示で私は月に残ることになった。

どのような考えでそのような指示をしたのかはその時は分からなかった。

だが、すぐにその意図を知ることになる。

地上に降りた八意××は月の使者を皆殺しにし、蓬莱山輝夜と共に逃げたのだ。

私は、八意××の最後の情で、助けられたのだった。

八意××が地上に逃げたこともあり、彼女が受け持っていた仕事の一部、主に薬の調合に関する仕事は私が受け持つことになった。

何故彼女は自らを罪人の身に落としてまで輝夜と共に逃げたのだろうか。

何故彼女は一番弟子である私ではなく、あのような我儘お嬢様を選んだのだろうか。

私はそれが妙に悔しく、そんな選択をした彼女を少しでも見返してやろうという浅ましい理由からますます医学の分野にのめり込んでいくことになる。

八意××が地上に逃亡してから千二百年近くが経ったある日。

ついに私は自らの力のみで『蓬莱の薬』の調合法を完成させた。

私はまた一步八意××に近づいたのだ。

だが、天は私に味方しなかった。

どこから研究が漏れたのかわからないが、私が『蓬莱の薬』を研究していることが月の上層部にバレた。

蓬莱山輝夜と八意××の逃亡以降、『蓬莱の薬』は服用どころか製造、研究することすら大罪になった。

私は警備の玉兎にあっさりと捕まり、形式上の裁判を受けたあと、蓬莱の薬を研究した罰としてこの身が穢れにより朽ちるまで地上に落とされることになった。

事実上の死刑だが、まあ、その場で殺されなかっただけ温情というものだろう。

こうして、私は穢れに満ちた地上へと落とされた。



イギリス魔法界の純血の家系である、ブラック家の長女として生み『落とされた』。

「……、空いてるか？ いや、空いてるのは確かだけど……その……」  
不意に声を掛けられ、私は視線を窓から通路の方へと向ける。

そこには十一歳の私と同じ年だと思われる少年がコンパートメントの扉を少し開けてこちらを覗き込んでいた。

「空いてないわ」

私は薄茶色の髪の少年にそう告げる。

少年はコンパートメントの中をもう一度見回し、私以外誰もいないことを確認してからもう一度口を開いた。

「えっと、君一人のように見えるけど？」

「私がいるじゃない」

私はこれ以上の問答が面倒くさくなり、窓に視線を移す。

窓の外では新入生と思われる人間が親との別れを惜しむように抱き合っていた。

どうせすぐに消えてなくなる命なのに、どうしてあのように好き合うのだろうか。

無駄、無駄、全てが無駄だ。

その時、ガタガタという音が扉の方から聞こえてくる。

私のもう一度視線を向けると、先程の少年が大きなトランクをコンパートメント内に引きずり込んでいる最中だった。

「……聞こえなかったのかしら」

「頼むよ、どこも一杯なんだ。この哀れな少年を助けると思ってたさ」

少年はへらへらと笑いながらトランクを座席の下に押し込むと、私の向かいに腰かける。

そして目を輝かせながら言った。

「僕の名前はバーテミス・クラウチ。バーティって呼んでよ。今年からホグワーツに入学するんだ。君は？」

私は少年、バーティの容姿を上から下まで観察する。

身なりのいい服装に整った髪、利発そうな表情をした快活な男の

子。

それにクラウチ家と言えば、ブラック家と同じく間違いなく純血とされる聖二十八一族の一つだ。

私は小さくため息を付くと、こちらも自己紹介をする。

「セレネ。セレネ・アルテミス・ブラックよ」

「セレネ……ブラック。ってことは、ブラック家か。じゃあ親戚みたいなもんじゃないか」

ブラック家は純血同士の婚姻を重視しているため、魔法界の殆どの純血の家系と血の繋がりがあある。

「純血の家系はどこもそんなものでしょ」

私は興味なさげにまた窓の外に視線を向けた。

ホグワーツ特急は汽笛を鳴らし、ゆつくりとロンドンの街を後にしていく。

今思えば、このような列車に乗るのはこれが初めてかもしれない。

魔法使いとして生を受けてからというもの、私は生涯のほとんどをグリモールド・プレイスにある屋敷の自室で本を読んで過ごしていた。

私としては死ぬまでの暇つぶし程度の認識だったが、両親には勤勉な姿として映ったらしい。

いや、違う。

両親は兄のシリウスと私を比較していただけだ。

兄のシリウスは勉学自体は優秀だが、家の風習と反りが合わず反抗的な態度ばかり取っている。

両親は、シリウスのことは完全に見限り、私に期待しているのだ。

「なんにしても、ようやくホグワーツに入学だ。ほんと待ちわびたよ。家で学べることには限界があるからさ。君はどこの寮になると思う？」

親父の話では組分け専用の帽子があつて、それが入る寮を決めるらしいけど……」

「どこでもいいわ」

「そう？ どこでもいいってことはないだろう？ ハッフルパフだけは嫌だな。あそこは劣等生が集まる寮だ。君は……ブラック家だし、

スリザリンじゃないか？ ブラック家の子供の殆どがスリザリンに入るって聞いてるよ」

「そうね」

いや、例外はある。

兄のシリウスはスリザリンではなく、グリフィンドールに組み分けされた。

それが、両親とシリウスの方に走る亀裂を大きくしたのは確かだろう。

私は視線を窓の外から正面に座るバーティへと移す。

バーティは私と目が合うと、少し顔を赤くして目を逸らせた。

やはり、この世は穢れに満ちている。

太陽が沈み、地平線から月が頭を出した頃、ノックも無しにコンパートメントの扉が開かれる。

私との会話を諦め本を読んでいたバーティは咄嗟に顔を上げ、扉を開けた人物の方を見た。

「君たちは一年生かな？」

「え、はい。今年からホグワーツです」

私も窓の外に向けていた視線を扉の方に移す。

そこには上級生と思われる生徒がコンパートメントの扉を半分ほど開けてこちらを覗き込んでいた。

肌は青く見えるほど色白く、身長はそこそこに高い。

顔立ちは少々骨張っており、金色の長髪を後ろで一つにまとめていた。

「そろそろホグズミードに到着する。ホグワーツの制服に着替えたほうがいい」

「あ、ありがとうございます」

バーティは上級生の胸につけられたバッジをチラリと見ると、小さく頭を下げる。

上級生は扉をピシヤリと閉めるとツカツカと革靴を鳴らしながら隣のコンパートメントに歩いていった。

「スリザリンの監督生だ。コンパートメントを見回ってるんだろう。つと、そっか、制服に着替えないとだな」

バーティは座席の下に入れていたトランクを引っ張り出し始める。私はバーティが屈んだ隙をつき、顎を軽く爪先で小突いた。

その瞬間、スイッチが切れたようにバーティが気絶する。顎から脳を揺らし気絶させたのだ。

「玉兎でももう少し配慮するわ」

私は地面に倒れているバーティをコンパートメントの隅へ蹴り飛ばすと、自分のトランクからホグワーツの制服を取り出し、着替える。そして何食わぬ顔で席に座ると、バーティの頭を軽く小突いた。

「……っ、うーん」

バーティは目を覚ますと、後頭部を搔きながら起き上がる。

そして何が起こったのか理解できていないという顔で椅子に座り直した。

「あれ？ 俺今何してたんだっけ？」

「制服に着替えようとしていたわよ」

私は半分ほど引つ張り出されたトランクを指差す。

バーティは少々首を傾げながらもトランクから制服を取り出し着替え始めた。

ホグワーツ特急を降りた私はシリウスが言っていた大男の案内でボートに乗り、ホグワーツ城を目指す。

ボートには私の他に三人の人間が乗っていたが、緊張しているのか人間たちに会話はなかった。

「ボートに忘れ物はしちらんか？ よーし、こっちだ」

城の真下にある洞窟でボートを降りると、その先にある階段を上っていく。

階段を上った先は城の裏手のようで、石造りの壁に木製の扉が嵌め込まれていた。

大男は大きな拳で扉をノックする。

「先生、イツチ年生をお連れしました」

大男がそう伝えると、木製の扉が開かれ、中からエメラルドグリーン  
のローブを着た女性が姿を現した。

年齢は四十歳前後だろうか。

「お疲れ様です。ここから先は私が引き受けます。新入生の皆さん、  
私についてきてください」

女性は新入生を見回すと、城の中を先導していく。

私はその女性のすぐ後ろを歩きながら城の中を観察した。

建つてからかなりの年月が経過しているのか、廊下に敷かれた石畳  
は中央が人の足によって削られ軽く凹んでいる。

窓にはガラスが嵌められているが、小さな傷が無数につき、今にも  
砕け散りそうだった。

女性の先導で城の中を進んでいき、最終的に小さな小部屋のような  
場所に案内される。

「ただいま大広間では貴方たちの歓迎会の準備が進められています。  
貴方たちは組分けの儀式を受け、それぞれの寮へと振り分けられま  
す」

その後も女性は各寮の特性や、どの寮も長い歴史や伝統があるとい  
うことを説明し始める。

だが、所詮千年ほどの短い時間だ。

それに、特性があるといっても所詮は寮。

どの寮に入っても学校生活に違いはないだろう。

違いが出るとしたら学校生活ではなく、家族関係だ。

ブラック家は代々スリザリンに組分けされる。

両親の話では、『純血を維持する真の魔法使いの一族である我々に  
相応しい寮はスリザリンだけ』らしい。

スリザリン以外に組分けられたら、家からの評価が地に落ちるだろ  
う。

自分の兄であるシリウスがいい例だ。

「準備が整いました。私についてきてください」

先程の魔女が部屋へと戻ってきて、新入生を先導し始める。

私は押し流されるような形で部屋の外に出ると、そのまま多くの在校生が待つ大広間へと足を踏み入れた。

大広間の中は大きく長い四つのテーブルが並び、その奥には職員用と思われるテーブルが設置されている。

新入生は大広間の中央を進み、職員用のテーブルの前に並ばされた。

ローブの色から察するに、四つのテーブルがそれぞれ各寮のテーブルとなっているようだ。

新入生が全員並び終わると同時に、先程の魔女が古びた帽子が乗せられた椅子を新入生の前へと運んでくる。

あれが噂に聞く組分け帽子というやつなのだろう。

組分け帽子は在校生が静かになるのを待つと、大きな声で歌を歌い始めた。

聞くに堪えない雑音と幼稚な歌詞だったが、どうやら各寮のことを歌っていたようだ。

「名前を呼ばれたら椅子に座って帽子を被り、組分けを受けてください」

先程の魔女はそう言うと、早速一人目の名前を読み上げる。

名前を呼ばれた新入生は長過ぎるローブの裾で転びそうになりながらも椅子に座り、帽子を深々と被った。

「レイブンクロー！」

新入生が帽子を被った瞬間、組分け帽子が声高らかに叫ぶ。

すると四つあるテーブルのうちの一つから拍手が湧き起こり、組分けを受けた生徒を迎え入れた。

その後数人が組分けされた後、すぐに私の順番が回ってくる。

私は椅子から帽子を持ち上げると、椅子に座り帽子を静かに頭の上に乗せた。

『ふむ。これはまた難しい生徒が入ってきてきよったな』

組分け帽子の音が脳内に響く。

『お主にとって、この学校は監獄でしかない。お主がこの学校で学ぶことなど何一つないであろう』

どうやらこの組分け帽子は人の記憶を読むらしい。

まあ、帽子の言う通りだろう。

私は数万年という歳月を学問に捧げた。

今更このような原始的な世界で学ぶことなど何もない。

魔法など、所詮は体の中を流れる魔力をある法則に従い変換し、仕事をさせているに過ぎない。

『であるのなら、お主が入る寮は一つしかない』

「スリザリン！」

組分け帽子は高らかに叫ぶ。

私は帽子を椅子の上に戻すと、拍手に導かれてスリザリンの寮のテーブルへと向かった。

## 第二話 皮の弾ける音

組分けを終えた私は拍手に導かれる形で四つあるテーブルの一つへと向かう。

そしてちょうど空席になっていた椅子へ腰掛けた。

「入学おめでとう。歓迎するぞ」

私が椅子に座ると同時に、横にいた上級生が声を掛けてくる。

そこにいたのはコンパートメントを見回りに来た金髪の上級生だった。

「私は七年生のルシウス・マルフォイだ。スリザリן寮の監督生をやっている」

「セレネ・アルテミス・ブラックです」

「ああ、よろしく。わからないことがあればなんでも聞きたまえ」

そう言っつてルシウスは右手を差し出してくる。

本来ならば、穢れた人間の手など握りたくはない。

だが、月にいた頃ならまだしも、今は私もその穢れた人間の一人だ。

私は表情を取り繕うと、ルシウスの手を握り返した。

「スリザリן！」

私がルシウスの手を離すと同時に、組分け帽子がまたスリザリןと叫ぶ。

大広間の奥、組分け帽子がある場所へ視線を向けると、こちらのテーブルへ向けて歩いてくるパーティの姿があった。

「ほう、今年は豊作だな。クラウチ家の一人息子も獲得出来たか」

ルシウスはパーティを見ながら満足げに頷く。

パーティは私の横の席に腰掛けると、少々興奮気味に言った。

「同じ寮だなんてラッキーだな」

「ええ、そうね」

私はルシウスに向けたものと同じ表情でパーティに対しても笑いかける。

パーティは少し顔を紅くすると、それを誤魔化すように私を挟んで一つ奥にいるルシウスに挨拶し始めた。



その後も組分け帽子は四つの寮に新入生を組分けていき、ついに最後の一人の寮が決定する。

それと同時に城の中を案内した魔女が帽子を片づけ、代わりに職員テーブルの中央に腰掛けていた老人、校長のアルバス・ダンブルドアが立ち上がった。

「新入生諸君！ 入学おめでとう。歓迎会を始める前に、少々話をせねばなるまいの。『少々！』以上じゃ」

ダンブルドアの話は本当にそれだけのようで、生徒たちからは拍手喝采が沸き起こる。

私も形だけの拍手をダンブルドアに送った。

ホグワーツの校長が変人だとは兄のシリウスから聞いていたが、まさかここまでとは思わなかった。

もうすでにボケ始めているのではないだろうか。

だが、あんな変人でも世間の評価は高い。

生まれてから殆どの時間を屋敷の中で過ごした私でも、あの変人の評判を耳にする程だ。

校長の話が終わると同時に、目の前に置かれた皿が料理でいっぱいになる。

私は目の前にある金の皿を撫で、そこに掛けられている魔法を解析した。

なるほど、どうやらこの料理たちはすぐ真下にある厨房から転移させられてきたようだ。

きっとホグワーツには多くの玉兎……いや屋敷しもべ妖精が住み着いているに違いない。

「どうしたセレネ。食べないのか？」

横で早速ベーコンに齧り付いているパーティが不思議そうな顔で聞いてくる。

正直地上の食べ物を体の中に入れてたくないが、食べなければ餓死が待っているだけだ。

「いえ、少し考え事をしていただけよ」

私はポテトサラダをボウルから、自分の皿に盛る。

生きるために殺し、そして死に至る。

食事とは、まさにその象徴とも言える行為だ。

ああ、なんと残酷で、穢らわしい。

自らが生きるために他者を殺さなければならぬなんて。

私が暮らしていた月の都には、穢れが限りなく存在しない。

穢れがないからこそ、月の都は永遠であり、またそこで暮らす民も永遠なのだ。

私はポテトサラダと子豚のベーコン、リブローステーキにキドニーパイ、ローストビーフをかぼちゃジュースで流し込む。

そしてデザートに大きなアップルパイを皿ごと確保し、切り分けることなくフォークを突き立てた。

地上は残酷だ。生きるために殺し殺される。

だが、その二択しかないのなら、私は殺す側がいい。

私はアップルパイの最後の一切れを胃袋に収めると、ナフキンで口の周りを拭いた。

新生生の歓迎会が終わると同時に、監督生のルシウスに引率されてスリザリンの寮へと案内された。

ルシウスは大広間を出ると階段で地下へと下り、地下牢を進んでいく。

そして地下牢の奥の石壁の前で立ち止まると、石壁に対して言った。

『偉大なる目的のために』

その瞬間、石壁が左右へ開き、人の通れる隙間が出来る。

ルシウスは扉の脇に退くと、新生生を寮の中へと招き入れた。

スリザリンの寮は天井の低い細長い地下室だった。

荒削りの天井からは緑がかったランプが鎖で吊るされており、壁の彫刻を怪しく照らしている。

「ここがスリザリンの談話室だ」

ルシウスはホグワーツでの生活の注意点や、寮生活の決まり事など

を新入生に説明し始める。

私はそれを聞き流しながら、談話室を隅から隅まで観察し、ため息をついた。

罰として地上に墮とされはしたが、まさか地上を通り越して地下で生活することになるとは。

ここまで来ると、惨めを通り越して少し笑えてきた。

その日の夜。

私は同室の人間が全員寝静まったことを確認すると、ベッドを抜け出して靴を履きロープを羽織る。

そして部屋にある窓へと近づいた。

幸い私が寝泊まりする女子寮は地下にある談話室から螺旋階段を上ったところにある。

どうやらホグワーツ城に何本か突き出ている塔の一つがスリザリンの女子寮になっているようだ。

私は窓を開けると、宙に浮き、窓の外へと飛び立つ。

そしてそのまま塔の天辺まで飛び上がり、屋根が平たくなっている箇所へと降り立った。

「今日はまだ月は出てない……」

ロープを敷物代わりに屋根に座り、夜空を眺める。

月にいても地上にいても、夜空の景色だけは変わらない。

いや、大気の影響で月の方が綺麗に星が見えるか。

なんにしても、見える景色は同じだ。

「本当に、もう月へは帰れないのね」

二百年前、『蓬萊の薬』を飲んだ蓬萊山輝夜は二十年間地上へと墮とされた。

そう、輝夜は本来ならば、月に帰れたのである。

だが、輝夜は月へ帰ることを拒否し、八意様と逃げた。

彼女が『蓬萊の薬』を飲まなければ、彼女が月へ帰ることを拒否しなければ、八意様が月の使者を皆殺しにしなければ……私は今も月で

優雅に桃でも齧っていたかもしれない。

輝夜から地上での思い出を聞きながら、呑気に笑い合っていたかもしれない。

「どうせ作れもしないのだったら、『蓬莱の薬』なんて研究しなければよかった」

今も私の脳内には『蓬莱の薬』の事細かな調合法が記憶されている。だが、実現不可能な調合法など、夢物語も同然だ。

「あれれ〜こんなところに生徒がいるぞ？ お外はこんなに暗いのに、おつかしいなあ！」

不意に後ろから声が聞こえ、私はゆっくり振り返る。

そこには多くの半透明のゴースト……いや、ポルターガイストと思われる男性がニタニタとした笑みを浮かべて宙に浮かんでいた。

「ファイルチに言いつけてやろうか？ あいつは新入生だからって容赦はしないぞお？ 親指を縛り上げて吊し上げるんだ。さぞや痛いだろうねえ」

「貴方、お名前は？」

私は屋根から立ち上がると、ポルターガイストの男性へ名前を聞く。

するとポルターガイストはケタケタと笑いながら言った。

「人に名前を聞くときは自分から名乗るものだってお母ちゃまから教わらなかつたでちゅかー？」

「あら、ごめんなさいね。私はセレネ・アルテミス・ブラックよ」

「ブラック？ それじゃあ、あのシリウスのクソガキの妹ってわけ？」

ポルターガイストは意外そうな顔をして空中で一回転する。

「ええ。シリウスは私の兄」

「へへー！ 意外だなあ。シリウスのやつにこんな妹がいたなんて。これはあの高慢チキを強請るいいネタが出来たぞー！」

どうやらこのポルターガイストは兄のシリウスと知り合いのようだ。

仲がいいのか悪いのかはわからないが。

「それじゃあお前、取り敢えずここから飛び降りろ。ファイルチにチク

「られたくなかったらな！」

ポルターガイストは笑いを堪えるようにしながら私を指差す。

「フィルチに捕まるのと地面に激突するの、どっちがマシだろうなあ？ どうした？ 恐怖で震えて声がまちなえーんってか？ ギャハハハハ」

「ふふふ、どっちも怖いわー」

私はポルターガイストに笑いかけると、ローブを羽織り、屋根の縁に立つ。

「貴方、お名前は？」

「なんだお前？ ふん、俺様は最強で最恐で最凶のポルターガイスト、ピーブズ様だ！ ホグワーツで最も偉大な俺様を知らないだなんて、まったく最近の監督生はどんな教育をしてるんだ？」

「そう、ピーブズというのね。落ち込んでいた私に声を掛けてくれて本当にありがとう。またどこかで会いましょう」

私は一歩後ろへと歩き、そのまま左足で宙を踏む。

重心が屋根の縁より外側に出たため、私は物理法則に従って屋根から落ちた。

「おいー… ばかや——」

ピーブズが慌ててこちらに飛んでくるのが見えたが、少し遅い。

私は既に自由落下を始めている。

私は落下しながら空中で身体を捻り、そのまま宙を舞って先程の窓から女子寮へと入る。

そして窓をピシヤリと閉め、ローブを脱いで欠伸を噛み殺しながらベッドへと潜り込んだ。

ピーブズ、彼は邪悪な存在だが、穢れは感じなかった。

ポルターガイストは死から生まれたゴーストとは違い、生も死もない。

生きてはおらず、死んでもいない。

彼はこの穢れた地上において、数少ない穢れを持たない存在だろう。

次の日。歓迎会から一日しか経っていないが早速授業が開始された。

新生生は大広間でガイダンスを受けた後、それぞれの寮に別れて授業の行われる教室に向かう。

ホグワーツ最初の授業はゴーストのカスバート・ビンズが教える魔法史だった。

ビンズは黒板をすり抜けるようにして教室に現れると、教科書を開き朗々と読み上げ始める。

その声は催眠効果でもあるのか、ホグワーツで始めて受ける授業にも関わらず、教室の半分以上が居眠りを始めた。

ビンズもビンズで、居眠りをする生徒を咎めるようなことはせず、淡々と授業を進めていく。

私は教科書をパラパラと捲り内容を全て暗記すると、教科書を枕にして居眠りを始めた。

魔法史の授業は、全て寝ていても問題ないだろう。

魔法史の次は闇の魔術に対する防衛術の授業だった。

闇の魔術に対する防衛術とは、その名の通り闇の魔術や魔法使いに対処する術を学ぶ授業である。

とは言うもの、一年生で習うことは殆どが座学だ。

教科書の内容を見ても魔法界に生息する危険生物や簡単な呪いの対処法ばかりが記載されている。

教師である元闇祓いの魔法使いはここから先の授業の内容を簡単に説明した後、深刻な顔で言った。

「現在、ヴォルデモート卿を名乗る闇の魔法使いが手下を集め、マグル生まれや半純血の魔法使いの粛清に乗り出し始めておる。魔法省はこの事態を重く受け止め、対抗勢力を組織し始めた。近いうちにイギリス魔法界は全面戦争へと突入するであろう。ホグワーツにいる限り安全であることには違いないが、君たちには自らや、自らが大切に思う者を守り通せる力を身につけて欲しいところである」

そう、現在魔法界ではヴォルデモート卿という闇の魔法使いが勢力

を強めている。

ヴォルデモート卿の目的は純血による魔法界の支配。

実際にここ数年で多くのマグル生まれやマグル寄りの半純血の魔法使いが無惨に殺害されたり、失踪したりしていた。

「それと……」

と、担任の魔法使いは続ける。

「もしそのような勢力に勧誘されたとしても、決して近づいてはならん。闇の勢力に加担した代償は大きく、君たちの人生を大いに狂わせることになるう」

まあ、その忠告は妥当だろう。

スリザリンは純血の魔法使いが多い。

それと同時に純血こそが真の魔法使いであり、マグルやマグル生まれの魔法使いは純血によって支配されるべきだという純血思想が根付いている。

私の両親……オリオン・ブラックとヴァルブルガ・ブラックも純血主義の魔法使いだ。

ヴォルデモート卿の配下、死喰い人にこそなっていないが、二人はヴォルデモート卿の思想に賛同している。

きっと新入生の中にも、親が死喰い人であったりヴォルデモート卿が魔法界を支配することを待ち望んでいる人間がいるはずだ。

闇の魔術に対する防衛術が終わり、私は大広間へ昼食を摂りに戻る。

大広間は既に多くの生徒で賑わっており、私も群衆に混ざって昼食を摂り始める。

パスタの大皿を手元に引き寄せ、フォークで巻く。

パスタだけだとバランスが悪いのでソーセージが山のように盛りつけた皿も手元に引き寄せた。

「セレネ、隣いいかい？　って、もしかしてそれ全部食べるつもり？」

私の返事を待たずにバーティが隣の椅子に座る。

「そうだけど？」

「あ、いや……なんでもない」

パーティーは軽く首を振ると、自分の皿に料理を盛り始めた。

「午後は変身術と魔法薬学だっけ。大鍋の準備をしておかないとな」

「それじゃあ、一度寮へ戻らないとね」

私はパスタの大皿を平らげると、ソーセージの大皿に取り掛かる。

パーティーは私が抱え込んでいる皿にフォークを伸ばすと、ソーセージを一本突き刺した。

「それに魔法薬学はスリザリンの寮監のスラグホーン先生の担当だ。昨日マルフォイ監督生に聞いた話だと寮監はお気に入り生徒を抱え込むお人らしい。定期的にお気に入りを集めてパーティーを開いているって話だ」

「お気に入り生徒をねえ」

私はパーティーがフォークでソーセージを持ち上げると同時に、そのソーセージを手でフォークから外し、自分の口の中に入れる。

「なんにしても、寮監がどんな人物かは興味があるわね。何せ七年間私の世話をする人物ですもの」

「……セレネ、お前意外と食いしん坊なのな。言い方は気になるけど、まあ七年間世話になる人だ。気に入られるに越したことはないと思うよ」

パーティーは私の皿からソーセージを取ることを諦めたのか、素直に別の皿のソーセージを食べ始めた。

当たり前の話だが、月の都にソーセージなんて食べ物はなかった。

殺した動物のはらわたを抉り、その中にグチャグチャに潰した肉を詰め込むなど、狂気の沙汰だ。

私はパリッとした皮の食感と濃厚な肉汁を口の中いっぱいを感じながら人間の罪深さを嘆いた。



### 第三話 針と鍋

変身術とは、その名の通り物体や生物を違うものへと変化させる術のことだ。

物体を生物に、生物を物体に変化させることができるこの術は、呪文学などで習う魔法よりも高度なものとなる。

まあ、そうでなければ呪文学とは別枠にはならないだろう。

変身術も大きく見れば呪文学の一部と言える。

だが、習得難易度が他の魔法と比べ著しく難しいため、別枠となっているのだろう。

入学式の日に私たちをホグワーツへ招き入れた魔女、ミネルバ・マクゴナガルが黒板の前で厳格な表情で言う。

「そのようなこともあり、変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中でも最も複雑で危険なものの一つです。この授業でふざけたものは即刻教室を出ていってもらいますし、二度と教室へは入れません」

マクゴナガルは授業の注意点をいくつか説明し終わると、机に魔法をかけ小豚に変えてみせる。

私は生徒たちの拍手を聞きながら、変身術によって小豚へと変化した机を注意深く観察した。

豚のように鳴き、動いてはいるがアレからは魂を感じない。

つまりあの豚の本質は机のままなのだ。

生きているように振る舞っているだけの机。

きつと殺して食べるようなことは出来ないだろう。

マクゴナガルは豚を机に戻すと、生徒一人ひとりにマツチ棒を配り始める。

全員にマツチ棒が行き渡ったところで、マクゴナガルが口を開いた。

「本日の課題はマツチ棒を縫針に変えることです。ただいまからやり方をお教えするので、よく聞いておくように」

マクゴナガルは黒板にマツチ棒を縫針へと変化させる過程で注意すべき点を書きながら、実際に説明を始める。

そして一通りの説明が終わったところで実習の時間になった。  
教室の生徒たちは一斉に杖を取り出し、マツチ棒に魔法をかけ始める。

私はマツチ棒を手中で転がすと、机の上に垂直に立てようと試み始めた。

マツチ棒の持ち手の先端は真っ直ぐ切られているわけではないので普通に立てただけではすぐに倒れてしまう。

私は息を止め、全神経を指先に集中させる。

いや、息を止める程度ではダメだ。

私は意識的に心臓を止め、更に神経を集中させる。

心臓を止めていられる限界は十秒。それ以上止めると意識が飛んでしまう。

勝負はこの十秒ツ——!!

「ミス・ブラック?」

不意に声を掛けられ、そのショックで私の心臓が動き出す。

私は大きく深呼吸をして脳内に酸素を送り込むと、可能な限り平静を装って振り向いた。

「なんでしようマクゴナガル先生」

「なんでしようではありません。杖も出さずに、何をそんなに集中していたのです?」

私はマクゴナガルとマツチ棒を交互に見る。

「ああ、えっと。どのように変化させるか検討してました」

そして咳払いを一つすると、ローブから黒く細い、真っ直ぐな杖を取り出した。

黒壇、三十センチ。非常に硬く、しならない。

芯材にはグリムの毛を使っているらしいが、その真意は不明だと杖職人のオリバンダーが言っていた。

なんでも、現職のオリバンダーが作った杖ではないらしい。

先代が知り合いからグリムの毛だと言って渡された何の動物の毛かもわからない黒い毛で作った杖がこれなんだとか。

もちろん、この杖を買う際両親は猛反対した。

当たり前だ。そんな得体の知れない杖を子供に持たせたがる親などいない。

だが、最終的にはこの杖を買うことになった。

店中の杖を振った結果、私に合う杖がこれしかなかったのだ。

私は机の上にマッチ棒を置くと、杖の先端で軽く小突く。

するとマッチ棒はみるみるうちに湾曲し、鋭く尖り始める。

そして最終的には私のイメージ通りの縫合針になった。

マクゴナガルは私に変身させた縫合針を手に取り、観察し始める。

そして感心したようにメガネの位置を直した。

「色も細さも、そして鋭さも完璧です。スリザリンに五点差し上げましょう。湾曲していなければ完璧だったのですが……」

「え、あ。そうか……」

縫合針は魔法界では一般的ではないのだ。

そもそも魔法使いは傷口を縫合しない。

針と糸で傷口を縫い合わせるといふ行為は魔法使いの目には野蛮で原始的に映るらしい。

私は縫合針を一度マッチ棒に戻すと、今度は裁縫用の針へと変身させ、マクゴナガルに手渡す。

マクゴナガルは私に変身させた裁縫針を受け取ると、私に対して優しく微笑みかけた。

「追加でもう五点差し上げましょう。随分筋がいいですが、家で事前に予習を？」

「まあそんなところですよ」

「貴方もお兄様に似て優秀なようですねによりです」

マクゴナガルは私に針を返すと他の生徒のところへと歩いていく。

それにしても、兄に似て優秀……か。

むしろこの程度が出来ないとあつては恥ずかしいレベルだと思うのだが。

私は裁縫針をマッチ棒に戻すと、今度こそ机に垂直に立てるために集中し始めた。

変身術の次の授業は魔法薬学だ。

授業が行われる地下牢の教室内には既に色とりどりの煙が立ち込めており、独特の臭気が鼻を突く。

私は教室の隅の方の席に腰掛けると、煙の発生源の方を見た。

そこにはでっぴりとしたお腹にセイウチのような髭の初老の魔法使いが額に軽く汗を掻きながら大鍋をかき回している。

どうやら授業で使う魔法薬を今まさに調合しているらしい。

それにしても酷く原始的な製法だ。

アレでは嫦娥様の贖罪のために薬を搗いている玉兔と大差ないだろう。

「つと、もうこんな時間か。スリザリンに、グリフィンドールの諸君らも集まっているかね」

鍋をかき混ぜていた魔法使いは額の汗を拭うと、大鍋を火から下ろす。

そして教卓の前へと移動し、名簿を取り出して出欠を取り始めた。にしても、そうか。魔法薬学はグリフィンドールと共同授業なのか。

どおりで教室に人が多いはずだ。

「よし、全員いるようだな。さてさてさて……」

魔法使いは値踏みするように生徒を見回し、咳払いを一つして話し始める。

「ようこそ、魔法薬学の教室へ。私はホラス・スラグホーンだ。少なくともNEWTまでの五年間、希望する者には更に二年間、君たちに魔法薬学を教えることになる。もつとも、ホグワーツで大きな人事異動がなければだがね。よろしく頼むよ」

スラグホーンはセイウチ髭を指で弄りながら話を続ける。

「さて、魔法薬学という学問について、全く何も知らないという生徒が殆どだろう。マグルの世界で育った者はもちろんのこと、魔法界で育った者も、実際に魔法薬を調合したことがあるというものはかなりの少数派のはずだ。なに、難しく考える必要はない。なにせこの授業

では杖を振って呪文を唱えるようなことはしないからな。リスト通りに材料を揃え、指定された通りに刻み、潰し、手順通りに鍋で煎じていく。お菓子作りのようなものだ」

スラグホーンは手元の大鍋を杓子でぐるりとかき混ぜる。

「授業を始める前に、君たちが魔法薬についてどれほどの知識を持っているかを披露してもらおう。なんでもいい、知っている魔法薬はあるかな？」

スラグホーンの問いに、教室の数人が手を挙げる。

スラグホーンは手始めにグリフィンドールの女子生徒を指した。

「では、君」

女子生徒は立ち上がると少し顔を赤くして答える。

「愛の妙薬」

スラグホーンはそれを聞き小さく頷いた。

「素晴らしい。強力な魔法薬の一つだ。飲ませた相手の心を支配し、虜にする。だがまあ、本物の愛が生まれるわけではないがね。他には？」

また数人が手を挙げ、スラグホーンは今度はスリザリンの男子生徒を指した。

「真実薬です」

「ほっほう。さては親に嘘をついたら真実薬を飲ませると脅されたクチだね？　魔法使いの家庭では常套句だ。真実薬とは、無味無臭の液体で、飲まされたものは自分の意思とは関係なく、どんな質問にも答えてしまう。強力な自白剤だ。それ故に使用に関しては魔法省で厳しく管理されており、また調合法も複雑で完成までに長い時間を要する」

ああ、確かによく聞くフレーズだ。

兄のシリウスと父のオリオンが喧嘩をしたとき、よく父が口にする。

実際、真実薬は強力な自白剤だ。

だが、解毒薬が作れないわけではない。

それが薬である限り、必ず解毒薬を作ることができる。

スラグホーンはそのあと何人かの生徒を指しては、生徒が発言した魔法薬を解説していく。

「ふむ、そうだな……ミス・ブラック、どうかね？」

そしてついには手を挙げてない私にも質問を飛ばしてきた。

私は頬杖をついていた顔を持ち上げると、適当に言った。

「そうですね。不老不死の薬……なんてどうです？」

私がそう答えると、スラグホーンは眉をピクリと動かす。

「不老不死の薬……近しいものならある。十四世紀に錬金術師のニコラス・フラメルが錬成に成功した賢者の石。この石を触媒にして生み出す命の水を飲み続ける限り、寿命で死ぬことはなくなる。事実、ニコラス・フラメル氏は今もご健在だ。去年のイースターと一緒にダイアゴン横丁へ遊びに行ったのだが……と、いかんいかん。脱線するところだった」

スラグホーンは軽く頭を振る。

「今発表してもらった魔法薬は魔法薬の中でも有名なものだ。君たちが真面目に勉強し、七年生の時に行われるNEW T試験に合格するほどの実力を身に着けることができれば、今名前が挙がった魔法薬の殆どを煎じるだけの力が身についていることだろう。さて、今日に関してはおできを治す薬を煎じてもらう。魔法薬の中では初歩的なものだ。レシピは黒板に、材料はあそこの棚だ」

「先生、質問よろしいですか？」

早速実習に取り掛かろうとするスラグホーンに、グリフィンドールの生徒が質問を飛ばす。

「先生が今混ぜている鍋の中身はどんな魔法薬なんですか？」

スラグホーンは、まさにその質問を待っていたと言わんばかりに得意げな顔になった。

「ほっほう。これは頭冴え薬だ。一口飲めば、三時間は頭が冴えわたる。溜まった宿題を片付けるにはちょうどいい量だ。今から行う実習で、上手におできを治す薬を煎じることができた生徒にこの小瓶を贈呈しよう」

スラグホーンは大鍋の中身を匙で掬い、小瓶の中に移す。

そしてコルクでしっかりと栓をした。

「時間はたっぷりある。難しい課題でもない。多くの者が小瓶を手に行けることを私は願っておるよ。それ、はじめ！」

スラグホーンの掛け声とともに、生徒たちが材料棚に群がり始める。

私は黒板に書いてあるレシピに目を通すと、頭の中でレシピの手直しを始めた。

はつきり言つてこのレシピでは無駄がありすぎる。

干イラクサはこんなに入れる必要はないし、ヘビの牙より毒虫の頭の方が効力が強くなる。

それに手順も無駄に複雑だ。火加減を弱く、その分水の分量を少なくすればヤマアラシの針なんて入れなくとも魔法薬は完成する。

私は殆どの生徒が自分の席に戻り干イラクサの計量を始めたタイミングを見計らつて材料棚に近づく。

そしてレシピとは大きく異なる分量の材料を手にとると、自分の席で好き勝手に調合を始めた。

干イラクサを水で戻している間に毒虫の頭をすり潰してそのエキスを鍋の中に入れる。

そしてそのエキスが入った鍋で角ナメクジを茹で、その煮汁を匙で軽く混ぜる。

最後に干イラクサを潰し、鍋の中へ入れた。

その瞬間、泥のような見た目をしていた鍋の中身が途端に透き通り、淡い青色へと変化する。

私はその液体を指で掬うと、隣にいるパーティーのこめかみに塗り付けた。

「冷たっ……つて、なにすんだよ」

「こめかみにニキビができてたから」

パーティーは薬を塗られたこめかみを手でペタペタと触る。

そして感心したように頷いた。

「ほんとだ。治ってる。……にしても僕のと随分見た目が違うな」

私はパーティーの鍋の中を覗き込む。そこには黄土色の軟膏のよう

なものがへばりついていていた。

「貴方失敗したんじゃないの?」

「そんなまさか。レシピ通りのはずだ。最近できたニキビで……つて、それはもう治っちゃったんだ」

バーティは自分の顔を探るように顔を触り始める。

私は調合した魔法薬を小瓶に入れると、スラグホーンへ提出した。

「ん? 随分透き通っているな。ヤマアラシの針を入れ忘れたんじゃないか?」

「はい。ヤマアラシの針は入れていません」

スラグホーンはやれやれといった表情で小瓶の中身を匙で掬い、魔法薬を試験する魔法具に塗りつける。

そして試験結果を見て、何度か目をパチクリさせた。

「ん? ふむ……効果はある、のか? だがしかし見た目はあまりにも……」

スラグホーンはその後臭いを嗅いだり、実際に肌に塗り付けたりして効果を確認した後、首を傾げながら私に頭冴え薬の小瓶を差し出した。

「よろしい。運を味方につけるのも、ある意味では才能であるからな」

私は小瓶を片手に自分の席に戻る。

そして手にした頭冴え薬の栓を開け、一気に飲み干した。

「あれ? 今飲んじやうのか?」

隣で小瓶におできを治す薬を詰めているバーティが意外そうな顔で言う。

私は頭冴え薬を舌の上で転がすと、飲み込む前に軽く鼻から息を吐いて臭いを確認した。

味覚と嗅覚から薬の成分を分析した私は静かに頭冴え薬を飲み込む。

若干の頭の冴えを感じながら、私は口を開いた。

「少し効力が弱いみたい。イモリの脾臓の量を調整してあるわね。まあ聖マンゴで処方するような頭冴え薬をポンポン生徒に渡さないか」「少し詳しくすぎやしないか?」



「あら、私は薬の専門家よ？」

私がそう言うとバーティは首を傾げる。

なんにしても魔法薬学の時間は少々楽しめそうだ。

私は既存のレシピのダメ出しと改良したレシピを書き込み、教科書を閉じた。

## 第四話 赤い目の噂

私がホグワーツに入学して一ヶ月余りが経過した。

入学してから様々な授業を受けたが、授業の内容は正直言って子供のお遊びだ。

まあ、実際その授業を受けているのは子供なので、当たり前と言ったら当たり前なのだが。

そういったこともあり、十月に入る頃には私の興味は完全に授業から別のことにシフトしていた。

「……。ねえ、そういうえば明日の授業なんだけど」

深夜の一時頃、私はベッドの上で横になりながらふと同室の子供たちに呼びかける。

子供たちからの返事はない。皆ぐっすり寝付いているようだ。

「よし。寝てるわね」

私はベッドから起き上がり、寝間着から動きやすい格好に着替えてローブを羽織る。

そしてローブに目くらましの魔法を掛けた。

「あとそっこだ」

私は魔法薬学の授業中にこっそり材料を拝借して作成した暗視の魔法薬の小瓶を叩る。

その後十秒ほど辺りを見回し、周囲が鮮明に見えてきたことを確認してから窓を開け、ホグワーツの外に飛び立った。

箒はいらない。空を飛ぶのに箒が必要だというのは魔法使いの思い込みだ。

実際は魔法使いでも箒を使わずに空を飛ぶことができる。

「考え方の問題だとは思うんだけどね」

まあ、月にいた頃から空を飛ぶことができた私だからこそその感覚なのかもしれないが。

私は月明かりに照らされたホグワーツ城をぐるりと回ると、開いている窓から城の中に降り立つ。

「さて、今日も始めますか。ホグワーツ探索」

私はフードを目深に被り直し、ホグワーツの廊下を歩き始めた。そう、最近私が興味を持っているのはホグワーツという城そのものだ。

この城が建てられたのはホグワーツの創始者たちが現役で教鞭を振るっていた頃。

つまりは千年ほど前ということになる。

「維持管理はされているようだけど、建てられた当初から手つかずの場所もいくつもあるのよね。この城にはダンブルドアですら知らない場所や部屋が存在している」

私はポケットから一枚の羊皮紙を引っ張り出す。

そこには私が今までの深夜徘徊で見つけた隠し部屋が記載されている。

「誰にも見つかっていない。完全なる隠し部屋を見つけたら、そこに私の本当の私室を作りましょう。同室の子供たちも悪い子たちではないんだけど、少し話が合わないのよね」

別に子供は嫌いではない。生まれたばかりの子供を無知で無力だと嘲り笑うほど人が出来ていないわけではない。

だが、話が合うかどうかは別だ。

それに女子寮や談話室で危険な薬を調査するわけにもいかない。今飲んでいる暗視の魔法薬も魔法薬学の時間にこっそり作ったもののだ。

私は探知の呪文で壁を探りながら誰もいない廊下を歩き回る。

この作業を始めて二週間は経つが、未だにホグワーツ城の探索は終わっていない。

城自体の広さもあるが、隠され方がかなり巧妙なのだ。

ただの学び舎に施すには過剰なほどに。

「まあ、ホグワーツ『城』だから、それで正しくはあるんだけど……何故ホグワーツの創始者たちは城を建てたのかしら。それに城自体に施された数々の護りの魔法。学び舎に施すにはあまりにも過剰だわ」

一体何に対する護りなのか。まあ、予想はつくが。

十中八九マグルに対する魔法だ。

「千年も前だと今よりもずつと魔法界とマグル界の境界は曖昧だった。魔女狩りが始まるのはもう少し後のことだけど……って、魔女狩り自体はそこまで脅威ではなかったんだっけ」

その瞬間、廊下の奥から箒を倒すような木材の乾いた音が聞こえてくる。

管理人のフィルチかとも思ったが、フィルチならもつと足音を隠すことなく堂々と廊下を歩くので気が付かないはずがない。

私は目くらまし呪文の掛かったローブでしつかりと身を隠しながら音のした方向へと歩く。

その瞬間、見えない何かと正面衝突した。

「いたっ！」

「うわっ」

「ちよ、リーマス！ 僕の足踏んでる！」

その衝撃で私は後ろに尻もちをつく。

見えない何かも私と同じ状況のようで、ドタバタと体勢を立て直す音が正面から聞こえてきた。

「誰かいるの？」

私は立ち上がり、ローブについた埃を叩き落としながらその何者かに聞く。

その瞬間、聞き覚えのある声が正面から響いた。

「その声、セレネか？」

私が返事をするよりも早く目の前の空間に兄であるシリウスの頭が生える。

いや、頭が生えてきたのではない。

どうやら私と同じように目くらましの魔法が掛かったローブかマントで身を包んでいたようだ。

「知り合いか？ シリウス」

「前に話しただろ？ 今年入学した妹だよ」

バサリという物音と共に目の前に四人の少年が現れる。

一人は私の兄であるシリウス・ブラック。

そのほかの三人は顔こそ見たことがなかったが、きつとシリウスと話すときによく出てくるグリフィンドールのお友達というやつだろ  
う。

確か名前は――

「ジェームズ・ポッター、リーマス・ルーピン、ピーター・ペティグ  
リユーだっけ」

私もローブを脱ぎ、四人の前に姿を現す。

その瞬間、シリウス以外の三人が固まった。

「やつぱりセレネか。こんな時間に何してるんだよ。もうとつくに消  
灯時間は過ぎてるだろ？」

「ホグワーツを探検してただけです。お兄様こそこんな時間に一体  
何を？」

「まあ似たようなもんだが……って、ジェームズ？」

シリウスが横にいるジェームズを突く。

ジェームズは私をぼうつとした目で見ていたが、シリウスにつつか  
れてハツとした。

「あ、いや。あまりにも似てないもんだからさ」

「お前それ絶対俺の親の前では言うなよ？ まあ会う機会ないだろう  
けどさ。セレネがあまりにもブラック家の誰にも似てないせいで両  
親が離婚する一歩手前まで家庭が荒れたことがあったらしいから」

まあ、確かに私の容姿は月にいた時とよく似ているため、ブラック  
家の誰とも似ていない。

ブラック家は代々黒髪だが、私だけは透き通るような白髪だ。

「とにかく、一度どこかに隠れよう。ここじやフィルチに見つかると  
少年の一人、リーマスが周囲を見回しながら言う。

私たちは領き合うと、それぞれローブとマントを被って小移動を始  
めた。

「改めて紹介するよ。妹のセレネだ」

月明かりが差し込む空き教室で、シリウスが私を紹介する。

「他のブラック家の例に漏れずスリザリンだけど、まあ仲良くしてやってくれ」

「そうか、スリザリン生か……。やっぱりシリウスだけが特別だったんだな」

そう言つてジェームズがシリウスの肩を叩く。

「そういう言い方をするなよ」

シリウスは言葉では否定していたが、まんざらでもなさそうな表情だった。

「つと、こつちの紹介がまだだったな。俺はジェームズ・ポッターだ」

「僕はリーマス・ルーピン」

「えっと、その……ピーター、ピーター・ペティグリューです」

私は順番に兄の友人たちと握手をしていく。

全員兄と同じグリフィンドールの二年生のようだ。

「ホグワーツの探検をしていたって話だが、あまり褒められた行為じゃないな。夜のホグワーツはかなり危険だ。フィルチも徘徊しているし、階段で足を踏み外す危険性もある。それに、ピーズだつて日中よりずっと活動的だ。一年生は消灯時間は大人しく寮でだ——」

「まあまあシリウス。俺はお前の妹が規則なんて絶対に破らないようなつまらないやつじゃなくてほつとしてるぜ。スリザリンなのはいいけど、それ以外は滅茶苦茶好印象だ。うん、わかるぞ。規則なんてくそくらえだよな」

ジェームズは私の肩に手を置いてウンウンと頷く。

そんな様子を見てリーマスは大きなため息を付いた。

「いや、シリウスの言う通りだ。消灯時間は出来るだけ寮の中で大人しくしておいた方がいい。そりゃ夜のホグワーツに興味を惹かれるのは分かるけど……、それでも探検は明るい時間にした方がいいよ」  
「そう言う割には毎回律儀についてくるじゃないかリーマス。俺は知ってるぞ。こういうアブナイ行為が一番楽しんでいるのはお前だつて」

「ちよ、そんなわけないだろ！ 僕は君たちが危険な場所に足を踏み

込まないようにだね……」

ジェームズがそう指摘すると、リーマスが少し顔を赤くしながら否定する。

ピーターはそんな二人の様子を見てほっと胸を撫で下ろした。

「でも、ぶつかったのがシリウスの妹でよかったよ。僕はてつきり噂の赤い目のバケモノかと」

「赤い目のバケモノ？」

私はピーターに聞き返す。

ピーターはまさか私から声を掛けられるとは思っても見なかったのか、少しビクついてから口を開いた。

「え、あ、知らない？ 最近上級生の間で噂になってるんだ。ホグワーツの禁じられた森に赤い目のバケモノが出るって」

「どんなバケモノなのですか？」

禁じられた森には多くの魔法生物が生息しているらしい。

それこそバケモノなんて珍しくないはずだが、噂になるということは何か理由があるのだろう。

「それがよくわからないんだ。赤い目を見たって生徒は多くいるのに誰もその姿を見ていない。不思議だね。目を見たならその顔も見ているはずなのに」

「森の番人をしているハグリッドにも聞いてみたが、全く同じだった。赤い目を見たけど、そいつの姿は覚えていないらしい」

ジェームズがピーターの説明にそう付け足す。

ピーターはジェームズという言葉に何度も頷くと、少し肩を震わせながら言った。

「そ、それに、最近じゃ城内でも見たって話を聞くんだ。だから僕怖くって……」

「まったく情けないなピーターは。安心しろって。俺が守ってやるからさ」

「う、うん」

ジェームズにそう言われ、ピーターの顔に少し笑顔が戻る。

なんにしても、興味深い話を聞いた。

赤い目のバケモノか……死ぬまでの暇つぶしに少し調べてみるのもありかもしれない。

「まあ、そういうわけだ。お前はもうスリザリン寮に帰れ。なんなら近くまで送っていくが——」

「そこまでして頂かなくても大丈夫です。お兄様たちはどうされるのです?」

シリウスはジエームズの顔をチラリと伺う。

それに対しジエームズは少し肩を竦めて答えた。

「僕らももう帰るよ。流星に夜遅いしな」

それを聞いてリーマスがホッと安堵の息をつく。

私は目くらまし呪文の掛かったローブを羽織ると、静かに扉を開けて空き教室の外に出た。

「赤い目のバケモノ? いや、初めて聞いたな」

次の日の昼食時。私は大広間にあるスリザリンのテーブルで昼食を摂りながらパーティに噂話について話していた。

やはりというか、パーティもその噂話は聞いたことがないらしい。

「私も聞いたのは上級生からだし、一年生には浸透していかないのかしら」

私は大きなミートパイを自分の手元に引き寄せると、ナイフとフォークで切り分け始める。

「そうじゃないか? それに、一年生は禁じられた森には立ち入れないしな。つと、そうだ。それこそ上級生に聞いてみたらいいじゃないか」

パーティは食べていたサンドイッチを皿に置くと、席を立って少し離れた位置にいる監督生のルシウスの元へと駆けていく。

私もミートパイの皿を抱えてその後を追った。

「マルフォイ先輩、すみません。ちょっとお聞きしたいことがあるのですが」

パーティは私から聞いた赤い目のバケモノの噂話をルシウスに話



す。

ルシウスはその話を聞いて鼻で笑った。

「何かと思えば、その話か。そんなもの噂好きの生徒が面白半分に広めているに過ぎん。その証拠に、その噂には大きな矛盾がある」

「矛盾……ですか？」

バーティが聞き返すとルシウスは頷く。

「誰もその姿を見たことがないのに何故バケモノなのだ？ ただの魔法生物かも知れないし、生徒のイタズラかも知れない。バケモノというのはどこからきた情報なのだろうな」

私は右手に抱えているミートパイの皿にフォークを突き刺しながら考える。

確かにルシウスの言う通りだ。赤い目という情報だけならバケモノだなんて仰々しい話にはならない。

「赤い目の何かが禁じられた森にいるのかもしれないが、バケモノというのはい過ぎだ。不安がる必要はない」

話は終わったと言わんばかりにルシウスは食事に戻る。

私はミートパイを食べながら先程いた席へ戻ると、今度はポテトサラダのボウルを引き寄せた。

「つて、ルシウス先輩は言ってるけど、セレネはどう思う？」

「実際にその赤い目を目撃した生徒に話を聞きたいわね」

私はポテトサラダを口に運ぶ。

バーティはその様子を見てやれやれと頭を振った。

「と言うか、なんでそんな噂を調べてるんだ？」

「なんでつて……そりゃ暇だからだけ。授業も退屈だし」

「退屈ってお前……実習の時間以外全部寝てるくせによく言うよ。そんなことだと学年末の試験で痛い目を見るぞ」

「そういう貴方は優秀よね。宿題も完璧にこなすし、教師の質問にも積極的に手を挙げて……点数稼ぎ？」

バーティは少し顔を赤くする。

「普通だ。ホグワーツには勉強しにきてるんだ。それに、半端な成績を取ったら親からなんて言われるか——」

「クラウチ家のお坊ちゃんは大変ねえ」

「ブラック家のお嬢様には言われたくないね。この白黒女」

パーティーはフンと鼻を鳴らすと先程まで食べていたサンドイッチに齧り付く。

私はそんなパーティーを見てニコリと微笑むと、空になったボウルの中にフォークを投げ入れた。

## 第五話 満月の夜の邂逅

十月の半ば。身の丈ほどの大きさのあるかぼちやが実っている畑を横目に、私とバーティはホグワーツの校庭を歩いていた。

「こんな沢山の大きなかぼちや、どうするのかしら。全部かぼちやパイにするとか?」

「多分ハロウィン用だな。くり抜いて飾りにするんだよ」

確かにハロウィンまであと一週間と少しだ。

ブラック家ではハロウィンやクリスマスなどのイベントを楽しむという文化がなかったため、かぼちやとハロウィンが結びつかなかった。

それでいえば月にもハロウインを祝う風習はない。

十月といえば月にいる神たちもひと時出雲へと集まるので、少々静かになるぐらいだ。

私たちはかぼちや畑を抜けると、禁じられた森のすぐそばにポツリと佇む小屋を目指す。

「おい、本当に行くのか? そもそも知り合いですらないんだらう?」  
情けないことをいうバーティを無視し、私は小屋の扉の前に立つ。

扉の横には私がすっぽりと中に隠れられそうなほど大きなオーバーシユーズが無造作に転がっていた。

「ハグリッドさん、いらっしやいますか?」

私は拳を握りしめ、小屋の扉を力一杯叩く。

するとあまり時間を置かずに小屋の扉が開かれた。

「ん? 誰だ? 俺っちに用か?」

中から出てきたのは巨人と人間を足して二で割ったような大男、ルビウス・ハグリッドだ。

ハグリッドはキョロキョロと何度か周囲を見回し、ようやく足元にいる私たちに気がつく。

「ん? ホントに誰だ? みねえ顔だな」

「新入生のセレネ・ブラックとバーティウス・クラウチです。少し聞きたいことがあってハグリッドさんを訪ねました」

「ブラックとクラウチ？ クラウチは……魔法省の部長さんの息子か。ブラックは……ナルシツサの妹か？」

「いえ、シリウスの妹です」

ハグリッドはそれを聞き、目をパチクリとさせると、ニコツと笑う。「あのクソ坊主にこんな可愛い妹がいたとはな。まあ二人とも入れ。茶ぐらい出すぞ」

私たちはハグリッドに招かれるままに小屋の中に入ると、質素な丸テーブルへ案内される。

ハグリッドは暖炉にヤカンをかけ、戸棚から紅茶の缶やティーセットを取り出し始めた。

「お前のお兄さんらを禁じられた森から追い出すのに相当苦勞させられる。確かに森は面白いもんに溢れちよるが、それ以上に危険だつて何度も言つとるんだがなあ」

「そういう人ですので」

私とバーティは待つてる間小屋の中を観察する。

ハグリッドは城には住まず基本的にこの小屋で生活していると聞いている。

小屋の奥には大きなベッド、そしてベッドの周りにはハグリッドの生活用品で溢れていた。

「で、聞きたいことがあるつちゆう話だったが、何を聞きてえんだ？言つとくが俺は森のこと以外はあんまり詳しくねえぞ」

ハグリッドはマグカップに紅茶を注ぎ、私たちの前に差し出してくる。

私はそのマグカップで手を温めながらハグリッドに聞いた。

「赤い目のバケモノの噂をご存知ですか？」

私がそう切り出した瞬間、ハグリッドは眉を顰める。

「お前さんらもそれを調べとるのか？」

「どうも兄たちがこの件でご迷惑をお掛けしているようですね」

ハグリッドはやれやれと言わんばかりに後頭部を搔くと、大きなため息をついた。

「まあ、勝手に森へ入らず、まず俺のところに来たことは褒めるべきと

ころだな」

「まさかまさか。許可もなく森へなんて入りませんよ。私はただ赤い目の噂について話を聞ければ、それで満足して帰るのですから」

ね、とバーティに目配せすると、バーティもコクコクと頷いた。

「……まあ、ええだろう。勝手にコソコソやられるよりかはな。赤い目のバケモノだがな、いることは確かだ」

ハグリッドはそう断言する。

「その目で見たと？」

「ああそうだ。多分俺が一番だろうな。あれは確か今年の八月だ。新学期が始まる少し前、少しばかり霧が出た夜。空からキラキラしたもんが森に落ちたのを見たんだ」

「キラキラ？ 隕石とか？」

「いんにや、そんな速度じゃなかった。もつとふわつとした何かだ。きつと不死鳥かなんかが森に不時着したんだと思ってよ。怪我してるといけねえんで様子を見に行っただ。そんでもって落ちた辺りに行ってみたんだが……」

「そこで赤い目のバケモノを見たよ」

ハグリッドが頷く。

「ハグリッドさんは赤い目のバケモノの正体を見ましたか？」

「それが覚えてねえんだ。何かこう、俺より一回りもデカイバケモノだったつちゆう記憶があるんだが、細部が全く思い出せん。それに、俺はその後小屋まで逃げたんだが、それも不可解だ。俺がそんな面白そうな生物を見て、観察するよりも先に逃げ出すとは到底思えん」

ハグリッドは首を傾げながら紅茶を飲む。

「それから先も何度か森へその生物を探しに行つとるんだが、見つからなくてな。どうにも避けられとるようだ。これは俺の予想だが、その生物は人を惑わす能力を持つてる可能性が高いな。小さな体を大きく見せるような、強い恐怖心を相手に与えるような魔法を使うのかもしれん」

「なるほど……ではその後の目撃証言はハグリッドさんではなく生徒が目撃したということですね」

「三年生以上は森のそばで授業を行うこともあるからな。上級生になると研究のために森へ立ち入る生徒もいる。そういう生徒が目撃しちよる。最近は城内でも赤い目を見たつちゆう話が出てきとるようだが、それは多分噂好きの生徒が流したでまかせだろうな」

「では、赤い目のバケモノはまだ森の中にいると?」

私の問いにハグリッドは頷いた。

「姿は見てねえが何かがいるのは確かだな。ロナン……森に住むケンタウルスも明らかに森の住民が増えていると言った」

私はハグリッドから聞いた話を脳内で整理する。

ハグリッドが見たという空から飛来した何かが赤い目のバケモノだとしたら、赤い目のバケモノはどこからか禁じられた森へ飛んできたということになる。

赤い目、人を惑わす、空から飛来……。

「あ」

「あ?」

私は赤い目のバケモノの正体に気がつき、気の抜けた声を出してしまふ。

もし、赤い目のバケモノが私の予想通りなら早急に探しにいったほうがいいだろう。

私はマグカップの紅茶を一口飲むと、頭の中で今夜の月齢を計算し始めた。

その日の夜。私は同室の女の子たちが夢の世界へと旅立つのを見送ると、寝巻きを脱いで動きやすい服へと着替える。

そしていつものようにローブに目くらましの呪文をかけると、暗視の魔法薬を一气飲みした。

「やっ」

私は姿見の前で自らの姿を確認し、不備がないことを確かめる。

そして女子寮の窓を開け、一気に上空へと飛び上がった。

空には綺麗な満月が浮かび、煌々とホグワーツ城を照らしている。

私はそのままかなり高い位置を飛びながら禁じられた森の方へと近づく。

そしてハグリッドの小屋が見えないほどの位置まで移動すると、木々の隙間から森の中へと降り立った。

「あとは見つけるだけだけど」

私は杖を取り出すと、広範囲に探知の呪文を走らせる。

私の予想が正しければ、あまり森の奥にはいないはずだ。

それこそケンタウルスなどの縄張りよりずっと手前にいるはずである。

五分ほど探知の魔法を走らせていると、ハグリッドの小屋から一キロメートルほどの位置に少し大きな生物が寝転んでいる反応が返ってくる。

人の住処のすぐ近くに大型の動物が住処を構えるはずがない。

十中八九赤目のバケモノの住処だ。

私は草木を掻き分けながら、半ば来た道に戻るような形で反応のあつた地点を目指す。

そして五分ほど戻ったところで、森の木に少し不自然な箇所があるのを発見した。

「この枝、明らかに根元から折られているわね」

森に無数に生えている木のうちの一本の枝が、明らかに人為的に折られているのを発見する。

ハグリッドがもし薪に使うために切ったのだとしたら、木の根元からバツサリと行くはずだ。

枝だけを折るなんてことはしないだろう。

私はその周囲を観察し、不自然な箇所を探す。

すると五メートルほど先に周囲と比べて植生のおかしな箇所を発見した。

何かを隠すように枝や木が地面に積み重なっている。

私は大きな枝を引きずるようにして退かすと、その下にある穴を覗き込む。

その瞬間、穴の中から高速で何発もの弾丸が私の顔を掠め、上に生

い茂っている木々に穴を開けた。

私は咄嗟に飛び退き、穴から距離を取る。

そして穴の中に向かって杖を構えた。

「そこにいるのはわかってるから出てきなさい。大丈夫、襲ったりしないわ」

穴に向かって声を掛けるが、返答はない。

私はため息を吐くと、もう一度呼びかけた。

「出てこないのならば穴の中を水で満たすわよ」

そう脅した瞬間、穴の中からバタバタと慌てたような物音が聞こえてくる。

私は目を瞑り、赤い目のバケモノが穴の中から飛び出すのを待った。

その瞬間、空気を切り裂く音と共に何かが穴の中から飛翔する。

「——ッ!?! 目を——」

「開けるわけないでしょー!」

私は杖の先から包帯を出現させると、音を頼りに相手の目に巻き付ける。

それと同様に手首、足首と拘束していき、相手が地面に落ちる頃には相手は身動き一つ取れなくなっていた。

「ぐっ……穢れた地上の民の分際で——」

「やっぱりあんたか」

私は目を開け、地面に転がる赤い目のバケモノを確認する。

イギリスのカレッツジスクールのようなブレザー姿に、紫がかった長い髪。

頭からは長い二本の耳が生えている。

間違いなく、月のうさぎ……玉兔だ。

私は目くらましが掛かったローブを脱ぐと、倒れている玉兔をその場に座らせる。

玉兔は先程は威勢の良いことを言っていたが、私が少し体に触れただけでガクガクと震え始めた。

「ひ、ひええ……命だけはお助けを……」



「殺さないわよ。全く……これだから玉兎は」

玉兎という単語を聞き、玉兎の耳がピクンと動く。

私は玉兎の正面に同じように座り込むと、玉兎の目隠しを解いた。

「馬鹿め！ 夜が明けるまで満月に狂うと良いわー」

目隠しを解いた瞬間、玉兎の目が赤く光り視界がブレ始める。

それと同時に玉兎は包帯を引き千切り、巨大なバケモノの姿へと変貌した。

「がおー、さつさと逃げないと食べちゃうぞー！」

「……思い出した。貴方綿月のところのペットね」

巨大なバケモノを見上げながら私はポンと合点を打つ。

巨大なバケモノはそれを聞き目をパチクリとさせると、すぐに拘束された玉兎の姿へと戻った。

「地上の民の分際ですらして綿月様の名前を……貴方、一体何者？」

「この顔に見覚えはない？」

私は杖から光の玉を出し、空中に浮かべる。

光に照らされた顔を見て、玉兎は文字通りひっくり返った。

「あ、貴方は月の薬師の——」

「セレネ・ブラック。ここではそれで通ってるわ」

玉兎は私の顔を見ながら口をパクパクとさせている。

私は玉兎にニコリと微笑むと、手足の包帯を解き始めた。

「色々話も聞きたいし、貴方の住処へお邪魔しても良いかしら？」

「そんな、月のお姫様をこんな穴ぐらに招待するわけには……」

「今は穢れた人間よ。気にしないわ」

私は玉兎よりも先に穴の中へと飛び込む。

玉兎は慌てて私の後を追ってきた。

穴の中は私が思った以上に居住環境が整っていた。

壁や天井は木材で補強されており、床には絨毯が敷かれている。

中央には手作りの大きな机と椅子。壁には暖炉が埋まっており、煙が目立たないよう煙突にはいくつかの触媒が噛ませてあった。

そして穴の至るところにホグワーツでよく見る生活用品が転がっている。

ベッドに敷かれている毛布はもちろんのこと、皿などの食器、ランタンなどどれにもホグワーツの校章が入っていた。

「どどど、どーぞこちらへ……あ、椅子が一つしかない」

玉兎は机と椅子の位置をバタバタと動かし、ベッドを椅子がわりに使えるようにする。

「えつと確か厨房からくすねてきた紅茶の缶がこの辺に……」

「今何時だと思ってるのよ。お茶は良いわ。寝れなくなっちゃう」

「そ、そーですよねー……あ、クッキー食べます？　確かまだ箱の中に……」

「いいから座りなさい」

玉兎はビクリと震えると、おずおずと私の正面に座る。

そして俯きながら暫くモジモジすると、かなり遠慮がちに口を開いた。

「あの、い……あ、いや、セレネ様は、どうしてこんなところに？」

「それはこっちのセリフなのだけど……まあ良いわ。私は蓬萊の薬を研究した罪で地上に墮とされたの。文字通り、人の子としてね」

「逮捕されたという話は聞き及んでいましたが……地上に墮とされていたのですね」

「まあ、そういうこと。で、貴方は？　まさか私の監視に来たわけじゃないんでしょう？」

私の問いに、玉兎は小さく首を横に振る。

「あの、えつと……私の名前はレイセンと言います。ご指摘の通り、月の使者のリーダーを務めている綿月様のペットです。ペット……でした」

「で、綿月のところのペットが何故地上に？」

レイセンは何かを思い詰めるようにグツと押し黙る。

だが、覚悟を決めたように顔を上げ、口を開いた。

「私は……月の仲間を見捨てて逃げ出したのです！」

「……へえ」

私の気の抜けた返事が穴の中に響く。  
これはまた面倒臭い話になりそうだった。

## 第六話 アポロ計画

「私は……月の仲間を見捨てて逃げ出したのです！」

ホグワーツの禁じられた森に潜伏していた月のうさぎ、レイセンは溜め込んでいたものを吐き出すようにそう告白した。

「逃げ出した？ それって、月からってことよね？ 依姫と喧嘩でもしたの？」

綿月依姫は綿月豊姫の妹であり、実質的に月の使者の実動部隊の指導者だ。

おっとりしている姉と違い、依姫は厳しい一面を見せることが多い。

「いえ、依姫様が原因というわけでは……」

「だったらどうして？ わざわざ地上へと逃げてくるなんてよっぽどよ？」

レイセンは思い詰めるように膝の上でギュツと拳を握る。

「い……セレネ様は、アポロ計画というものをご存知ですか？」

アポロ計画。まさかその名を魔法界で聞くとは思っておらず、私は少し目を見開く。

「ええ、もちろん知ってるわ。私が地上に墮とされた年……一九六一年にアメリカの大統領が人類を月へと到達させるという声明を出した。そして一九六九年、人類は表の月へと到達した」

魔法使いの家庭で育った私にも人類が月に到達したというニュースは耳に入った。

アポロ十一号。あれはまさに人類の偉業だ。

「一九六九のあの日、月の都に激震が走りました。月の民は地上の人間が月へ到達することは不可能だと考えていたからです。それから今までの間に、人類はさらに四回も月への着陸に成功しています」

レイセンは自らを抱きしめるように縮こまると、俯き震え始める。

「二度だけならマグレかもしれない。でも実際に地上の人間は五回も月へと着陸しました。地上の人間は、月へ到達する手段を確立させたのです。戦争が起こるのは時間の問題でしょう」

「なるほど……読めてきたわ。つまり貴方は戦争が怖くて綿月のところから逃げ出したのね」

レイセンは俯きながら小さく頷く。

「地上の人間はまだ大規模な軍隊を月へ降ろしてはいません。今のところは偵察なのでしよう。ですが、軍隊がやってくるのも時間の問題です。それに、地上の人間は月へ直接攻撃する手段も持っていると思います」

「大陸間弾道ミサイルか……」

私が地上に墮とされる少し前、依姫からその事について相談されたことを思い出す。

確かアメリカとソ連の両国が月へ核爆弾を撃ち込もうと計画しているが、本当にそんなことは可能かという内容だったか。

依姫としては酒の席の軽い冗談のつもりだったようだが、私はすぐに結論を出した。

『地上の民のミサイルは、表の月どころか裏の月までも届き得る』

それからだろうか。依姫が実戦を意識し始めたのは。

部下である玉兎の訓練は明らかに厳しくなったし、私のところにもよく話を聞きにくるようになった。

依姫も学がないわけではないが、神霊を相手にすることが多い彼女と私では専門が異なる。

そもそも、月の民は地上と月とを行き来する際、ロケットなどという原始的な方法は用いない。

直接空間を繋げるか、もしくは月の羽衣によって移動するのが一般的だ。

私もロケットに関しては専門というわけではないが、ロケットの推進剤として使われている化学燃料がどれほどの推進力をもたらすかの推測ぐらいは出来る。

「まあ、なんにしても事情はわかったわ。確かに月の都では逃げ回るのにも限度があるものね。地上へは羽衣で？」

レイセンはコクリと頷く。

月の羽衣は月と地上を行き来するための道具だ。

月と地上を行き来する手段としては最も原始的で時間が掛かるため、今では玉兎以外に使用するものはいない。

「で、着陸した場所がホグワーツの禁じられた森……というわけね」  
「セレネ様、ここは一体どこなのですか？ 英語圏であることはわかるのですが……月から持ち込んだ機械も軒並み故障してしまいましたし」

レイセンは穴ぐらの隅に視線を向ける。

そこには月の都でよく見る測量器具や、簡易的な浄水器、穢れ探知機などが積まれていた。

「ここはイギリスの北部。ホグワーツ魔法魔術学校の敷地内よ」

「イギリス……それも、魔法学校？」

レイセンはそう言って首を傾げる。

「そう。ここは魔法使いの子供達が魔法を習う学校」

「なるほど。道理でおかしな格好をした人間が多かったのですね。それにしても魔法使いの学校ですか……地上の人間は科学のみを信仰しているものとはばかり思っていました」

「少し特殊ではあるわ。マグル……魔法使いじゃない人間に比べて数も少ないし。魔法使いは魔法使いではない人間に対してその存在を隠している」

「月に対しても……ですか？」

「いえ、魔法使いは他の人間同様、月に都があることを知らないわ。それに、マグルと違って月にも興味はないみたい」

私はレイセンにイギリス魔法界のこと、ホグワーツ魔法魔術学校のことを簡単に教える。

そして、レイセン自身が赤い目のバケモノとして学校で噂話になっているということも伝えた。

「まだ大きな問題にはなっていないみたいだけど、これ以上危険を冒すべきではないわ。ホグワーツの教師たちが本腰を入れて貴方を探し始めたら、捕まるのも時間の問題よ」

「そんな、人間に捕まるほど間抜けじゃありませんよ。それに私は波長を操ることができません。その気になれば完全に姿を消すことだっ

「可能です！」

レイセンはそういうと椅子から立ち上がり能力を発動させる。

その瞬間、目の前に立っていたレイセンの姿が綺麗さっぱり消え去った。

それに音も消しているのか、呼吸や布擦れの音すら聞こえない。

「どうです？ 完璧に消えているでしょう？」

「ええ、確かに五感じゃ感じ取れないわ」

私は肩を竦めながら杖を取り出す。

そして穴ぐらの全体に対して魔法をかけた。

「アパレシウム、現れよ」

その瞬間、目の前の空間が歪み、レイセンの姿が浮かび上がる。

レイセンは自らの姿が浮かび上がったことに対して酷く驚愕しているようだった。

「な、なんで〜！」

「魔法よ。ここに辿り着いたのだから魔法で探知したわけだし。貴方がどれだけ物理的に姿をくらませようが、魔法使いはそれ以外の方法で貴方を見つけて出す」

「そんな！ それじゃあ私の能力まるっきり無意味じゃないですか！」

「無意味ってほどじゃないけど……過信はしてはいけないわ。少なくとも、赤い目のバケモノはもうやめた方がいいわね。今まで相手の精神の波長を操って相手を狂気に陥れて追い返していたようだけど、長く続けられ続けるほど自分の首を締めるわよ」

自分の能力に余程の自信があったのか、レイセンは目に見えて肩を落とす。

いや、能力に自信があるのなら戦いから逃げ出すなどという話だが。

「これからは姿を隠すだけにしなさいな。そうすれば、相手がよつぽどの魔法使いじゃない限り存在に気が付かれることはないわ。……というか、貴方これからどうするつもりなの？」

「え？ どうする……とは？」

「これから先の話よ。まさか、ずっとこの森に潜伏するつもり？」

私の言葉に、レイセンは表情を暗くする。

「……どうにかしないといけないことはわかってるんです。いつまでもこんな泥棒のような真似はできないです。あ、セレネ様のペットになるというのは……」

「却下よ。私はもう月の民ではないわ。魔法使いの家系、ブラック家に生まれた魔女。貴方のようなウサギを常に横に侍らせていたらどんな目で見られるか想像もつかないわ。それに、私もこの学生だからあと七年は学校に通わないといけないし」

「そう……ですよね。だとしたら、街に出て働くしかないのでしょうか」

「それが一番いい、とは言い難いわ。今の魔法界の現状を見ると」

私の言葉にレイセンは首を傾げる。

「まず第一に、今のイギリス魔法界は亜人に対する扱いがあまり良くないわ。人間至上主義というやつね。勿論耳を隠せば人間扱いしてもらえるでしょうけど、兎だとバレたら迫害される可能性もある」

それに……と私は言葉が続ける。

「今、魔法界では戦争が起きようとしている。下手に社会に出ていったら争いに巻き込まれる可能性があるわ」

「戦争!? そんな、戦争するのが嫌で地上まで逃げてきたのに……」

「たどり着いた先がまさに戦地だなんて。貴方よっぽど運がないのね」

私は青ざめるレイセンの顔を見てクスリと笑う。

そして、レイセンの肩に優しく手を置いた。

「でも、幸運なこと一つある」

「幸運なこと……ですか?」

「私に発見されたこと。貴方は本当に運がいい。地上に墮とされ最高に暇してる元月の民の私に発見されるだなんて、貴方多分一生分の運を使い切ったわよ」

私は椅子から立ち上がると、両手を広げて天を仰ぐ。

「ああ、この穢れに満ちた原始的な世界は暇で暇で仕方がない。子供騙しの魔法の授業に腐った思想の同級生。親は口を開けば純血の誇



りがと煩いし、兄は自分たちが世界の中心だと思い込んでいる」

私はその場でクルリと回ると、レイセンの手を取る。

「そんな中、こんな面白そうなことが舞い込んできた。安心しなさいレイセン。ペットにはしてあげられないけど、きつと私が今の現状をどうにかしてあげるわ」

「本当ですか!？」

レイセンは目を輝かせながら私の手を握り返す。

「私を誰だと思ってるの？ 玉兔に嘘をつくほど堕ちぶれちゃいないわ」

「わあー、ありがとうございますー!」

レイセンは私の手を握りながらぴよんぴよんと飛び跳ねる。

赤い目のバケモノ……やはりこの樽に食いついて正解だった。

まさかこんなにも面白いおもちゃを見つけたことができるとは。

私は内心ほくそ笑むと、レイセンと一緒に飛び跳ねた。

「それじゃあ、私は一旦城へと帰るわ。明日……いや、今日の夜また顔を出すから大人しくしておくのよ」

「はい！ わかりましたセレネ様!」

レイセンに見送られて私は穴ぐらを後にする。

懐中時計を確認すると既に時刻は三時を回っていた。

「流星に夜更かししすぎね」

私は大きな欠伸を噛み殺し、目くらましの掛かったローブを羽織る。

そして宙へと浮き上がり、スリザリンの女子寮へと戻った。

次の日の朝。私は眠たい目を擦りながら昨日の出来事を整理する。

朝起きた時は昨日のことは全て夢だったんじゃないかとも思ったが、もし夢じゃなかった場合、ひたすらに待ちぼうけを食うレイセンが余りにも可哀想だ。

私は授業を受けながら今日までに調べた隠し部屋のメモを見る。

ひとまずレイセンにはホグワーツの隠し部屋の一つへ移り住んで

もらおう。

ホグワーツの地下廊下に果物が描かれた絵画がある。

その絵画に描かれている洋梨を指でつつくと厨房への道が開けるのだが、洋梨ではなくぶどうを撫でると廊下を挟んで絵画の反対側の壁に扉が現れる。

その扉の先には教室と同じぐらいの空間が広がっているのだ。

内装や設置されている棚を見る限り、創設当初は食糧庫として使っていたのではないかと思う。

ホグワーツの地下は年中通して気温が低い。

食材を保管するにはぴったりだ。

ちなみに、現在は厨房の中に食料庫が存在する。

きつと利便性の問題で、厨房の中へと移転されたのだろう。

私は一日の授業を終えると、地下廊下へ下りて果物の絵画のぶどうを撫でる。

そして隠し部屋へと入り、今一度部屋の中を確認した。

「光源はないけど空気は循環してるわね。食材にカビが生えないように通気性を良くしていたのかしら」

元食糧庫というのはあくまで私の想像だが、あながち間違いでもないかもしれない。

私は壁の一部に変身術をかけ、ランプを設置する。

そしてその中に魔法の火を灯した。

この火は酸素や燃料を必要とせず、何ヶ月も燃え続ける。

その時点で火と呼んでよいのかどうかは迷うところだが、光源として使うには最適だ。

「後はベッドに着替えに……水回りも整備して……」

私は少しずつ何も無い部屋に物を増やしていく。

ベッドは壁の棚を変化させよう。

壁に魔法で穴を開け、トイレとバスルーム、洗面所を作る。

月の都での生活に慣れているレイセンにとってはイギリスによくある浴槽とトイレが一緒になった三点ユニットよりも、全てが分かれているセパレートタイプの方が使い勝手がいいはずだ。

水や温水は隣の厨房から引いてこよう。

下水も配管を厨房へと伸ばし、途中で合流させる。

これで水回りは完了だ。

「あと何が必要かしら……机と椅子とクローゼットと……って、ちよつと贅沢かしらね」

私はホテルの一室のような内装になった部屋を見回してクスリと笑う。

月にいた時は玉兔のために何かをしようだなんて考えもしなかっただろう。

月の民にとって玉兔はペットであり、道具であり、奴隷だ。私たちとは身分が違う。

「……きつと、レイセンから故郷を感じているのね。やっぱり、月への未練は捨てきれてないのかなあ」

私はもう一度部屋を見渡すと、殺風景な壁の一面に表の月の絵画を作り出す。

「月からは逃げられないわよ。レイセン」

私はひとりそう呟くと、隠し部屋を後にした。

## 第七話 兎の引っ越し

時計の針が天辺で重なる頃。私は上空からこつそり禁じられた森に入り、レイセンの穴ぐらを訪れていた。

「さあレイセン、引っ越しよ」

「ええ!?! 引っ越しですか? 随分いきなりですね……」

開口一番にそう宣言した私に対し、レイセンがわかりやすく困惑する。

「そりやウサギは穴の中で暮らす生物だけど、玉兎である貴方がそれに倣う必要はないでしょう? 城の中に隠し部屋を用意したわ。そこに移り住みなさい」

「あのお城の中には……ですか? 誰かに見つかってしまうんじゃない」

「目立つようなことをしなければ大丈夫。家具は既に準備してあるから、大切なものだけまとめてしまいなさい」

「りよ、了解です!」

レイセンはビシっとした敬礼を私に返すと、大慌てで鞆に荷物を詰め込み始める。

私はそれを傍目に見ながら部屋の隅に積み重ねられている壊れた月の機械を手を取った。

「そういえばこれ、どうするの? 貴方修理出来る?」

「あー、いや、私は機械工学は専門じゃなくて」

「まるで他に専門分野があるかのような言い方しないの。でもそうね……いらぬなら私が引き取ってもいいかしら? 機械工学は専門じゃないけど、これぐらいなら修理出来ると思うわ」

「専門……は薬学ですもんね」

レイセンは月の羽衣を大切そうに鞆に仕舞いながら言う。

あの手つきからして、やはりレイセンも月に未練を残しているようだった。

月へ未練がないのなら、あんな羽衣など燃やしてしまえばいいのだから。

十分もしないうちにレイセンの準備は終わり、私たちは穴ぐらの外へと出る。

そして穴ぐらの入り口を丁寧に隠した。

「さて、それじゃあ城へ向かいますようか。レイセン、貴方自分以外の姿も消すことが出来る?」

「おまかせください!」

その瞬間、レイセンと私の姿がぶれ始め、かき消える。

私は自分の体越しに真下の地面を確認し、完全に体が消えていることを確かめた。

「目くらましの呪文以上ね、これは。っと、それじゃあ着いてきて」

「あ、待ってください! 何処にいるかわからないので、手を繋いでもいいですか?」

「あー、そうね。そうしましょうか」

私は声を頼りにレイセンがいる方向へ向けて手を伸ばす。

その後、何度かペチペチとレイセンの手が触れたかと思うと、手を握られた感触がした。

「大丈夫です。掴めました」

「それじゃあ行きましょうか」

私はレイセンの手を軽く引つ張るようにして空へと飛び立つ。

レイセンもそれに合わせて浮き上がったようで、重量物を引き上げるような手応えは最初だけだった。

私たち二人は一度数百メートルほどの高度まで上昇し、ホグワーツ城の一番高い塔へと舞い降りる。

そして手を繋いだまま階段を降り、城の中へと入った。

「そう言えば、足音や話し声なんだけど——」

「周囲三メートル以上に拡散しないように波長を調整してあります。ですので普通に喋って頂いて大丈夫です」

「便利ね。綿月のところでも重宝されたんじゃない?」

波長を操る能力を使えば、偵察活動がかなりやりやすくなる。

それに戦闘にも応用出来るかなり強力な能力だ。

「そう、ですね。依姫様はよく私に地上への斥候を命じました。アメ

リカの宇宙開発局に潜入して資料を写してこいとか」

「ああ、それじゃああの資料は貴方が」

「ご存じで？」

「依姫がよく桃と一緒に大量の資料を持ってうちを訪ねてたわ」

「依姫様が言っていた航空宇宙工学に詳しい知人ってセレネ様のことだったんですね」

私は玄関ホールへと続く階段を下りる。

「そうね。他にも誰かに相談していたかもしれないけれど。依姫は頭は悪くないけど専門は神学だし。でもそういう意味では豊姫はそこそこ詳しいはずよね？ あの子の専門は量子力学でしょ？」

「ああ、いえ。そういった難しい話は聞いたことがなく……。でも、お二人で話をされているところは何度か見ましたね」

まあ、豊姫の能力的にロケットにはあまり興味がないのかもしれないが。

豊姫は月の都でもトップクラスの移動に関する能力を持っている。量子的な振る舞いをマクロな世界に適用させ、限りなく可能性の低いところに物質をワープさせる。

彼女がその気を出せば、月の都を丸ごと地上へワープさせることも可能だろう。

「なんにしてもその能力があれば昼間に Hogwarts を歩いてても大丈夫そうね。走り回る生徒にぶつからなければだけど。今までも大広間でこっそり生徒のご飯をつまみ食いしていたんでしょ？」

「森での狩りも試してみたんですが……やっぱり自らが生きるために何かを殺すというのは本能的にできないです」

月で生まれ、月で育った者は穢れに対して強い抵抗感を示すものが多い。

生きること、死ぬことが罪であるとされている月において自らが生きるために他者を殺す行為はその最たるものだ。

自分勝手に他人を殺す方がまだ穢れは少ない。

まあ、それでも玉兎は月の民に比べるとその身が穢れることに関して無頓着な者も多いが。

「まあ、それは仕方がないわね。文明のレベルや価値観があまりにも違いすぎるし。これからは……そうね。何か考えるわ」

食事の時間にこっさりレイセンの分の食事を取ってくるというのもありだが、私のような少食の人間が多く料理を抱え込んでいたら流石に怪しまれる。

だとしたら厨房から直接食事を持ってくる方が効率的か。

私たちは地下へ下りると、果物の絵画のぶどうを撫でる。

その瞬間、背後でカチンという金属音が響き、壁の一部が開いた。

「こんな感じでこの絵画のぶどうを撫でると隠し部屋に入れるわ」

「凄い巧妙に隠してますね……なんで学校にこんな仕掛けがあるんでしょう?」

私たちが部屋へ入ると一人で魔法のランタンに炎が灯る。

その淡い光はぼんやりと部屋全体を照らした。

「あまり広い部屋じゃないけど我慢して頂戴」

「そんな! 素敵な部屋だと思います!」

レイセンが能力を解いたのか、扉が閉まると同時に透明になって私の姿が元に戻る。

レイセンは部屋のあちこちを見て回ると、キラキラと目を輝かせた。

「お城の地下にこんな部屋が……凄いですね。要人用のセーフハウスでしょうか?」

「いえ、それはないでしょうね。私の予想ではここは使われなくなつた食糧庫よ」

「食糧庫ですか? でも、なんで食糧庫にベッドや机が……」

「昨日私が用意したのよ。気に入った?」

私がそう言うと、レイセンは首を傾げる。

「は、はい……でも、用意してどうやって?」

私は小さくため息をつくとき、ローブから杖を取り出す。

そして近くの壁に向けておもむろに杖を振った。

その瞬間、壁の一部が変化し、小物置きへと変化する。

レイセンはその様子を見て目を丸くした。

「壁が、変形した……それがセレネ様の能力……」

「違うわ。魔法よ。イギリス魔法界では変身術と呼ばれる技術。この部屋にあるあらゆるものは変身術によって作り出されたものよ」

「便利ですね魔法」

「便利なよ魔法」

レイセンは石材を変身させて出来たベッドのマットレスを何度か押し込み硬さを確認する。

まあ、変身術で作った家具にももちろん弱点はある。

修復呪文で修理が出来ないし、何より数十年もすれば魔法が解けて石材へと戻ってしまう。

だが、少しの間だけ使用するなら必要十分だ。

「まあ、というわけでしばらくはここで生活しなさいな」

「しばらく……というところ？」

「貴方の定住地が見つかるまで。どこか良い場所があるといいんだけど……希望はある？」

レイセンはベッドの脇に背負っていた鞆を降ろすと、首を捻り始める。

「そうですね……言葉が通じて、人間じゃなくても迫害を受けなくて……過ごしやすい気候のところがいいですね」

「言葉が……って、貴方何語なら話せるの？」

「今喋っている英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語……それと月の都の公用語です」

「じゃあ日本語も話せるのね」

英語が話せるなら結構な数の国を選択肢にあげることが出来るが、月の都と一番生活のスタイルが似ているのは日本だろうか。

日本と言えば敗戦後高度経済成長を遂げ、今ではかなり裕福な国になっっている。

アメリカという大きな後ろ盾と憲法による戦争の放棄。

戦いが嫌いなレイセンにはピッタリの国かもしれない。

「だとしたら日本に絞って考えましょう。あの国は月と生活様式が似ているし。それに――」



あの国には結界に隠された人ならざる者たちの理想郷がある。

幻想郷と呼ばれるその土地は、かつて月に侵攻を仕掛けてきた妖怪、八雲紫が管理する妖怪のための土地だ。

マグルが暮らす日本社会にレイセンを放り込むよりかは、その幻想郷へ放り込んだ方が窮屈な思いをせずに生活出来るだろう。

問題はその土地が日本の何処にあるか、結界を越えるにはどうすれば良いかがまるでわからないことだろうか。

「日本……ですか。日本というと、ここイギリスと同じ島国ですよね」「そうね。極東にある島国よ」

「なるほど……でも、そこまではどうやって?」

「飛行機で行くのが無難でしょうね。私は未成年だからまだ匂いが付いてるし。それに日本で居住地を探したら結構時間が取れた方が良いから……来年の夏休暇かしら」

「夏……それじゃあ、まるっと一年ぐらいはここで生活することになるということですね」

一週間ほどしかないクリスマス休暇では、日本に渡って幻想郷を探すには少々短すぎる。

それならば、来年の夏まで幻想郷の情報を収集する方がいいだろう。

「あ、そうだ。食料問題が解決していなかったわね」

「セレネ様のことですから何か秘策があるんですよ?」

「秘策ってほどじゃないけど……レイセン、波長を操る力で私そっくりに変身出来る?」

「セレネ様にですか?」

レイセンは私の周りをくるくると回って全身を観察する。

「セレネ様の髪、ほんと綺麗ですよね。白くてサラサラで……。そう言えば、お姿は月にいた頃とあまり変わりませんね」

「流石に身長は低くなってるけどね。この姿は私の魂に刻まれた形だから、転生したところで大きくは変わらないわ。でも、一年で何センチも身長が伸びるのは流石に気持ち悪いけど」

穢れのない月では成長も老化もしない。

厳密には少しずつ歳を取ってはいるのだが、その速度も地上の何千分の一だ。

「その辺の感覚はよくわかりません。玉兎は普通に成長しますし、寿命で死にますから」

「それでも地上にいる人間よりかはかなり長生きなんだけどね。玉兎の寿命は三百年ぐらいだったかしら」

「何故私や綿月のような月の民とは違い、穢れのない月で玉兎が寿命で死ぬのか。」

「それは至って簡単な理由で、玉兎の食事に老化を促進する薬を混ぜているからである。」

玉兎の寿命は月の民たちによってコントロールされているのだ。

「よし、それじゃあ行きますよ」

その瞬間、レイセンの姿が空間ごとブレ始める。

そのブレが収まる頃には私と瓜二つの存在へと姿が変わっていた。

「と、こんな感じでどうでしょうか？」

レイセンは私と同じような声で言った。

「ええ、いいわね。これなら十分騙せるわ」

「騙す？ 誰をです？」

私は扉の奥、廊下を挟んで反対側にある厨房の方向を指差す。

「厨房の住人たちをよ」

「厨房？ それでは、そこから直接食べ物を手に入れるということでしょうか」

「その通り。魔法界には屋敷しもべ妖精と呼ばれている、好きで奴隷階級にいる魔法生物がいるの。彼らは人に尽くすのが好きで、厨房の中に入るとかなりの歓待を受けられるわ」

「奴隷でいることが好きだなんて、変わった生物ですね」

玉兎も同じようなものだとは思うのだが、レイセンが気にしていないなら特に言及はしないでおう。

「私も何度か顔を出してるし、その姿で厨房へ入れば彼らは貴方をセレネ・ブラックだと認識するでしょうね」

「なるほど。流石はセレネ様です。それで、厨房へはどのように……」

「この部屋に入る時に触った絵画があるでしょう？ さつきはぶどうを撫でたけど、厨房へ入るには洋梨をくすぐるの。そうすると絵画が扉のように開く。その中が厨房よ」

レイセンは洋梨、洋梨と何回か呟く。

「あと注意すべきは……そうね。私の兄と鉢合わせにならないように気をつけなさい」

「兄……ご兄弟がいらっしやるのですか？」

「シリウス・ブラック。ブラック家としての兄よ。きつと彼らもそのうち厨房への入り方を見つけるわ。だからまあ、そうね。厨房へ顔を出すのは授業中の方がいいかもね」

レイセンの姿がぶれ、元の姿に戻る。

レイセンは意外そうな顔をしつつも頷いた。

「わかりました。セレネ様のお兄様には十分注意します」

「さて……と。こんなものかしら。着替えに関しては Hogwarts の制服を着るか用意しておくから……これで衣食住揃ったわね」

「はい！ 何から何までありがとうございます！」

「定期的に顔を出すようにするから何かあったらその時に。それと、ずっと閉じこもっているとは言わないから、出歩く際は能力で姿を隠しなさいね」

「はい！」

これで、当分の間は大丈夫だろう。

あとは来年の夏に向けて幻想郷の情報を探るだけだ。

私はレイセンに別れを告げると、隠し部屋を後にした。

## 第八話 家出少女の集うホテル

クリスマスが近づいてくるにつれて、ホグワーツの校庭は次第に雪で埋もれていった。

スリザリンの談話室は地下にあるためそこまで冷え込むことはないが、それでも暖炉の近くには多くの生徒が集まっている。

「そういえば、セレネはクリスマスは帰るのか？」

談話室の隅、暖炉から一番遠く離れたソファーに腰掛けていた私に、同級生のバーティが聞いてくる。

私は羽ペンに魔法史の課題を終わらせるよう魔法を掛けると、バーティに対して言った。

「帰ろうと思っっているわ。入学一年目だし。両親も学校での生活のことを聞きたいでしょうしね」

「へえ、意外だな」

「意外って、何がよ」

私は腰まで伸ばしている白い髪の手先を弄りながら聞き返す。

バーティは私の横で忙しく動く羽ペンを見ながら言った。

「セレネの口から両親に気を使うような言葉が出てくる事がだよ。もつとドライな印象がある」

「両親ぐらい人並みには慕っているわ。この歳まで育てられた恩義もあるし。それに、一つ上の兄は家には帰らないでしょうしね」

私は羽ペンが処理し終わった魔法史の宿題に目を通し、羊皮紙を丸めて鞆の中に仕舞う。

そしてまた新しい羊皮紙を取り出すと、今度は変身術の課題を終わらせるために羽ペンに魔法を掛けた。

「ああ、あの有名な兄さんな。スリザリンじゃ悪名高きって感じだけど」

「正義とか勇気とか聞こえの良いことを並べてるけど、実際はただの悪ガキよね。知ってる？ お兄様たち、最近スネイプ先輩をいじめて遊んでいるそうよ」

「スネイプ先輩って……二年生のセブルス・スネイプ？」

「そう」

スネイプはスリザリンの二年生だ。

どういう因縁があるのかは知らないが、事あるごとにグリフィン・ドールの四人組からちよっかいを掛けられている。

そして、それをグリフィン・ドールのリリー・エバンスというマグル生まれが諫めるとというのが最近よく見る流れだった。

「なんでスネイプ先輩は絡まれるんだろうな？ あの人、普通に優秀じゃないか？」

「さあ、その辺の評価は知らないけど……そういえば、バーティは実家に帰るの？」

「ん？ うん。親父が帰ってこいつてうるさくて」

バーティの実家、クラウチ家は魔法界でも有数の名家だ。

特にバーティの父親は魔法省で高い地位にいる。

家同士の付き合いなど、色々忙しいのだろう。

そういう意味ではブラック家は落ち目だ。

父親のオリオン・ブラックはなんとかブラック家を復興させようと奔走しているが、所詮は血の繋がりが取り柄の無いような家だ。

長男のシリウスもきつとろくな相手を見つけないだろうし、私に至っては結婚する気などさらさらない。

もしかしたらブラック家の本家は私たちの代で終わるかもしれない。

「クラウチ家のお坊ちゃんは大変ね」

「ブラック家のお嬢様に言われたくはないね。ところでだけど……」

バーティは先程からずっと眺めていた羽ペンを指さす。

「それ、どこで売ってるの？」

「欲しいならあげるけど」

私は羽ペンを手に取ると、バーティに手渡す。

バーティは羽ペンをしげしげと眺めると、大切そうにローブに仕舞った。

まあ、種明かしをすると、羽ペン自体に自動筆記機能があるわけではない。

羽ペンには、私の意思通りに動いていただけだ。

私は鞆の中から新しい羽ペンを取り出すと、もう一度魔法を掛けて変身術の宿題を再開させた。

クリスマス休暇当日。

私はホグワーツ特急のコンパートメントの一つに人払いの魔法を掛け、そこにレイセンと一緒に乗り込んでいた。

レイセンは落ち着かないようにそわそわとあちこちを見回している。

月の都に列車はないため、このようなローテクな移動手段が珍しいのだろう。

「でも、意外でした。私はホグワーツでお留守番だと思っていたので」レイセンは窓の外から視線を戻すと、ほっとした表情で言う。

「でも良かったんでしょうか。実家への帰省へお供させていただけ」

「あのねえ。貴方のためにロンドンへ帰るのよ。私が実家に帰るためじゃないわ」

ポカンとしているレイセンに、私はため息交じりに説明する。

「今回帰省する一番の理由は幻想郷の手掛かりを探すためよ。ホグワーツの図書室は禁書の棚まで一通り探してみたけど、結局幻想郷の手掛かりを得ることは出来なかった。まあ、あまり期待してはなかったけど」

「だとすると、どのように調べるのです？ ロンドンにもっと大きな図書館があるとか？」

「いや、書物を調べるのはもうおしまい。これ以上どれだけ本を読み漁ろうが、幻想郷の手掛かりは掴めなさそうだし」

「では、どうするのです？」

首を傾げるレイセンに、私は言った。

「ここから先は聞き込み。つまり、知ってそうな人に聞くのよ」

「知ってる人に聞く……って、思った以上に原始的ですね」

「これが意外と馬鹿にできないものよ。本に書くまでもない、書き残すにはあまりにも不確かな情報というものもある」

幻想郷とは隠された異世界だ。

そもそも本に書き残すほど確かな情報が出回っていないのかもしれない。

まあ、イギリスの魔法使いが日本に興味がないだけかもしれないが。

「まあなんにしても、本で探すよりかは情報を得られやすいはず」

「なるほど……」

レイセンは分かったかのような顔で頷いているが、あの様子ではきつと半分も理解出来ていない。

こんな様子では本当に一人で幻想郷へと送り出しているか不安になるが、かと言って死ぬまで私が面倒を見るわけにもいかない。

まあこれでもアメリカの航空宇宙局に単独で潜入したりもしていたようだし、一人じゃないと才能を發揮できないだけだろう。

私は小さくため息を吐くと、お菓子の移動販売が来るのを待った。

キングズ・クロスに降り立った私とレイセンは、人混みから逃れるように駅の外へと移動すると、そのままロンドンの街を歩く。

ホグワーツでは部外者でしかないレイセンだが、耳さえ隠してしまえば何処にでもいるようなハイスクールに通う少女だ。

マグルの街ではそこまで目立つことはない。いや、むしろ私の方が目立つくらいである。

「この後私はどうすればいいですか？ セレネ様は実家へと帰られますよね？」

レイセンが私の少し後方を歩きながら聞いてくる。

私は薄汚れた孤児院を横目に見ながら、レイセンに革製の小さな財布を手渡した。

「これは？」

「マグルのお金よ。いいホテルを紹介するから、この冬はそこに泊ま

りなさい。私は家の事情もあるし、グリモールド・プレイスにある実家から通うことになるわ」

レイセンは歩きながら財布を開き、中に入っている金額を確認する。

「レイセン貴方、スターリングポンドは分かる？」

「一ポンドで二百四十ペンスですよ？」

「去年まではね。今は一ポンド百ペンスになったわ」

なるほど、とレイセンは財布をブレザーのポケットに仕舞う。

「ということは、シリングは廃止ですか？」

「ええ、補助単位はペニーだけよ。まあ、まだ変更されて日も経ってないから、多少間違えてもそこまで恥をかくということも無いと思うわ。つと、ここね」

私は大通りから少し外れた位置にあるホテルの前で立ち止まる。

そしてエントランスの階段を少し上り歩道を開けると、レイセンに言った。

「ここは身分の確認がおおざっぱというか、お金さえ持っていれば子供でも部屋を借りることができるとして有名なホテルよ。取り敢えずこの冬、ホグワーツに戻るまではここで宿を取ればいいわ」

「え？ それって色々大丈夫なんです？」

「大丈夫でしょ。きっとよくいる家出少女の一人ぐらいにしか見られないわ」

レイセンは半信半疑といった顔をしながらホテルの中に入っていく。

「明日の朝迎えにくるわね」

私はそんなレイセンの背中に声を掛けると、自分の家のある方へと足を向けた。

家のあるグリモールド・プレイスまではそんなに遠くはない。

私は一度大通りに戻ると、今度は人通りの少ない路地へと入っていく。

そのまま何度か道を曲がり、十分も歩かないうちに家の前へと辿り着いた。



「さて」

私は家の扉を開き、中へと入る。

そこには、私と比べても半分ほどの背丈しかない魔法生物、屋敷しもべ妖精のクリーチャーが立っていた。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「あら、クリーチャー。元気にやってる？」

私は提げていた鞆をクリーチャーに手渡すと、玄関ホールを抜け階段を上る。

クリーチャーは私の後ろを歩きながら私の質問に答えた。

「クリーチャーめには勿体ないお言葉です」

「あら、そんなことないわ。貴方が倒れたら、誰がこの家の家事をするの？ お父様にはそんな時間はないし、あのお母様に家事ができるとも思えないし」

「クリーチャーめがいなくなったとしても、すぐに新しい屋敷しもべ妖精が現れるでしょうとも」

それはどうだろうか。

ひと昔前ならまだしも、今のブラック家に屋敷しもべ妖精が新しく住み着くほどの権威があるとは思えない。

きつとここに居るクリーチャーがブラック家に住み着く最後の屋敷しもべ妖精になるだろう。

「そうだとしても、体は労わらなくてはダメよ。ということ、改めて聞いわ。病気や怪我をしていないでしょうね？」

「クリーチャーめはいたく健康でございます」

「そう。それは何よりね」

私はクリーチャーを引き連れたまま二階にある自分の部屋へと入る。

クリーチャーは私の鞆を机の横に丁寧に置くと、私の部屋を後にしようとした。

「そう言えば、お父様とお母様は？ お父様はきつと仕事よね？」

「お察しの通りオリオン様はまだお仕事からお戻りになられておりません。本日もいつもと同じように帰りは遅くなることでしょう。」

ヴァルブルグ様はマルフォイ家の御家様と食事に行かれております。こちらでも何時にお戻りになられるかまでは……」

「そう。まあどうでもいいわ。しばらくしたらダイニングへ下りるから、夕食の準備をしておいて頂戴」

「かしこまりました。本日も腕を振るわせていただきます」

クリーチャーは恭しく頭を下げると、私の部屋を出ていく。

私は小さく息を吐き、ベッドに横になった。

父親のオリオン・ブラックは貿易業を営んでいる。

仕事の内容は主に魔法薬の材料の輸入、輸出だ。

魔法薬の調合に使う材料の中にはイギリスでは取れない素材も多い。

そのようなものを仕入れたり、逆にイギリスでしか取れない材料を国外に輸出したりしている。

故に国外に出張していることが多く、週に一度家に帰ってくればいいほうだ。

反対に母親のヴァルブルグ・ブラックは専業主婦だ。

基本的には夫のオリオンに代わって親戚付き合いや社交界への出席など、家に関わることで動いていることが多い。

今日の食事会もそのようなことの一環だろう。

夫に代わって家を背負っているという自覚があるせいかは分からないが、ブラック家の家訓や純血主義に否定的なシリウスとは仲が悪い。

なんとか矯正できないかと苦心しているようだが、もう遅いだろう。

ホグワーツに行く前ならまだしも、ホグワーツに入学されてしまっ  
ては親というものは子供の教育に殆ど影響を残すことができない。

ヴァルブルグが何を言おうが、ホグワーツに戻ればそんな言葉はあ  
のグリフィンドールの仲間たちが塗りつぶしてしまおうだろう。

「まあ、そうなるように仕向けたのは私だけだ」

私はベッドから起き上がると部屋を出てダイニングへと向かう。

ダイニングには数多くの料理が美味しそうに湯気を立てており、今

まさにクリーチャーがカトラリーを並べ終わったところだった。

「いままさにお食事の準備が整いましたとお部屋に伺うところでございます」

「そう。いいタイミングね」

私は椅子に座り、ナイフとフォークを手取る。

そして順番に皿の上に盛られた料理を片付け始めた。

「そういえば、ホグワーツで貴方のお仲間に出会ったわ」

「あの城には多くの屋敷しもべ妖精が住み着いております故。それに、多くの屋敷しもべ妖精は権力者の屋敷に住み着く前にホグワーツで修業を行うものです」

「ああ、なるほど。貴方もホグワーツで働いていたことがあるの？」

「大変昔の話でございます」

だとしたら、クリーチャーの料理が美味しいのにも納得がいくというものだ。

「そう。……そう言えばクリーチャー。貴方、日本にある隠された秘境の話は知っている？」

私はふと思い立ち、クリーチャーにそんな質問を飛ばす。

クリーチャーは少し頭を捻ったが、フルフルと首を横に振った。

「いえ、不勉強ながらそのような話は聞いたことがございません」

「ふーん。ま、そうよね。特に期待してはいなかったから別にいいわ。あとそれと、明日は朝からダイアゴン横丁へ遊びに行くから。もしお母様が帰ってきたらそう伝えて頂戴」

「かしこまりました」

私はクリーチャーが頭を下げたのを確認すると、夕食を食べるのに集中した。

## 第九話 魔法使いの街

ロンドンへ帰省した次の日。私は朝自分のベッドの上で起きると、身支度を済ませて自分の部屋を出る。

そして洗面所で顔を洗い、朝食を食べにダイニングへと顔を出した。

「あらセレネ。お帰りなさい。昨日はお迎えに行けなくてごめんないね」

「ただいま戻りました。お母様。いえ、お母様がお忙しいのは私も承知の上ですのぞ」

私は椅子に座ると、用意されていた朝食を食べ始める。

ヴァルブルガはそんな私を愛おしそうに見ながら紅茶を飲んでいった。

「そう言えば昨日の夜クリーチャーが言っていたけど、今日はダイアゴン横丁へ遊びに行くらしいじゃない。珍しいわね。貴方が自分から外に出ようだなんて」

「そうでしょうか……ホグワーツに通い始めて、少しずつではありませんが、私も変わってきているのかもしれないね」

確かにホグワーツに入学する前までは、殆ど外出することなく自分の部屋に閉じこもって生活していた。

「ダイアゴン横丁には貴方一人で行くの？ それとも、誰かお友達と？」

「ホグワーツで仲良くなった友達と一緒に行く予定です」

「そう、それならいいのだけれど……」

ヴァルブルガはほっと息を吐くと、改めて私に聞く。

「そう言えば、ホグワーツでの話を聞いていなかったわね。聞くまでもないと思うけど、勿論寮はスリザリンよね？」

「はい。お父様やお母様と同じスリザリンです」

「そう、そうよね」

ヴァルブルガの顔に安堵の表情が浮かぶ。

まあ、それもそのはずだ。反骨心の塊である兄のシリウスは家の伝

統とは異なりグリフィンドールに組分けされた。

ヴァルブルガは私もスリザリン以外に組分けされるのではないかと心配していたのだろう。

「スリザリンと言えば、マルフォイ家のご子息が監督生を務めているはずね」

「ルシウス監督生ですね。はい、よくして頂いています」

「家の付き合いもあるし、彼とは仲良くなさい。……そういえばセレネ。貴方お友達と一緒にダイアゴン横丁に行くと言っていたけど、そのお友達はどこの家の子なの？」

「スリザリン寮のルームメイトですよ。純血の家の子です」

「そう、ならいいわ」

あえて名前は言わなかったが、ヴァルブルガは納得した。

彼女からしたら大切なのは、スリザリンかそうでないか、純血かそうでないかの二つだけだ。

「お小遣いはいる？ 暗くなる前に帰ってくるのよ？」

「ご心配ありがとうございます。夕食までには帰ってくる予定です」

私は食パンを一斤食べ終わると、紅茶で喉を潤す。

そしてナフキンで口を拭い、席を立った。

「それじゃあ行ってまいります」

「気を付けるのよ。何かあったら、ブラック家の名前をしつかり出して、『私は純血です』って言うのよ？」

ヴァルブルガの言う通り、死喰い人に襲われそうになった場合はそのような対処の仕方が正解だろう。

死喰い人にはブラック家に縁のある者も多い。私がブラック家の人間だということをはっきり伝えれば、彼らも私に手出しはしないはずだ。

「はい。心得ております。それでは」

私はヴァルブルガに一礼すると、ダイニングを後にする。

そして一度部屋へ戻り鞆を手に取ると、階段を下り玄関ホールから家を出た。

家を出た私は昨日歩いた道を辿るようにしてレイセンの泊まっているホテルへと向かう。

クリスマスも近いにも関わらず、ロンドンの街は忙しそうに動いていた。

道路には多くの車が走り、労働者を職場へと運んでいく。歩道を歩くマグル達も、皆腕に付けた時計を気にしながらせかせかと歩いていった。

私はそんなマグル達を横目に見ながらレイセンの泊まっているホテルのエントランスへと入る。

そして受付にいる女性へと声を掛けた。

「すみません。友達がここに泊まっていると思うのですが」  
受付の女性は読んでいた新聞を畳むと、訝し気な表情を私に向けてくる。

「その友達の名前は？」

「レイセン」

女性は手元のバインダーに指を走らせると、手慣れた手つきで受話器を取り番号をプッシュする。

十秒ほどの沈黙の後、面倒くさそうな口調で女性が話し始めた。

「あー、レイセンさん？ 貴方の友達を名乗る白い髪の女の子がフロントに来てますが？ あー、はい。通していいんですね？」

女性はガチャンと受話器を置くと、新聞を広げ始める。

「三〇二号室」

そして端的に部屋の番号を伝えた。

「ありがとうございます」

私は女性に対してぺこりと頭を下げると、エレベータに乗り込み三階へと上がる。

そして少し通路を歩き、三〇二号室の扉をノックした。

「今開けます！」

扉の奥からそんな声と共にバタバタといった足音が聞こえてくる。

そして軋むような扉の開閉音と共に、下着姿のレイセンが顔を出した。

「すみません。フロントからの電話で起きたばかりです」

「ホグワーツで自堕落な生活を送りすぎているんじゃない？ まあいいわ。ゆつくり準備なさい」

私は部屋の中へと入ると、先程までレイセンが寝ていたのであろうベッドに腰かける。

レイセンはいそいそと服を着こみながら言った。

「そういえば、今日はどこへ行くんです？」

「ダイアゴン横丁……魔法使いの店が立ち並ぶ通りよ。そこで心当たりをいくつか回る予定」

「魔法使いの横丁ですか。ロンドンにそんな通りがあるんですね。普通の人間は不思議に思わないでしょうか」

「ホグワーツ同様隠されているわ。魔法結社が数多く残るイギリスではあるけど、流石に本物の魔法使いの存在を受け入れられるようなマグルばかりではないわ」

もつとも、そのような魔術結社に本物の魔法使いが紛れ込んでいないという保証はないが。

マグルたちが考える以上に魔法使いというのはマグルの街に紛れ込んでいるものだ。

レイセンの準備が終わると同時に、私たちは一度ホテルを後にしロンドンの街を歩く。

ホテルからダイアゴン横丁の入り口まではそう遠く離れているわけではない。

特に会話もないまま歩くこと数分、私たちは寂れたパブの前に到着した。

「漏れ鍋……。ええっと、この店ですか？」

レイセンは今にも外れそうな表札を見上げながら言う。

確かにこの店は営業しているような雰囲気をまるで出していない。

だが、それはあくまでマグル避けのためだ。

実際にはこのパブはダイアゴン横丁で一番有名なパブだと言っても過言ではないだろう。

私は少々引き気味なレイセンを引き連れて店の中に入った。

店の中はマグルの街から見た外見とは裏腹に店内は隅々まで掃除が行き届いている。

テーブルやカウンターでは宿泊客で有りそうな魔法使いが何人かがパンを限りながら紅茶を飲んでいた。

「へえ、なんだか不思議な感じですね」

レイセンは店の中を物珍しそうに見回している。

その様子を不審に思ったのか、店主であるトムがカウンターから声を掛けてきた。

「お嬢ちゃんたち、ご注文は？」

「え？ えつとあのその……」

レイセンは分かりやすく慌てふためき、助けを求めするように私の方を見る。

私は心の中で小さくため息を吐くと、コートの内ポケットに差している杖を少し見せながら言った。

「店の奥に用事があった」

「ああなんだ。学生さんかい？ そうか、ホグワーツは昨日からクリスマス休暇か。あんまり遅くならないようにな。それと、できれば帰り際にまた一声かけていってくれ」

「はい。わかりました」

私は店主に頭を下げると、レイセンの手を引いて中庭の方へと進む。

そしてほっと胸を撫でおろしているレイセンを尻目に、コートから杖を取り出して目の前のレンガの壁に魔法を掛けた。

その瞬間レンガの壁の表面が変化し、櫛の木の扉がはめ込まれる。

私は扉のドアノブを掴むと、ゆっくりと扉を押し開けた。

「さて、ここから先は魔法使いの街よ」

「おお……確かに全然雰囲気違いますね」



レイセンは珍しいものに釣られるようにふらふらと通りを進み始める。

私は無理矢理魔法で変質させた扉を元のレンガに戻すと既に迷子になりそうな様子のレイセンの後を追った。

「ホグワーツの近くにも魔法使いの村がありました、そこはまた全然雰囲気違いますね」

「この通りにはグリーンゴッツもあるし、それにイギリス魔法省も近いしね。辺境のホグズミードと比べてはダメよ」

まあそれでも、ヴォルデモート卿と名乗る闇の魔法使いが台頭する前に比べると随分活気は落ちているらしいが。

「さて、それじゃあ聞き込みを始めましょうか」

「どうします？ 二手に分かれて手当たり次第に――」

「というわけにはいかないわ。知ってそうな人に絞って聞き込みを行うべきよ」

魔法界のことを何も知らないレイセンが一人でフラフラと聞き込みを行なったら、九割九分の確率でトラブルに巻き込まれる。

それならばまだ見た目の幼い私の保護者の役を演じてもらった方がまだいい。

私はレイセンの手を握ると、一つずつ心当たりを周り始めた。

「書店、時計屋、薬の材料屋、杖屋、銀行のゴブリン……うーん、思った以上に成果が得られませんね」

聞き込みを始めて三時間経った昼過ぎ。

私とレイセンはアイスクリーム屋の日当たりのよいテラスで紅茶とクッキーを食べながら集めた情報を整理していた。

「それっぽい話はゼロ。うーん、期待はしていなかったけど、思ったようにいかないものね」

「心当たりは先程の銀行で全部なんですよね？ だとすると、ここにはもう手掛かりはなさそうですか？」

レイセンはクッキーを齧りながら私に聞く。

私は手に持っていたティーカップをソーサーに置くと、頬杖をついた。

「ダイアゴン横丁の心当たりはこれで終わり」

「そうですか……だとしたら今日はもうホテルに——」

「いや、実を言うと本命はこれからの。この横丁のすぐ近くにノクターン横丁っていう違う横丁があるわ。そこに私の父親が鼻屑にしている古物商がある。最後にそこに顔を出すことにしましょう」

私はクツキーの残りを口の中に放り込むと、紅茶で胃の中へと流し込む。

それを見てレイセンも慌てて紅茶を飲み干した。

「あ、そうだ。一応用心として姿を隠していきましよう」

「姿と音を消して……ということですよ」

「このこと比べると少し治安の悪い通りだから。それに私の容姿はどうしても目立つし。私がブラック家の娘であることを知っている者は手を出してこないとは思うけど」

それに、私がノクターン横丁に出入りしていたという噂が流れるのも出来るだけ避けたいところだ。

私とレイセンはアイスクリーム屋に代金を払い、人目のつかない路地裏へと移動する。

そしてレイセンに対して右手を差し出した。

「ん」

「あ、はい」

レイセンはその手を握ると、能力を使って自分と私の姿を透明にする。

私は自分の姿が完全に消えたことを確認し、レイセンの手を引っ張って宙に浮きあがった。

「通りを歩いたら人にぶつかる可能性もあるし、目的の店まで空を飛んでいくわよ」

「あ、はい！ 手を離さないでくださいね」

私の手を握るレイセンの手に力が籠る。

確かに空中で手を放してしまったら合流するのに時間が掛かって

しまう。

私もすっかりとレイセンの手を握り直すと、鼻肩の古物商、ボージン&バークスへと飛び始めた。

空を飛んでいるということもあり、ボージン&バークスへは五分もしないうちに到着した。

私たちはまた人の気配がしない路地裏へと入り込むと、そこで透明化を解除する。

そして何食わぬ顔で路地裏から出て、向かいにあるボージン&バークスへと入った。

「……、——ッ!? これはこれはいらっしやいませセレネお嬢さま。本日はお日柄もよく……」

店主であるボージンは店に入ってきたのが私であることに気が付くと、カウンターから飛び出してくる。

滅多に外に出ることがない私だが、父親に連れられてこの店に顔を出したことは何度かあった。

「お久しぶりですボージンさん。お変わりないですか?」

「おかげさまで。貴方の御父上とは良き商売をさせて頂いております。……本日はオリオン氏はご一緒じゃないので?」

ボージンは私の横にいるレイセンの方をチラ見しつつそう聞く。

レイセンはその視線を受けて、私の陰に隠れるように一歩引いた。

「お父様はお仕事です。今日はボージンさんに聞きたいことがあつて——」

「聞きたいこと、ですか。お力になれるとよいですが……ああ、私としたことが! すぐに何か温かいものを——」

「いえ、先程フロリアン・フォーテスキューでお茶してきたばかりですので遠慮させて頂きます。それよりも……」

私は店内に人がいないことを確認すると、ボージンに対して聞いた。

「日本にある秘境の話について何かご存じなことはありませんか?」

「日本……日本でございますか。浮世絵や陶磁器などを取り扱ったことはありますが、詳しい話となると何とも……」

「ボージンさんでもダメですか……だとしたら日本人の知り合い、もしくは日本魔法省などにコネクションなどは？」

「生憎そのような知り合いは私の周囲にはおりません。ですが……いや、これはあまりにも参考ににならない」

「ボージンは何かを思い出したようだが、すぐに首をブンブンと振ってしまう。」

「私はその様子から手掛かりの匂いを感じ取り、すぐさまボージンに聞いた。」

「些細なことでもいいんです。何か心当たりが？」

「ああいえ、よく東洋のものを買っていかれる客がいるというだけでございまして。セレネお嬢さまのお力になれるような情報ではないと……」

「どのような方なのです？」

「ボージンは少々迷うように視線を泳がせる。」

「だが、私の視線に負けたのか、諦めたように話し始めた。」

「若い女性です。長く赤い髪に女性にしては長身。顔つきからして東洋人だとは思われますが……」

「名前や、どのような仕事をしているかなどは？」

「いえ、そこまでは。ですが、結構な金額の物でも値引き交渉もせず買っていかれるので相当な富裕層であることは確かでございます」

「女性で、東洋人で、赤髪で、富裕層。」

「それだけの特徴があれば、人を探すには十分だ。」

「ありがとうございます。やっぱりボージンさんを頼って正解でした」

「私はボージンに対してニコリと微笑む。」

「ボージンは恥ずかしそうに視線を逸らすと、こめかみを指で掻きながら言った。」

「この程度のことでしたらいつでもお申し付けください」

「ええ、今後とも鼻屑にさせて頂きます。これは少ないですがお礼で」

す」

私はコートポケットから金貨の入った小袋を取り出すと、ボージンに手渡す。

ボージンは小袋の中身を確認し意地汚い笑みを浮かべた。

うん、これぐらい自分の欲望に正直な人間の方が扱いやすいというものだ。

「それじゃあ、今日の所は失礼させて頂きます。レイセン、行くわよ」

「あ、はい！」

いつの間にか店の奥に置いてあるキャビネットを弄っていたレイセンが私の方へと駆けてくる。

私はもう一度ボージンに軽く頭を下げ、ボージン&ボックスを後にした。

## 第十話 赤い髪の東洋人

ボージン&バークスを出た私たちは、また人のいない路地裏へと入り込みレイセンの能力で姿と音を消す。

そして空を飛んでグリーンゴツ脇の路地裏へと降り立ち、ダイアゴン横丁の大通りへと戻った。

「赤い髪の東洋人の女性なんてそう沢山いないですよ。しかも富裕層となればさらに数が絞れるはずですよ」

レイセンは意気揚々と両手を握りしめる。

私はその姿を見てため息を吐いた。

「あくまで日本のことを少しでも知っていな人ってただけだね。日本人じゃなくて中国人や韓国人の可能性もあるし。それに日本について詳しくあったとしても幻想郷について知っているとは限らない」

「あ、そうですよね……」

レイセンは分かりやすくシユンとする。

「まあでも、例え赤髪の女性が幻想郷について知っていなくても、知っていな知人を紹介してもらえばいいわ。その人が知らなかったら、更に同じことを繰り返す。そうしていくうちに少しずつ知っていな人に近づいていくはずよ」

「なるほど。確かに闇雲に情報を探すより何倍も効率が良さそうですね！ 流石セレネ様」

「それやめなさい。私を慕うのは勝手だけど、崇拜までは要らないわ」  
「はあ。まあ取り敢えず店主さんが言っていた女性を探す、ということでもいいんですよね？」

まあ、今のところそれぐらいしか手掛かりがない。

細い糸だが、これを辿っていくしかないだろう。

「そうね。ここから先はその女性を探す方にシフトしようと思うけど、今日はもう遅いし明日にしましょう。パブの店主に心配をかけるのも面倒くさいし」

暗くなっても戻らないからといって探しに来られたら堪ったもの

じゃない。

それに家にいるヴァルブルガにも心配をかけるはずだ。

私はレイセンを引き連れてダイアゴン横丁の入り口にある漏れ鍋を指す。

十二月ということもあり、まだ十五時過ぎだが周囲は少し薄暗い。あと一時間もしないうちに太陽は完全に沈むだろう。

私はダイアゴン横丁の入り口にあるレンガの壁を杖で叩き、漏れ鍋の店内へと踏み入る。

そしてレイセンと二人でカウンターへと腰かけた。

「ん、ああ嬢ちゃんたちか。無事なようで何よりだ。何か食べていくかい？」

「そうですね。それではスカンピーフライとバタービールを二つずつ。それとハンバーガーにフィッシュ&チップスをください」

「まいど。バタービールはホットでいいかい？」

「はい。それをお願いします」

店主は注文を取り終わると、すぐにバタービールのジョッキを二つ差し出してくる。

私は一つをレイセンに持たせると、静かに打ち付けた。

「ビールに……バター？ それにホットって……」

「魔法界ではメジャーな飲み物よ。試しに飲んでみなさい」

レイセンは半信半疑といった様子でジョッキに口をつける。

そしてすぐに笑顔になった。

「思った以上に美味しいです。ほんと食文化に関しては地上だからといって侮れませんね」

「まあ、月の食事は質素だから。その分地上の食事は穢れたっぷりだけぞ」

「そんな添加物たっぷりみたいない言い方されても」

レイセンはそういつて苦笑いするが、ここ数か月で随分地上の穢れというものを気にしなくなった。

もう体が穢れすぎて月へ戻っても密かに始末されるレベルだ。

レイセンはもう地上で生きるしかない。

そんなことを考えていると、店内が一瞬緑色の光で照らされる。

どうやら店の奥にある暖炉に誰か煙突飛行をしてきたようだった。

「お、これはこれはスカーレット嬢。どうです？ 日が暮れるまでここで一杯やるというのは」

グラスを磨いていた店主がカウンター越しに煙突飛行してきた者へと話しかける。

「そうしたい気持ちは山々だけど、生憎打ち合わせの時間まであまり時間がなくてね。帰りがけに寄らせてもらおうわ」

「打ち合わせですか……ああ、講演会の」

「そ。だから私が戻るまで店を開けておきなさい」

「日が変わる前にお戻りになられたら何かお出ししましょう。ところで、今日はおひとりで？」

店主はカウンター越しに会話をしながら手慣れた手つきで私たちの前に料理を並べていく。

「ちよつと野暮用でね。それじゃあ」

私はナイフとフォークを手にとると、出された料理に手を付け始めた。

「さっきの人、背中にコウモリみたいな羽が生えてましたね。人間でしようか？」

レイセンが中庭の方へ視線を向けながら呟く。

そんなレイセンの呟きを聞いたのか、店主が少し得意げな表情で言った。

「吸血鬼だよ。見るのは初めてか？」

「はい……血を吸うんですか？」

「うーん、それに関しては俺には答えられないな。直接見たことがあるわけでもないし……でも吸うんじゃないか？ 何せ吸血鬼だし」

吸血鬼か。私は一瞬中庭の方へと視線を向けるが、既そこには吸血鬼の姿は無かった。

確かに魔法界には吸血鬼と呼ばれる種族が存在する。

扱いとしては狼男や半巨人と同じで、魔法省は形だけは吸血鬼をヒトだと認めている。



まあそれでも人間を襲い血を吸う生物ということもあり、忌み嫌われていることが多いが。

本来ならばヴィーラやゴブリンと同じように杖を持つことができない種族に認定されてもおかしくはない。

だが、今のイギリス魔法省は吸血鬼が杖を持つことを許可している。

と言うのも、吸血鬼の中には元魔法使いで、吸血鬼に血を吸われた結果吸血鬼になってしまった者もいるからだ。

「まあでも怖がらなくていいぞ。彼女ほどの吸血鬼になると逆に安心だ」

「どういうことでしょうか？」

私が尋ねると店主は得意げに答えてくれる。

「彼女は血統書付きの吸血鬼だ。何代も続く純血の吸血鬼の家系らしい」

「純血の吸血鬼。なるほど……」

「……？ 純血だと何が違うんです？」

ひとり理解が追いついていないレイセンが頭の上に疑問符を浮かべる。

私はフィッシュ&チップスをつまみながら答えた。

「吸血鬼というのはその血の濃さによって吸血鬼としての力が変わってくるの。純血の吸血鬼……つまり殆ど人間の血が交ざってない吸血鬼というのは永遠に近い寿命を持ち、尚且つ人間とは比べものにならないほどの怪力と魔力を持つ」

「その通り。彼女の見た目は君たちと同じぐらいだが、確か年齢は四百五十歳を超えているはずだ」

「へえ、私たちと比べても結構長生きなんですね」

きつとレイセンは玉兎の年齢と比べたのだろう。

玉兎の寿命は大体三百歳ほどだ。それと比べても四千年近い寿命を持つ吸血鬼は確かに結構長生きだと言える。

まあ、数億歳に達する者が何人もいる月の基準で言えば四百歳少しなどまだまだ若輩者の域を出ないが。

「まあ、つまりはだな。彼女には今まで築き上げてきた地位や立場がある。その立場を滅茶苦茶にしてまで人を襲うようなことはしないさ」

それに店主とのやり取りを見てもわかるが、随分と社交的なようだ。

忌み嫌われる存在である吸血鬼でありながらあそこまで社会に溶け込んでいるというのも面白い話だ。

パブで軽食を取り終わった私とレイセンは、夕焼けに照らされたロンドンの道を歩く。

レイセンはパブで見た吸血鬼のことを考えているのか、どこか上空だった。

「……ねえセレネ様。私も彼女のように——」

「無理ね。純血の吸血鬼と貴方じゃ、何もかも違うわ」

私は最後まで言い切る前にレイセンの言葉を切り捨てる。

「貴方はもう地上へ堕ちたうさぎ。月にいた頃と比べて寿命も短くなっていくはずよ。それに、吸血鬼ほどの魔力も筋力もない」

「ですが、何か社会的な地位を得ることが出来れば……」

「得ようと思って得れるほど、地位も立場も軽いものじゃないわ」

今のイギリス魔法界でレイセンのような亜人が地位を築くというのはかなり難しいと言えるだろう。

そもそも保守的な魔法使いになればなるほど人間と亜人をはつきりと区別する。

魔法省の上層部には狼人間や巨人のことを忌み嫌っている者が少なからずいるとの噂だ。

「まあ、狼人間や吸血鬼と違って玉兎は人間に危害を加えるような存在じゃないから理解さえ得られれば普通に暮らせる可能性はあるけど。そうじゃなくてもイギリス魔法界はそのうち戦火に包まれるわけだし、早々に何処かへ避難した方がいいことは確かよ」

「そうですね……」

「なに、そんなこと聞くってことは、イギリスが少し気に入った？」  
私が尋ねると、レイセンは静かに首を横に振る。

「ならいいじゃない。こんな国さつきと離れるべきよ」

私はレイセンの手首を掴み、再びロンドンの街を歩き始める。

だが、不意にレイセンが立ち止まり、私は手を引かれるような形でつんのめった。

「……っ。ちよつと、危な——」

「セレネ様にとって、私はお邪魔ですか？」

文句を言おうとしたその瞬間、レイセンが私の顔を見ながらそう言った。

レイセンの目には不安の感情が色濃く出ている。

「私セレネ様にお世話になりっぱなしで、何も返すことができなくて、なんのお役にも立てなくて……」

「それがどうしたのよ」

「……そうですよね。やっぱり、ですよね」

レイセンは少し視線を下げると、どこか諦めたかのような笑顔を浮かべる。

「変なこと聞いてすみませんでした。明日も張り切っていきましょう！」

「……なんでもいいけど。そうね、この冬休暇中に可能な限り情報を集めてしまいたいし。明日も同じ時間にホテルに迎えに行くわ」

「はい。よろしくお願いします」

私はレイセンとホテルの前で別れ、グリモールド・プレイスにある自宅へと足を向ける。

レイセンが何を考えているかはわからないが、まあ所詮玉兎の考えることだ。

深く考えるだけ無駄だろう。

「ん？ それってスカーレット嬢のところの従者さんじゃないか？」

次の日。昨日と同じように漏れ鍋に向かった私たちは、まず手始め

にと店主に探している女性の特徴を伝えた。

半分ダメ元ではあったが、店主は私たちの想像とは裏腹にスラスラと情報を吐き出していく。

「スカーレット嬢って、もしかして昨日の」

「そう。昨日すれ違った吸血鬼のお嬢様だよ。たまに赤い髪を腰まで伸ばした従者の女性を連れていることがある。顔も言われてみれば東洋人寄りの顔つきだし、きつとそうだろうな」

「赤髪で、女性で、東洋人で、富裕層……条件ぴったりですね！」

レイセンは指を折りながら確認し、嬉しそうにパンと手を叩く。

私はこんなにお目当ての人物の正体が分かったことに半ば拍子抜けしつつ、さらに詳しいことを店主に聞いた。

「あの、その女性の名前はわかったりしますか？」

「えつと……確かスカーレット嬢は『メイリン』って呼んでいたな」

「メイリンですか。だとすると日本系というよりは中華系ですね」

漢字で書くとするならば『美鈴』か『美玲』といったところだろう。

「あー、どうだろうな。その辺はあまり詳しくなくて……」

「どこに行けば会えるでしょうか。その方にお話を伺いたくて」

「メイリンさんにか？ うーん……どうだろうなあ」

私の問いに店主は腕を組んで唸る。

「流石の俺もスカーレットのお屋敷の場所は知らないし……スカーレット嬢がダイアゴン横丁に来るのも年に数えるほどだ。魔法省にはよく出入りしているようだが……」

「魔法省……ですか。吸血鬼がですか？」

「だから言っただろう？ 地位があるって。彼女は魔法省とも仲がいい。たまにここでもジェンキンス大臣と飲んでるよ」

魔法大臣とも繋がりがあるのか。それが本当なのだとしたら少しどころの話ではない。

イギリス魔法界でもかなりの地位にいますと言っても過言ではないだろう。

もしかしたら私が知らないだけで、私の父親とも繋がりがあのかもしれない。

今度父親が帰ってきたときにでも話を聞いてみよう。

私がそんなことを考えていると、店主は何かを思い出したかのよう  
に顔を上げた。

「そうだ。メイリンさんに会えるかどうかはわからないが、スカー  
レット嬢には確実に会う方法がある」

「ほんとですか!?!」

レイセンはわかりやすく目を輝かせる。

店主はカウンターから出てくると、店内の隅に貼ってあった張り紙  
を剥がして私に渡した。

私はレイセンと共にその張り紙を覗き込む。

「どうやら、イベントの張り紙のようだ。」

『毎年恒例 夜の支配者によるオールナイトクリスマス講演会 千年  
に一度の奇跡を見逃すな……!』

「……なんですかこれ?」

「スカーレット嬢は占いの偉い先生なんだ。普段は講演会も不定期な  
んだが、クリスマス、二十五日の夜だけは決まって講演会を開いてい  
るな」

二十五日の夜。つまり、あと数日もしないうちに確実にお目当ての  
女性の主人がダイアゴン横丁に現れる。

いや、なんならこの講演会に参加してしまえばいい。

私は張り紙に書かれている日時と場所を記憶すると、店主に張り紙  
を返す。

店主は張り紙を元あった場所に貼りなおした。

「まあ、自分で言っておいてなんだが、子供が顔を出すような講演会  
じゃないな。時間も深夜、というか夜通しだし。もしメイリンさんに  
聞きたいことがあるならまた店内を通った時にでもそれとなく聞いて  
ておくれ——」

「いえ、それには及びません。割と込み入った要件ですので。レイセ  
ン、行くわよ」

「あ、え、はい!」

私は講演会が行われる場所を確認するために店の奥、中庭の方へと

歩き始める。

レイセンは店主に深くお辞儀をすると、私の後を追って走り出した。

## 第十一話 地下通路に潜む影

一九七二年十二月二十五日。クリスマス当日の夜。

私は自宅でのささやかなクリスマスディナーを食べ終わり、ヴァルブルガに今日は早めに寝ることを伝えると二階にある自分の部屋へと戻る。

クリスマスイブの夜ならまだしも、今日はヴァルブルガも部屋へ入ってこないだろう。

だが、念には念を入れる必要がある。

「クリーチャー」

「はい、こちらに」

私が呼びかけると、クリーチャーはすぐさま私の前に姿を現した。

「クリーチャー。今日の家事は済ませてきました？」

「はい。言いつけ通り、全て済ませてあります」

「うん。優秀で何よりよ。さて……」

私は姿見の前で自分の全身を確認する。

そして頭の中で何度か自分の姿を想像し、杖を抜いてクリーチャーに変身呪文をかけた。

その瞬間、クリーチャーの容姿がぐちゃりと歪み、見る見るうちに私と瓜二つの姿へと変わる。

クリーチャーは変わり果てた自分の姿にかなり驚いているようだったが、それ以上に私が何を考えているのか気が付き慌てて言った。

「お、お嬢様まさか——」

「そう、そのまさかよ。今日一日身代わりになりなさい」

「いい、いけませんお嬢様！ ヴァルブルガ様がご心配なされます！」

「だから心配されないように身代わりを立てるのよ。大丈夫、貴方は私のベッドの上で寝たふりをしていればいいわ」

そう、私はこれからダイアゴン横丁に用事がある。

一晩中ベッドを抜け出すことになるので、ヴァルブルガに不審がられないようクリーチャーを代役に建てることにしたのだった。

私はクローゼットから厚手のローブを取り出し洋服の上に着込む。「それにです！ 私のよなものがお嬢様のベッドで横になるなど……」

「それこそ何の問題もないわ。貴方も私も穢れた地を這う矮小な存在なんだから。そこに差なんてないわ」

私はクリーチャーの制止を半ば無視すると、部屋の窓を開け放ちロンドンの闇に飛び立つ。

クリーチャーは口ではああ言っているが、最終的には完璧に仕事をしてくれるだろう。

私は闇夜を少しの間飛行すると、人目に付かないように道路へと降り立ち、夜のロンドンの街を歩く。

所々に街灯はあるが、足元がうつすらと見える程度で明るいとは言い難い。

暗視の魔法薬を持ってくればよかったと少し後悔しているうちにレイセンが宿泊しているホテルへとたどり着いた。

「すみません。三〇二に部屋を借りているレイセンさんを訪ねにきました」

私はフロントの女性に一声かけ、エレベーターに乗り込む。

そして三階へと上がり、レイセンが宿泊している部屋の扉を叩いた。

「レイセン、私よ」

「あ、はい！ 今開けますー！」

扉の奥からバタバタとした足音が近づいてくる。

そしてカタンと錠が外れる音と共に扉が静かに開いた。

「お、お待たせしました」

「ごっちこそね。家を抜け出すのが遅くなったわ」

「大丈夫なんですか？ 表向きは十一歳なわけですし。ご両親にバレたら……」

「まあその辺は考えてあるわ。身代わりも用意してるし」

私はレイセンが扉の鍵を閉めたのを確認すると、再度エレベーターに乗り込みエントランスへと下りる。



そしてフロントの女性に軽く会釈し、レイセンと二人でダイアゴン横丁へ向けて歩き始めた。

ダイアゴン横丁の入り口として一番有名なのは漏れ鍋だ。多くの魔法使いが漏れ鍋からダイアゴン横丁へ出入りする。また、遠方にいる魔法使いも漏れ鍋の暖炉へ煙突飛行してくることが多い。

だが、ダイアゴン横丁の入り口は何も漏れ鍋一つというわけではない。

有名ではないだけで他にもいくつか入り口が存在するのだ。

私はあと一時間もしないうちに閉店する漏れ鍋の前を通り過ぎ、その先の路地裏へと入る。

そして建物と建物の間を縫うようにしながら奥へと歩いた。

「いつもの入り口から入らないんですか？」

レイセンが壊れて横たわる冷蔵庫を乗り越えながら聞いてくる。

「漏れ鍋の店主には顔を覚えられているし。それに、こんな時間に子供二人でダイアゴン横丁に入るとするのは常識的ではないわ。止められるのがオチよ」

「なるほど……この先に他の入り口があるんですね」

「そういうこと」

私はそのまま少し進み、用水路から地下へと下りる。

この地下道をしばらく進めば高級クイティツチ用具店の脇へ出れるはずだ。

私とレイセンは足元の水たまりに注意しながら地下通路を歩く。

吸血鬼が講演会を開くのはクイティツチ用具店から五分ほど歩いた場所にあるホールだ。

順調に進めば開演十五分前には会場に入れるだろう。

「……ッ!? セレネ様逃げ——」

順調に進めばだが。

私の後ろを歩いていたレイセンがいきなり私を前方へ突き飛ばす。

私は転びそうになりながらもなんとか体勢を立て直すと、咄嗟に後ろを振り返った。

その瞬間、横合いから飛んできた赤い閃光がレイセンの腹部に直撃し、レイセンを真横へ吹き飛ばす。

レイセンはそのままの勢いで壁に激突し、ピクリとも動かなくなつた。

「レイセンッ！——ッ」

私はレイセンへ駆け寄ろうとするが、同じ方向から魔法を放つ気配を察知して後ろへ飛び退く。

そして自身も杖を抜いて正面に構えた。

「いい動きだ。だが、そもそもの警戒が足りてないな嬢ちゃん」

閃光が飛んできた方向から男性の声が響く。

私は横目でレイセンの状態を確認しつつ、男へと呼びかけた。

「目的はなんでしょう？ お金かしら？」

「ま、確かに身代金も魅力的だが、今回はそれが目的じゃねえ」

私は少しずつ移動し、レイセンを庇うように男との間に立つ。

その瞬間、私の右足がぺちやりと水溜りを踏んだ。

……いや、違う。

私が今踏んでいるのはレイセンが作っている血溜まりだ。

「大怪我をしているようです。打ちどころが悪かったのでしょうか。今すぐ治療しないと死んでしまいますわ」

この短時間で血溜まりが出来ているということは、かなりの出血量ということである。

先ほどの赤い閃光が失神呪文だったと仮定すると、レイセンが意識を取り戻して自分で止血を行うというのは望めない。

「そうかそうか。だが、俺はお前が杖を持ったままピクリとも動いたら死の呪いをどちらか片方に向かって放つ予定だ。治療したけりや杖を捨ててマグル式でやるんだな」

私は少し考え、杖を男の方向へと投げる。

そしてレイセンのそばに屈み込むと、レイセンの体を起こし傷口を確かめた。

「うっ……」

体を動かすとレイセンは小さく呻いたが、意識を取り戻す様子はない。

私は半ば手探りでレイセンの傷口を探り、手のひらで強く押さえた。

傷口の大きさに壁に突き出たボルトが脇腹に刺さったのだろう。

位置的にもしかしたら腎臓も傷つけているかもしれない。

今すぐにも手術がいる。

そうじゃなかったら治癒魔法が必須だ。

杖を渡したのは失敗だったか。

「……」

「おい、どうした？ もう死んだか？」

男が私の頭上に杖灯りを灯す。

「まだ死んではいけないようです。でも、あと一時間もしないうちに死ぬと思います」

私はレイセンのズボンのベルトを引き抜くと、傷口に布を何枚か当ててベルトで締め付ける。

そして立ち上がって男と向き合った。

「で、貴方の目的は？ 死の呪いを使わなかったということは殺すことが目的ではないのですよね？」

「あー、確かに殺すことが——」

男が答えようとしたその時、通路の奥から足音が聞こえてくる。

無関係の第三者であることを期待したが、私の淡い期待はすぐに裏切られた。

「何をモタモタしているマルシベール。トラブったか？」

「ロジエール！ いやそれが失神させた時に大怪我したようですよ。もう面倒だから一人は殺してもいいか？」

どうやら襲ってきた男の仲間のようにだった。

ロジエールと呼ばれた男はレイセンの方へ近づいてくると、傷口を覗き込む。

「急所というわけでもないだろう？ 治癒の魔法でどうにかなる」

「それじゃあそのまま引きずっていくか」

「もう一人に背負わせろ」

マルシベールと呼ばれた男は大きなため息をつきながら言った。

「というわけだ。背負え」

私は言われた通りにレイセンを引き起こし、背中に担ぐ。

マルシベールはそれを確認すると、私の首に杖を突きつけた。

「よし、歩け」

「急ぐぞマルシベール。臭いを感知した魔法省の役人が様子を見にくるかもしれない」

ロジエールはそう言うと、地下通路の奥へと歩き始める。

私は背中の上でレイセンの鼓動が少しずつ弱くなっていくのを感じながら男の後を追った。

三十分ほど地下通路を歩いただろうか。

ロジエールは不意に立ち止まると地下通路の壁を杖で何箇所か叩く。

すると壁が粘土のように変形し、人一人が通れるほどのアーチ状の穴が開いた。

漏れ鍋の中庭にあるダイアゴン横丁の入り口と同じ作りだ。

ロジエールはアーチをくぐり、その先にある階段を上っていく。

私はレイセンの体を一度背負い直すと、一歩ずつ階段を上った。

階段を上り終えた先には古びた扉があり、ロジエールはその前で立ち止まる。

そして軽く扉をノックした。

「俺だ。三人連れてきた」

「手際がいいな。少し待て」

扉の奥から返事が返ってくるると同時に、ガチャリと鍵の開く音が響く。

ロジエールはそれを確認すると、扉を開けた。

「随分早かったな」

部屋の中にいた男は私とレイセンを値踏みするように観察しながらロジエールに言う。

「マルシベールが捕まえた。運のいいやつだ」

「それは確かに。あんなところにこんな上玉が転がっているなんてな。こいつはきつと高く売れるぞ」

私はそんな男たちの会話を聞きながら、レイセンを壁際に降ろす。ピクリとも動かないが息はしている。

心拍数も先程と比べれば安定してきており、意識が戻らないのは単純に失神呪文の影響だろう。

「高く売る以前に、このままだと一人死にますけどね」

私はため息交じりに肩を竦める。

「ああ、そうだった。おいドロホフ、お前確か治癒魔法が得意だったよな？」

マルシベールが部屋に元から居た男に話しかける。

ドロホフと呼ばれた男は杖を取り出すと、レイセンの脇に屈み込んだ。

「傷は？」

「右脇腹です。ボルトの大きさからして腎臓を掠めているかと」

「ちっ、面倒だな」

ドロホフは止血用のベルトを解き、傷口を魔法で清め始める。

そして何度か治癒魔法を使い、レイセンの傷口を丁寧に塞いだ。痕は残るだろうが、これでとりあえず死ぬことはないだろう。

「これでいい。……というか、こいつ亜人か？ 変な髪飾りをつけていると思っていたが、この耳、頭から直接生えてるぞ？」

「なんだと？」

ロジエールとマルシベールは私を押し除けるようにレイセンに近づき、頭に生えている耳を弄り始める。

「確かに直接生えてるな。こういう魔法じゃないのか？」

「試してみよう。フィニート・インカンターテム」

ロジエールは杖を取り出し、レイセンの耳に呪文を掛ける。

だがレイセンの耳が変化することはなかった。

「本物のようだな。血も通ってる。……おい、そこのお前。こいつの種族はなんだ？」

ドロホフが私の方へ振り向く。

私は一瞬玉兔と言いかけるが、それでは魔法界では通じないだろう。

「獣人の一種です。私のペットのようなものですわ」

「人間じゃない……まあ、マニアには売れるか」

なるほど。彼らは人攫いか。

実際にそのような事件が多発しているという話は聞いていたが、まさか当事者になるとは思わなかった。

まあ、彼らの目的が人身売買なのだとしたら最低限命は保証されるだろう。

「まあ何にしても、十分すぎる収穫だ。一人は容姿もいいし、かなりの高値で売れるだろう。こっちの亜人も、売る相手を間違えなければいい値が付くはずだ」

「それはよかったですね。ちなみに、私は一体いくらほどの値が付くのでしょうか？」

私は興味本位でロジエールに聞く。

ロジエールは私の問いに対してやや不快感を露わにしながら言った。

「いやに冷静だな。助かるあてでもあるのか？」

「まあ、そんなところですよ。でも、そうですね。逃げ出すにしても売却されてからにしましょう。そうすれば、ひとまず貴方たちは儲けることができますよね？」

ロジエールはローブから杖を抜くと、私に対して真っ直ぐと杖を向ける。

そして冷酷な目で私を見下ろしながら呟いた。

「クルーシオ」

その瞬間、私の全身の神経が異常な信号を発し始める。

なるほど、これが磔の呪文か。確かにこれは常人の神経で喰らったらかなりの激痛を伴うだろう。

全身の神経一本一本に針を刺されているような感覚だ。

私は初めて磔の呪文を掛けられたことに少し感動しつつ、改めてロジエールの顔を見上げた。

「磔の呪文を掛けられたのは初めてです。こんな感じなんですね」  
ロジエールは私のそんな言葉を聞き、更に呪文に込める魔力を高める。

だが、暖簾に腕押しもいいところ。肉体と精神との関係が希薄になりつつある私の今の体にはあまり効果のある呪文とは言えなかった。  
「おい、こいつおかしいぞ」

「おかしいとは失礼な。安心してください。ちゃんと痛みは走ってま  
すから」

ロジエールはそんな私を不気味に思ったのか、磔の呪文を解き杖を  
仕舞いこんだ。

「……ふん、気味の悪いガキめ。まあ、明日の朝には奴隷市場に並ぶ身  
だ」

「奴隷市場ですか……聞いたことはないですね。マグルの世界の市場  
です？」

「お前は知らないだろうが、魔法界にもいくつか販路があるんだよ。  
需要もそれなりにある。まあ、精々大切に可愛がってくれる変態に買  
われることを期待するんだな。場合によっては、買われた次の日には  
化け物の食卓に並んでいる可能性だってあるんだぜ？」

マルシベールがニヤニヤしながらそう教えてくれる。

なるほど、大体この三人の特徴も掴めてきた。

マルシベールはやや不真面目でお調子者な性格、ロジエールは厳格  
な性格。

ドロホフに関しては名前と顔つきからしてロシア人だろうか。

「……ん？ ロジエール？」

私の頭の中でロジエールの名前が妙に引っかかる。

どこかで聞いた名前だ。でも、一体どこだったか……。

ああ、そうだ。確かスリザリンの上級生にそのような名前の生徒が  
いたはずだ。確か名前は――

「もしかしてエバン・ロジエールのお父様ですか？」

私がそう呟いた瞬間、ロジエールがピクリと反応する。

「おい、その名前をどこで聞いた？」

「どこも何も、同じ寮の上級生ですから」

それを聞き、ロジエールとマルシベールが顔を見合わせる。

「……一応聞いておくが、お前、名前は？」

その様子を見て、ドロホフが私に聞いた。

「セレネ・アルテミス・ブラックです」

私は正直に名前を打ち明ける。

ドロホフはすぐさま開心術で私の思考を読むと、分かりやすく顔を青くした。

「嘘は言っていない……おい、ブラック家と言ったらイギリス魔法界でも有名な純血の家系だろう？ どうする？」

「どうするって……おい、こういう場合どうするんだ？」

ドロホフに問われたマルシベールは同じ質問をそのままロジエールへと投げる。

ロジエールは軽く頭を抱えると、声を潜めて言った。

「忘却呪文をかけて外に放り出すのが一番だろう。我が君に知られる前にだ」

「一体何を知られては拙いんだ？ ドロホフよ」

その時、この場にいない六人目の声が部屋の中に響く。

その声に三人の男たちは分かりやすく肩を震わせると、すぐに声のした方向へ跪いた。

「な、なんでもありません我が君……」

「なんでもないということはないだろうか？ 横のそれは貴様の商品か？」

私も声がする方向へ視線を向ける。

そこには黒いローブを身に纏い、フードを深く被った男性が立っていた。

私はその男の正体をすぐさま察する。

そうか、この男は……。



「ヴォルデモート卿……」

今まさにイギリス魔法界を混沌に陥れている闇の魔法使い、ヴォルデモート卿が私の目の前に立っていた。

## 第十二話 貴方がそれを望むのならば

どこかもわからない寂れた部屋の中、私は新たに現れたローブの男を見て立ち竦む。

三人の男の反応もそうだが、明らかにこのローブの男は異質だ。

ローブで全身を隠しているためそもそも素性が知れないというものもあるが、その体に内包している魔力があまりにも禍々しく、それだけで巨大だ。

ダンブルドアに並び立つ、いや、魔力量だけならダンブルドア以上かもしれない。

「……ヴォルデモート卿」

私は確証もなくそう呟く。いや、ある意味確信に近かった。

「察しがいい。だが、少々恐れ知らずだ」

ローブの男はゆったりとした足取りで私の目の前までくると、被っていたローブのフードを脱ぐ。

私はヴォルデモートの顔を真正面から見つめた。

クセの少ない黒髪に整った顔つき、瞳の色は全ての色の絵の具を混ぜ合わせたかのような黒色をしている。

歳は二十代後半ぐらいに見えるが、魔法使いの年齢というのは見た目では測れないものだ。

ヴォルデモートは黒い瞳で私の青い瞳を見つめる。

そして息をするような自然さで開心術を仕掛けてきた。

「……っ」

私はそれに対し無言で心を閉じる。

ヴォルデモートは開心術を阻まれたのが意外だったのか、今度はかなり強引に心に侵入しようとしてくる。

だが、状況が読み切れない今、心を読まれるのは避けた方がいいだろう。

「わ、我が君、これはですねその……」

私とヴォルデモートの間でそのような攻防戦が行われてるとは知らないドロホフがヴォルデモートに釈明しようと一歩前が出る。

ヴォルデモートは邪魔だと言わんばかりにドロホフを押し退けると、私の首を掴み締め上げるように持ち上げた。

私はその手に軽く手を掛け、不敵に笑う。

その笑みを見て、ヴォルデモートは我に返ったかのようにハツとすると、私をレイセンの側へと放り投げた。

互いに開心術と閉心術をぶつけ合っていたのだ。

先に手を出した方が実質のところ負けである。

「気味の悪いガキだ。で、ドロホフ。この二人はお前の商品か？」

ヴォルデモートは先に手を出した事実を誤魔化すようにドロホフに尋ねる。

ドロホフは焦ったように手を振りながら答えた。

「我が君、私は何も知らなかったのです！ ロジエールとマルシベールの二人がこいつらをここへ——」

「何度も言わせるな。この二人はお前の商品か？ まさか隠し子というわけでもあるまい？」

ドロホフはヴォルデモートに問い詰められ、臆するように一歩後ろへ退がる。

「いえ、あの……商品にするつもりでした」

「ほう、つもりか。お前にしては珍しい。パツと見ただけでもかなりの上玉だ。かなりの値が付くことが予想出来るが？」

「それは……」

ドロホフが言い淀む。

そして助けを求めるようにロジエールを見た。

「二人が攫ってきたこの娘が、ブラック家の名を出したものでヴォルデモートがもう一度私に視線を向ける。

「小娘、名前は？」

「セレネ・アルテミス・ブラックと申します」

「父親の名は？」

「オリオン・ブラックです」

私がそう答えると、ヴォルデモートはあからさまに眉を顰めた。

「オリオンの娘？ お前がか？」

「はい、そうですが……」

ヴォルデモートは私の容姿をマジマジと見る。

「それにしてもオリオンにもヴァルブルガにも似ていない。それにブラック家は代々黒髪の家系だ」

「お父様をご存知なんですね」

「古い付き合いだ。二人の子供がいると記憶しているが……そもそもそこに転がっている娘は巫人だ。ドロホフ、お前騙されているのではないか？」

ヴォルデモートにそう言われてドロホフとロジエールが顔を見合わせる。

「では、この娘がブラック家の名を騙っているか？」

「その可能性が高いと言わざるを得ないな」

ヴォルデモートはもう一度私の目を覗き込む。

「いいか小娘、開心術とはこう掛けるのだ。心を開いて貴様の情報を開示しなければ殺す」

なるほど、これは心を開かざるを得ないだろう。

立場としては捕らえられているこちらが圧倒的に不利である。

私は軽くレイセンのほうに視線を泳がせると、再びヴォルデモートの目を見つめた。

「わかりました。ですが、きつと後悔しますよ」

私はヴォルデモートに対しニコリと微笑む。

そして、硬く閉じていた心を開きヴォルデモートを招き入れた。

「……、——ッ!？」

私の心に侵入したヴォルデモートは目を見開き一歩後ずさる。

私はその隙をついてヴォルデモートの心の中に深く切り込んだ。

ヴォルデモートと私の精神が絡み合い、深い部分で融け合っている。

ヴォルデモート……いや、トム・マールヴォロ・リドルとは、このような男なのか。

深い魔法族に対する信仰と、死への強い恐怖。

マグルを憎み、排除しようとしているが、自らにもマグルの血が流

れているという矛盾。

人を惹きつける強烈なカリスマと、圧倒的な魔法の技術。

「出ていけー！」

ヴォルデモートは息を切らしながら私を壁へと突き飛ばし、開心術を解除する。

私はその様子を見て小さく笑みを浮かべた。

「つまりはそういうことなのです、闇の帝王様。私はセレネ・アルテミス・ブラック。永遠を生きていた齢十一の魔女でございます」

地下通路への入り口がある部屋を出て少し廊下を歩いた先にあるベッドの置かれた小さな部屋。

ヴォルデモートは抱えていたレイセンをベッドの上に降ろすと、ローブの中から私の杖を取り出した。

「治療してみろ」

私はヴォルデモートから杖を受け取ると、レイセンの服を捲りドロホフが塞いだ傷口を調べる。

綺麗に塞がってはいるが、このままではミミズ腫れのような痕が残るだろう。

私は杖の先端でレイセンの傷口をゆっくりとなぞる。

すると、まるで汚れを拭いとるかのように傷痕が綺麗さっぱり消えてなくなった。

「……なるほど。十一歳の魔法の腕ではないことは確かなようだ」

「信用していただけただけで何よりです」

私は杖でレイセンの頭を軽く小突き、直接失神呪文を上書きする。

これでもうしばらく目を覚ますことはないだろう。

「いや、未だに信じられはしないがな。だが、十一歳の精神のあり方ではない。お前の中には確かに数万年の記憶と経験があった」

ヴォルデモートはベッドの横にある椅子へと腰かける。

私は無傷同然になったレイセンをベッドの端に押し退けると、空いたスペースに座った。

「まあ、それも過去の話。今は穢れ多き地上に墮とされ、人間として慎ましやかに生きております」

「だが、お前の頭の中には地上にはない月の英知が詰まっている」

「それは……そうですね。魔法という技術は初めて触れる技術ですの  
でまだ勝手が掴めておりませんが」

ヴォルデモートは何かを考え込むように口に手を当てる。

「そして、オリオンの娘というのも事実ではあると。もし差し支えのないのなら、今までの経緯を教えてはくれないだろうか。何故そのような存在がブラック家の長女としてホグワーツに通うことになったのか」

「つまらない話ですが、それでもよろしければ」

私は月の都の説明から始まり、地上に墮とされた経緯をヴォルデモートに説明する。

ヴォルデモートは時折質問を挟みながらも静かに私の話を聞いていた。

「禁忌、蓬萊の薬か……」

ヴォルデモートは一通りの説明を聞き終わると、私の話を繰り返すように呟く。

「あ、やっぱり興味あります?」

「命の水や分霊箱では成し得ない、完全なる死の克服。それを実現するものが存在するとはな」

ヴォルデモートの中にあつた死への恐怖。それに対する最も適した処方箋は蓬萊の薬か猛毒かだろう。

「セレネ・ブラック。お前はその蓬萊の薬を調査したことによって月を追われたと言っていたな」

「正確には製法を完成させた、ですけどね。でも、それも所詮は車輪の再発明に過ぎません」

「地上で作ることは出来るか?」

私はヴォルデモートの黒い瞳を見つめる。

どちらもこれ以上に踏み込まれまいと心を閉じているため真意はわからないが、ヴォルデモートの表情は真剣だった。

「まさか、蓬萊の薬を飲みたいと？」

「どれほど傷ついてもすぐさま元通りになる体。永遠に老いない容姿。まさに俺が求めるものだ」

私は腕を組み、蓬萊の薬の製法を思い出す。

製法自体はハッキリと覚えてはいる。だが、月にある高度な機械や技術を使用しても調合にはあと一步至らない。

時間を操る技術。それが欠如しており蓬萊の薬の調合を不可能なものにしていった。

「ご所望なのであれば調合すること自体は構いませんが、いかんせん月にある最新の設備と技術、能力を用いてようやく完成を見る高度な薬です。地上で同じものを作るとなれば、そう簡単にはいかないでしょう」

「その技術の差を補う何かがあれば、調合自体は可能だということか」  
私はヴォルデモートの問いに頷く。

ヴォルデモートは私に右手を差し出しながら言った。

「……セレネ・ブラック。お前に蓬萊の薬の調合を依頼したい。その薬は俺の目指す世界を実現するために必ず必要になってくる。俺と共にこのイギリス魔法界を作り直さないか？」

イギリス魔法界を作り直す……正直それ自体はどうでもいい。

ヴォルデモートが目指す世界など全くもって興味がない。

私が興味があることはただ一つ。

「私はただ、蓬萊の薬が作りたいただけ。それ以外のことには興味がありません。人が薬を望むなら、薬師である私はそれに応えましょう」  
私はヴォルデモートの右手を握り返す。

月の都で完成させることが出来なかった蓬萊の薬。

それをもし月より設備が劣った地上で完成させることが出来たら。

私は、自分を捨てて地上へ逃げた八意<sup>××</sup>を超えたということだ。

私の顔に自然と笑みが浮かぶ。

決して超えることが出来ないと思っていた高みが、実は手の届くところにあっただのだ。

だが、それには協力者が必要不可欠だ。

十一歳の財力で薬の開発をするのはあまりにも心許ない。

それに、薬品や試薬の効果を確認かめるため、死んでもいい実験体が何人もいる。

「ですが、見ての通り私は地上に堕ちて日が浅く、身体もこのような状態です」

「わかっている。可能な限り協力しよう」

現在闇の勢力の頂点に立っているヴォルデモートの協力を得ることが出来れば、開発資金や実験体に困ることはないだろう。

「おっと、そういうえば」

私はヴォルデモートとの握手を解くと、ベッドの隅で唸っているレイセンを見る。

そういうえば暇つぶしがてらこの玉兎を幻想郷へ送り届けようとしている最中だった。

だが、本格的に蓬莱の薬の開発を進めるなら玉兎の相手などしている暇はない。

殺してしまった方が後腐れがなくてよいかも知れない。

私はベッドから飛び降りると、杖を引き抜きレイセンに向ける。

「アバダ……」

いや、ダメだ。私にはまだ匂いがついてる。

既存の魔法を使えば、たちまち魔法省に感知されるだろう。

治癒の魔法や失神呪文程度ならまだしも、死の呪いなど放てば闇祓いがすっ飛んでくる。

「飛ばすか」

私は杖に魔力を集め、レイセンの身体に量子的な振る舞いをするように魔法を掛ける。

レイセンは量子的に不安定になると、可能性のモヤとなって霧散した。

綿月姉妹の姉の方とは違い、指定した場所と場所を繋げることは出来ない。

レイセンはこの宇宙全体のどこかにランダムにテレポートしたは



ずだ。

まあ、宇宙のどこに飛ばされようが、ほとんどの場合すぐさま窒息して死に至るだろうが。

「……今の魔法は？」

ヴォルデモートが呆然とした表情で先程までレイセンの寝ていたベッドを見つめている。

私は杖を仕舞いながら肩を竦めた。

「邪魔になったので宇宙のどこかへ飛ばしました。安心して下さい。魔法省はどんな魔法を使ったのか分からないはずですので」

「仲間ではなかったのか？」

「玉兎なんて暇つぶしの道具ですよ」

ヴォルデモートの問いに、私は即答した。

「どうせ月から逃げ出した脱走兵です。殺してしまったても足はつきません。それに、蓬萊の薬の開発に集中するのだとしたら彼女の存在はあまりにも邪魔です」

「そうか……まあ、お前がそれでいいのならこちらとしては構わないが」

何か言いたげな表情のヴォルデモートに私は首を傾げる。

「さて、懸念事項も文字通り消え去ったことですし、詳しいことを詰めていきましよう」

私は改めてヴォルデモートに向き直る。

明日の朝には家に戻らないといけないことを考えると、あまり時間があるとは言えないだろう。

私は早速ヴォルデモートに薬の開発に関する相談をし始めた。

## 第十三話 もう一人の私

ヴォルデモートと出会った次の日の早朝。

私は周囲に人の姿がないことを確かめると、空を飛んで二階の窓から自分の部屋へと入った。

「クリーチャー、帰ったわよ」

私は囁くような声で膨らんでいるベッドに声を掛ける。

すると間髪入れずに私と同じ容姿をしたクリーチャーがベッドから転がり落ちるように這い出してきた。

「おおお、お嬢様お待ちしておりました！ ご無事なようで何よりでございます」

呼びかけた時の反応の早さから察するに、きつとクリーチャーは一睡もせずにベッドの上でじっとしていたのだろう。

「まあ全然無事じゃなかったんだけど、結果オーライだったわ」

「は、はあ……」

私はコートから杖を取り出すとクリーチャーの頭を軽く杖で小突く。

するとクリーチャーはみるみるうちにいつもの醜い屋敷しもべ妖精の姿に戻った。

「それじゃあ、私は少し寝るわ」

「おやすみなさいませお嬢様」

クリーチャーは安堵のため息と共に深々と頭を下げると、音も立てずに部屋からいなくなる。

私はクリーチャーの体温で温められたベッドに潜り込み、そのまま眠りへ落ちていった。

その日の昼。ダイニングで朝ご飯代わりのお昼ご飯を食べた私は、自分の部屋に戻り部屋の中を見回す。

ベッドに机に本棚に。年頃の女の子らしいものこそないが、至って普通の子供部屋だ。

「蓬萊の薬の研究を進めるのには狭すぎるわよね」

そもそも私はホグワーツ生だ。

卒業するまでの間は殆どの時間をホグワーツ内で過ごすことになる。

薬の研究室を作るならここよりもホグワーツの方がいいかもしれない。

「……いや、そもそも真面目にホグワーツに通う必要があるのかしら？」  
今までは死ぬまでの暇つぶしとしてホグワーツに通っていたが、遊んでいる場合ではなくなつた。

真面目に授業に出ているのは蓬萊の薬を研究する時間が殆ど取れない。

それに最終的にヴォルデモートがイギリス魔法界を支配すれば学歴なんて関係なくなる。

「とは言つても、義務教育みたいなものだし、辞めたいって言って辞めれるものでもないわよね」

それに学校を辞めたら自由に動けるといふわけでもない。  
少なくとも成人するまではこの家に縛られ続けるだろう。

だとしたら……。

「……もう一人私がいたら」

クリスマス休暇が終わるまであと一週間。

研究は何千年も前に済んでいる。

その理論や技術を魔法に置き換えるのに一日。

材料集めや道具の作成に一日。

培養に三日、教育に二日。

「よし、間に合う」

私は自らの心臓に杖を向けると、自身に掛けられている『十七歳未満の者の周囲での魔法行為を嗅ぎ出す呪文』を解除した。

これでホグワーツの外でいくら魔法を使ったところで魔法省に感知されることはなくなつた。

「さて」

私は軽く腕を回し、本棚を魔法で移動させる。

そしてその裏の壁に魔法で扉を出現させると、杖を持っていない手でドアノブを回し扉を開いた。

当然その先には元の壁があるだけだ。

私は更に魔法を重ねがけし、探知不可能拡大魔法で扉の奥の壁を押し広げる。

そして最終的に自分の部屋の横にもう一つ部屋を作り上げた。

私は扉を閉じ、魔法で本棚を元の位置に戻す。

ひとまず、ちゃんとした研究室を確保するまではここでいいだろう。

私は簡易的な培養槽や、自分が座るための椅子、道具を置く台を部屋の中に出現させる。

「さて……出来れば魔法使いの子供がいいけど、それだと足がつくかもしれないし。材料にするだけだからマグルでいいわね」

私は内側から魔法で本棚をズラし、自分の部屋へと戻る。

そして机の上に羊皮紙を広げ、高度な機器を使う工程を魔法で置き換える作業に取り掛かった。

次の日、私は他所行きの服に着替えると、ヴァルブルガに一言挨拶してから家の外に出る。

用事があるのはダイアゴン横丁だ。

私はここ数日何度も歩いた道を辿るようにして漏れ鍋を目指す。

今までと違う点があるとすれば、横にレイセンがないことだろうか。

まあ、あの玉兎は戦争から逃げてきたのだ。

宇宙空間では大変珍しい有機物として平和に永遠の時を過ごすというのにはある意味レイセンも望んだ結果だったのではないだろうか。結果オーライとはこの事である。良いことをした後は気分がいいものだ。

私は少し上機嫌になりながら漏れ鍋の扉を開いた。

「いらっしやい。って、嬢ちゃん今日は一人かい？」

私が店内に入ると、いつものように店主が声を掛けてくる。私はそれに笑顔で答えた。

「はい。あの子は自分の国に帰りました」

「おっと、そうだったのか。英語が流暢だったから違和感がなかったが、確かに東洋系の顔つきをしていたもんな」

店主は一人納得すると、グラスを磨く作業に戻る。

私はそのまま店内を通り中庭に出ると、レンガの壁を杖で叩きダイアゴン横丁内に入った。

そして順番に店を回り、必要な機材や材料を買い集める。

魔法界は科学技術が発展していないので魔法でどこまで代用できるかわからないが、まあそれなりのものが出来るだろう。

ダイアゴン横丁で一時間ほど買い物をした私は、買ったものを拡大呪文で広げたポケットの中に収め、漏れ鍋を通ってマグルの街へと戻る。

ひとまずクリスマス休暇中に必要なものはあらかじめ手に入った。

残る材料は一つ。

「えっと、確かこの辺りに」

私は記憶を頼りにロンドンの街を歩く。

十分ほど歩いただろうか。お目当ての建物の前に到着した。

建物の門には『ウル孤児院』と書かれている。

ここなら多少子供がいなくなっても大きな問題にはならないはずだ。

私は目くらまし呪文を全身に掛けると、孤児院の庭に忍び込む。

中庭では十歳に満たないであろう子供が二人ほど砂場で遊んでおり、その他に人影はなかった。

ちようどいい、この二人にしよう。

「アバダケダブラ」

私は杖を引き抜くと、素早く子供二人を殺す。

そして人が来ないうちに子供の死体を縮小させ、ポケットの中に隠

した。

さて、これで必要なものは揃った。

私はこっそりと孤児院を抜け出すと、鼻歌交じりで帰路につく。

そしてグリモールド・プレイスにある実家へと帰ると、ヴァルブルガに軽く挨拶し自分の部屋へと戻った。

「さてさてさて……」

私は本棚をズラし、先ほど作り上げた隠し部屋の中に入る。

そしてベッドの上に手に入れた子供の死体を並べると、早速作業に取り掛かった。

私は死体を浮遊魔法で浮かせ、培養槽の中に入れる。

そして溶解魔法でドロドロに溶かした。

さらにその中にダイアゴン横丁で買ってきた材料を加え、原料を完成させる。

「よし」

事前の準備はこれで十分だろう。

私は培養液を中心に部屋一杯に巨大な魔法陣を描いていく。

魔法陣を使った魔法はイギリス魔法界では主流ではないが、理論上は上手く働くはずだ。

私は魔法陣に変に干渉しないよう、杖を部屋の隅の方へ置く。

そして腰まで伸びている自分の白い髪の毛を半分ほどハサミで切り取り、培養槽の中へ入れた。

髪は女の命とよく言われる。

科学的に見れば決してそんなことはないのだが、術式に魔術を取り入れることを考えれば、実際に髪の毛を使うというのはかなりの効果が期待できる。

最後に魔法陣の外へ出ると、魔法陣の一端へありつただけの魔力を注ぎ込んだ。

その瞬間、培養槽の中の液体がブクブクと泡を立ち始める。

私はその様子を注意深く観察し、魔法陣が上手く作用していることを確かめた。

「計算では完全に形を成すのは三日後の朝かしらね」

私は部屋の隅に置いた杖を拾い上げると、洋服のポケットへと差し直す。

そして隠し部屋から自分の部屋へと戻り、夕食を取るためにダイニングへと下りた。

三日後の朝。私は隠し部屋の中の培養槽の前に立っていた。

培養槽には十歳ほどの少女がぶかぶかと浮かんでいる。

透き通るような白い肌に雪のような白髪。その整った顔立ちはまさに私と瓜二つだ。

そう、培養槽の中にいるのは私だ。

正確に言えば、髪の毛という女の魂を分け与えた私のクローンである。

私は培養液の中に満ちている羊水を排出し、中にいるクローンを取り出す。

そして丁寧に体をタオルで拭き、部屋のそばに設置したベッドの上に寝かせた。

だが、このままではただ呼吸を繰り返すだけの肉人形だ。

私は杖を取り出すと、魔法で記憶を修正する応用で必要最低限の知識を書き込んでいく。

イギリス魔法界で暮らす上での常識からホグワーツ一年生レベルの魔法の知識、私の友好関係と家族関係。

月の知識は書き込むかどうか少し迷ったが、余計な混乱を引き起こすだけだろう。

私は必要な処置が全て終わったことを確かめると、クローンの頬を軽く叩く。

するとクローンはゆっくりと目を開いた。

「おはよう私。聞こえるかしら？ 見えるかしら？」

クローンはベッドに寝た状態で首だけ私の方へ向ける。

そして感覚を確かめるように何度か口を動かし、掠れたような声を出した。

「貴方……は？」

「私の名前はセレネ。クローンである貴方のオリジナルであり、同時に貴方を作り出した親でもある存在よ」

「オリ……ジナル……親。あの、わた……しは……」

私はクローンの背中に手を回し、ゆっくりと引き起こす。

そして両手で支えながら立ち上がらせた。

「歩いてみなさい」

私はクローンから手を離し、数歩後ろへ下がる。

クローンは戸惑いながらフラフラと右足を前に出し、そのままバランスを崩して地面に顔から倒れた。

「う、……あ……」

クローンは地面に打ち付けた鼻を押さえながら地面を蠢く。

どうやら鼻を骨折したらしく、血が溢れ出している鼻は見事にひん曲がっていた。

「うーん、まだ神経系に軽い麻痺があるようね。それともただ脳が上手く情報を処理できていないか……」

私は杖を取り出し、クローンの傷を治す。

そしてもう一度両手を引っ張って立ち上がらせた。

「さあ、歩いて」

クローンはまた不器用に右足を持ち上げ、そのまま地面に倒れ伏す。

私はまた負った傷を治し、手を引いて立ち上がらせる。

それを何度も繰り返す。

何度も何度も何度も何度も。

クローンがまっすぐ歩けるようになるまで何度でも。

そのような行為を一時間ほど繰り返しただろうか。

もともと歩くための情報を魔法で書き込んでいたこともあり、クローンは普通に歩くぶんには転ばないまでに成長した。

「よし、まあこんなものね」

私は一度自分の部屋に戻ると、服を一式手に取り隠し部屋に戻る。

「今度は服を着ましようか。さあ、着なさい」



そして手に持っていた服をクローンへ手渡した。

クローンの頭の中にはどの服をどの順番でどの向きで着ればいいのかということとはすっかりと書き込まれている。

クローンは迷うことなくパンツを手にとると、足を通すために片足を持ち上げた。

そして、そのままバランスを崩しパンツを握りしめたまま真横へ倒れる。

流石に一時間以上何度も倒れては起き上がりを繰り返していたため大きな怪我をすることはなかったが、それでも肩を強く打ち付けたらしく痛そうに摩りながら立ち上がった。

「風邪を引く前にパンツが履けるといいわね」

私は部屋に置かれた椅子に座ると、クローンの肩へ治療魔法を掛ける。

クローンはその後も何度か転びながら何とか服を一式着終えた。

「次は文字の筆記よ」

次に私はクローンを椅子に座らせ、目の前に机を設置する。

そして机の上に羊皮紙と羽ペン、インク瓶を置いた。

「なんて書いてあるか読める？」

私は羊皮紙に英語で『私の名前はセレネ・アルテミス・ブラックです』と書き記す。

クローンは羊皮紙の文字に目を落とすと、何度か口を動かしたあと読み上げた。

「私の名前はセレネ・アルテミス・ブラックです」

「やっぱり知識としてはきちんと文字を認識できているわね。じゃあ次はこの羊皮紙に『私の髪と肌は白い』と書いてみなさい」

クローンは左手で羽ペンをつまみ上げると、インクを付けて羊皮紙の上に押し付ける。

随分と体が馴染んできたのか、クローンは不器用ながらも羊皮紙に文字を書いた。

「うーん、やっぱり筆跡まではコピーできないか。まあいいわ。文字に関してはこれからも練習するしかないわね」

さて、これで一通りの運動性能のデータが取れた。  
やはり体が馴染むまではこの部屋から出さないほうがいいだろう。  
だが、時間がないのも事実である。

私は一度机を消し去り、クローンが座っている椅子の前にもう一つ椅子を設置し座り込んだ。

「さて、一通りのテストも済んだところで……これから貴方が生まれた理由について説明していくわ」

私はクローンの間を見つめる。

クローンは表情に乏しいが、見方によってはクールビューティーに見えるかもしれないだろう。

「私の名前はセレネ・アルテミス・ブラック。イギリス魔法界では有名な家系のブラック家の長女よ。この辺は貴方の記憶にもあるわよね？」

私の問いにクローンは静かに頷く。

「私は今ホグワーツ魔法魔術学校の一年生。本当は学校へ通わないといけない身なんだけど、他にやらないといけないことが出来ちゃつて。だから代わりにホグワーツへ通ってくれる存在を作ることにしたの」

「それが……私、ですか？」

「そう。貴方は私の遺伝子情報から作り出されたクローン。貴方には新学期から私の代わりにホグワーツに通ってもらおうわ」

「私が、ホグワーツに……」

クローンは理解しているのかしていないのか、ぼんやりとしながら呟く。

「私の友人関係や家族関係については記憶にあるでしょう？ それを参照しながら違和感のないように立ち回りなさい。この際授業の成績についてはとやかく言わないわ」

私はホグワーツでの生活に関する注意点などをクローンに話して聞かせる。

クローンは私の顔を見ながらじっと私の話を聞いていた。

## 第十四話 入れ替わり

クリスマス休暇が終わる一日前。私はクローンと共にダイアゴン横丁を歩いていった。

とはいっても同じ顔を二つ並べて歩いているわけではない。

クローンは私の姿そのまま、私はポリジューズ薬を用いて母親であるヴァルブルガに変装している。

傍から見れば母親と娘が二人で通りを歩いているように見えるだろう。

私はクローンの手を引いてダイアゴン横丁の通りをしばらく歩くと、古ぼけた看板を下げた店の中に入る。

紀元前三百八十二年に創業した老舗、オリバンダーの店だ。

ホグワーツに通う生徒の殆どがここで杖を購入する。

私が今使っている杖もこの店で買ったものだ。

黒壇、三十センチ。非常に硬く、しならない。

芯材にはグリムの毛を使っているらしいが、当代が作った杖ではないので真偽のほどは不明である。

本来なら客に売れるような杖ではないと店主のオリバンダーは言っていたが、あの時はこの杖しか私に適応しなかったのだ。

「ごめんくださいな」

私が煩雑な店の奥へ声を掛けると、すぐさま店の奥から当代のオリバンダーが現れた。

オリバンダーは私とクローンの顔を見ると、やれやれと言わんばかりに苦笑いする。

「やはり、問題がありましたか」

「いえ、うちの長男がこの子の杖を折ってしまいました」

「そうでしたか……では、杖腕を」

私はクローンの左手を軽く持ち上げると、オリバンダーに差し出す。

私と相性のよかった杖はびっくりするほど見つからなかったが、クローンの場合はどうだろうか。

オリバンダーはクローンの左手を入念に調べると、近くの柵から一本の杖を取り出した。

「イチイ、二十七センチ。しなやか。芯材には不死鳥の尾羽」

クローンはオリバンダーから杖を受け取り、私の顔を見上げる。きつと Hogwarts の外で魔法を使つてはいけないという知識があるため、ここで魔法を使つていいか判断できないのだろう。

私はクローンに対して小さく頷く。

クローンはそれを見て大丈夫であると判断すると、左手に持った杖を軽く振るつた。

その瞬間、店の中が煌びやかな星に包まれる。

オリバンダーはその様子を見てキョトンとした表情をすると、やや困惑した様子で言った。

「いやはや……どうにもかなりの相性のようで。数か月前のことが嘘のようじゃ」

クローンはその後何度か感覚を確かめるように杖を振るう。

「相性がいいならこの杖をくださる？」

「ええ、そうさせてもらいましょう。化粧箱はいかがでしょうか」「いないわ」

私はローブのポケットから金貨を取り出し、杖の代金をオリバンダーに支払う。

クローンは満足したのか、やや得意げな顔で杖をローブに仕舞つた。

「それじゃあ店主、私たちはこれで」

私は用事は終わったと言わんばかりに店内で踵を返す。

だが、ドアに手を掛けたところで後ろから声が掛かった。

「奥様、もしよろしければ折れた杖の修理も可能ですございますが」「もう捨ててしまつたわ」

私は店主に目を向けることなく、そのまま店を後にした。

店を出た私たちはそのまま路地裏へと進み、ダイアゴン横丁からノクターン横丁へと向かう。

私は次第に客層が悪くなっていく通りを歩きながらクローンに話

しかけた。

「前にも教えたけど、ホグワーツの外で魔法を使っではいけないわよ。魔法省に探知されて、よほど緊急性を有する事態ではなかったらそのままホグワーツを退学になってしまうから」

「ですが、貴方は何度も私に治癒魔法を掛けていましたよね？ あれは問題ないのですか？」

クローンは不思議そうな顔で私の顔を見上げる。

「大丈夫よ。今の私は感知されないわ。魔法省が管理している魔法に私が既に成人したと誤認させたの」

だが、いつまでもそのまま放置しておくわけにはいかない。

魔法省が管理している未成年の魔法使用を感知する魔法は、未成年本人が魔法を使わずとも、近くににいる魔法使いが魔法を使っても感知される。

休暇で私ที่บ้านにいるときに母親が魔法を使えば、私の近くで魔法が使用されたことを魔法省は感知するのだ。

勿論、このような場合、魔法省はわざわざ私の家に警告文を送つてきたりしない。

逆に言えば、クリスマス休暇や夏休暇で私ที่บ้านに帰っているであろう時に魔法が感知されなければあまりにも不自然なのだ。

私はノクターン横丁にあるポロボロの建物の内部へと入ると、そのまま地下通路へと降りる。

そして杖明かりで通路を照らしながら次の目的地へ向けて歩き出した。

「もつとも、生まれたことが魔法省に認識されていないあなたも現在魔法省には感知されないわ。でも、いつまでもこのままではあまりにも不自然」

「では、どうするのですか？」

「貴方に匂いをつけるわ」

そうしているうちにポリジューズ薬の効果が切れたのか、私の視線が一気に低くなる。

私は魔法で服のデザインとサイズを変化させ、今度は変身術を用い

て自分の容姿を軽く変えた。

白い髪の色をブロンドに染め、後ろで一つに纏める。

クローンの方は顔を少し変化させ、髪をブラウンに染めた。

これで友達同士で連れ立って遊んでいるマグルの子供に見えるだろう。

私は少しの間地下通路を歩き、人通りの少ない路地裏のマンホールから外へ出る。

そしてクローンの手を引いてマグルが多く往来している大通りへと出た。

「まずは魔法省の人間を呼びましょうか」

ひとまず私は大通りに面しているイタリアンレストランに入る。

そこで窓側の席を用意してもらい、パスタとスープを注文した。

「さて、それじゃ始めるわよ」

私はテーブルの下で杖を振り、大通りに停められていた自動車に浮遊魔法を掛ける。

魔法が掛けられた自動車はまるでクレーンに吊り上げられたかのようにゆっくりと回転しながら宙に浮きあがった。

「なんだ!? 俺の車が宙に浮いてるぞ!!」

車のそばでは車の持ち主であると思われる男性がヒステリックに叫んでいる。

私はそのまま自動車を魔法で振り回し、男性を肉の塊に変えた。

その瞬間、その様子を見ていたのであろう女性が甲高い悲鳴を上げる。

私はまた軽く杖を振り、今度はその女性を押し潰す。

「なんだ!？」

「おい！ 誰か救急車！」

店の中にいた人間たちも外の騒ぎを聞きつけ、窓際に群がってくる。

私は心配そうな表情を作りながら更に杖を振るい、女性の子供だと思われる少年を轢き潰す。

そのようなことを繰り返し、私は瞬く間にロンドン的大通りを赤く

染めた。

「あの、これは……」

クローンは不思議そうな顔で私を見る。

「魔法省まで出向くのも面倒だし向こうから来てもらいましょう。マグルの街で不思議なことが起これば間違いなく魔法法執行部の人間が飛んでくるはずよ」

私は仕上げと言わんばかりに宙に浮かせていた自動車を街灯に突き刺す。

大混乱の店内から外の様子を伺っていると、十分もしないうちにロンドン市警と救急車が現場に到着した。

「ロンドン市内なだけあって流石に早いわね。さて、闇祓いが来るまでの間のんびり昼食でも取りましようか」

と思ったがいつまで経っても注文した料理がやってこない。

どうやらこの混乱でシェフが料理どころではないらしい。

私は順番を間違えたようだ。

こんなことなら料理が来てから騒ぎを起こせばよかった。

店の中で三十分ほど待っていると、路地裏の方からバチンという空気を切り割いたような破裂音が聞こえてくる。

どうやら騒ぎを聞きつけて闇祓いが到着したようだった。

魔法使いたちは素早く周囲の人間に失神魔法を掛けると、魔法によつて記憶を書き換えていく。

まずは大通りから。そのうちこの店内へも入ってくるだろう。

「一体何が起こってるんだ？」

窓越しに外の様子を伺っていたウエイトレスが呟く。

魔法に馴染みがないマグルからしたら、全く状況が飲み込めないことだろう。

闇祓いたちは大通りの処置を終えたのか、何組かに分かれて今度は店の中に入ってくる。

当然店内にいる客たちはわけがわからずパニックに陥り狭い店内

を逃げ惑うが、闇祓いたちは素早く失神呪文を掛けていった。

「行くわよ」

私はクローンの手首を掴むと、座っていたテーブルから飛び出す。

「ああ、こちら！ 待ちなさい！」

闇祓いは慌てたようにそう声を掛けてくるが、無視して店の中のトイレへと駆け込んだ。

そして個室の中に二人一緒に入り、内側から鍵を掛ける。

これで闇祓いは店内の記憶処置を終えたあと私たちの元へと来るだろう。

「あの、私はどうしたら……」

「何もなくていいわ」

私は邪魔にならないようにクローンを個室の奥へと押し込む。

そして洋服から杖を引き抜くと、闇祓いがここへ来るのを待った。

数分もしないうちにトイレの扉が開く音が聞こえてきた。

きつと先ほどの闇祓いだろう。

「ロンドンケーサツです。安心してください」

扉の向こうにいるであろう男が私たちに対し声を掛けてくる。

私は息を殺してじつと扉の奥に集中した。

「……しようがない。アロホモラ」

魔法使いの開錠呪文によりトイレの鍵がひとりでに解除される。

私は男が扉を押し開くと同時に男に向かって失神呪文を掛けた。

男はまさか反撃されるとは思っても見なかったのか、無抵抗に失神呪文をくらい後ろへ倒れる。

私はそんな男に馬乗りになると、魔法で男の頭蓋骨に穴を開けた。

「よく見ておきなさい。服従の呪文はこうやって使うのよ」

私は頭蓋骨に開けた穴から杖を脳へ突き刺す。

「インペリオ。絶対服従」

そして相手の脳に直接服従の呪文を叩き込んだ。

闇祓いの男は何度か痙攣した後、ぼんやりとした顔をしながら目を



覚ます。

私は治癒魔法で頭に出来た傷を治すと男に話しかけた。

「この子の魔力を魔法省に登録したいの。セレネ・ブラックとしてね」  
「ハイ。かしこまりました。登録には一度以上魔法を行使した杖が必要です」

確かクローンはオリバンダーの店で色々と魔法を試していたはずだ。

「そう。直接出向かなくていいのは便利ね。セレネ、杖を出しなさい」  
私はクローンに対して手を差し出す。

だがクローンは私の要求に対し少し渋ったような仕草を見せた。

「早くしなさい」

私の要求にクローンは渋々といった表情で杖を取り出す。  
私はクローンから杖を取り上げると闇祓いの男に渡した。

「十分以内に戻りなさい」

「ハイ。かしこまりました」

バチンと音を立てて闇祓いの男は居なくなる。

私はその様子を見届け、トイレの便座の蓋に腰掛けた。

結局闇祓いの男は五分もしないうちに店のトイレへと戻ってきた。

私は男から杖を受け取ると、クローンに返す。

クローンは杖を大切そうに服の内側へと仕舞い込んだ。

「もう通常業務へ戻っていいわ。店内の記憶処理は終わったと上司に報告してきなさい」

私がそう命じると、闇祓いの男はトイレの中から出ていく。

これで名実共にクローンがセレネ・ブラックだ。

「帰るわよ」

私はクローンの手を引くと、店の裏口から路地裏へと出る。

そして周囲を調査している闇祓いに見つからないようにしながらグリモールド・プレイスにある自宅へと帰った。

次の日。私はまたヴァルブルガの姿へと変身し、クローンと共にキングス・クロス駅の九と四分の三番線のホームに来ていた。

ホームには私たちの他にも多くの生徒でごった返しており、皆家族との別れを惜んでいる。

私は少し列車から離れた位置にクローンを連れていくと少しかがみ込んでクローンに視線を合わせた。

「ルームメイトや教員に不自然に思われる程度なら構わない。もしかしたらふざけて別人であることを疑うものがあるかもしれない。でも、だからと言ってあなたがクローンであることは絶対に公表してはいけないわ」

「わかりました」

「あとは……そうね。上手くやりなさい。あなたがクローンであるとバレたら私の目的に支障をきたすかもしれない。あなたは最後までセレネ・ブラックとして生き、セレネ・ブラックとして死ぬのよ」

私はクローンの背中を線路に向けて軽く押す。

クローンは少しふらついたが、そのまま真っ直ぐとホグワーツ特急へ乗り込んでいった。

「さて」

私はヴァルブルガの姿のまま大きく伸びをする。

これで私を縛り付けるものは全て無くなった。

ようやく薬の研究に専念できるというものだ。

私は九と四分の三番線から出ると、トイレの個室へと入りポリジュース薬の解毒剤を飲む。

そして元の姿に戻り、改めて自分の体に魔法を掛けた。

掛ける魔法は老け魔法だ。私は自分の肉体年齢を月の都で暮らしていた頃の姿まで成長させる。

人間の年齢で言うと十六歳ほどだろうか。

私は服のサイズに変なところがないか入念に確かめると、個室から出て鏡の前に立つ。

そこにはよく見慣れた私の姿があった。

「お帰り、私」

私は私に対して微笑み掛ける。

死ぬまでの暇つぶしの日々は終わりだ。

私の寿命が尽きるのが先か、蓬萊の薬が完成するのが先か。

「まずは研究所を手配しないと」

やることは山積みだ。

私は頭の中で今後の予定を組み立てながらキングス・クロス駅を後にした。

## 第十五話 セレネ・ホワイト

一九七三年、一月。

私はノクターン横丁にあるヴォルデモートの拠点を訪れていた。ドロホフやロジエールたちは任務で拠点を離れているのか、はたまた小遣い稼ぎに出ているのかはわからないが、拠点の中に姿は見えない。

私は拠点にある部屋の一つに入ると、深く被っていたフードを脱いだ。

「お久しぶりです。ヴォルデモート卿」

私は部屋の中にいたヴォルデモートに軽く会釈をする。

ヴォルデモートはまさか私が訪ねてくるとは思ってもみなかったらしく、驚きの表情を浮かべながら指摘してきた。

「……お前、学校はどうした？ 既に始まっているはずだろう」

「代わりのものに行かせています」

「代わりだと？」

私は前回ここで別れてからの経緯を簡単に説明する。

ヴォルデモートはその話を聞き、納得したように頷いた。

「なるほど。お前の容姿が成長しているのもそれが理由か。見分けが付かないのは困るからな」

「それに関してはこの姿の方が動きやすいからではありませんが。まあそういうわけで、現在はクローンが私の代わりにホグワーツへと通っているのです」

「お前はそれでいいのか？」

私はヴォルデモートの顔を見る。

それでいいのか、とは何のことだろうか。

「質問の意図がわかりませんね」

「ホグワーツでの成績をそんな紛い物に任せてしまってもいいのか？」

「むしろ何の問題があるのです？」

私はヴォルデモートに対し肩を竦める。

「ブラック家の長女という肩書に興味はありません。所詮私にとって人生なんて死ぬまでの暇つぶしです。っと、今は蓬莱の薬を作るという大義がありますが」

「まあ、お前がそれでいいなら俺から言うことは何もない。それで、この後どうするつもりだ?」

「ひとまずこの後すぐ研究所を一つ確保しにいく予定です。そこに拠点を設けようかと。事が落ち着き次第また連絡を入れます」

「ああ、わかった。人手が必要なようなら俺に言え」

「はい。頼りにさせて頂きます」

私は恭しくお辞儀をすると、座っていた椅子から立ち上がり、ロボのフードを深く被る。

「そういえばだが……お前のことは何と呼べばいい? クローンを作ってまで自らの存在を秘匿したのだ。そのままセレネ・ブラックと呼ぶわけにはいかないだろう?」

ヴォルデモートのその言葉に、私は口到人差し指を当てて考える。

そしてにこやかな笑みを浮かべてヴォルデモートに対し言った。

「貴方が名付けてくださいませんか?」

「……俺がか?」

「はい。こういったものは自称するより他人から名付けられたほうが魂に名前が結びつくのです」

ヴォルデモートは私の足先から頭の天辺まで視線を巡らせる。

そして少し考えた後に半ば諦めたような表情で言った。

「ホワイトでいいだろう」

「安直ですね」

「うるさい。ともかく、仲間内にもホワイトで通す」

ホワイトか。まあ私が月にいた時の名前と近いのでそれでいいだろう。

「分かりました。では、今後はホワイトと名乗ることにします。それでは、私はこの辺で」

私は今度こそ部屋の扉を開けて外に出る。

そして廊下を少し進み、ロンドンの郊外へ向けて姿現しした。

「おい！ その君！ ここは関係者以外は立ち入り禁止——」

「インペリオ」

「お帰りなさいませ。足元にお気を付けください」

「ん？ 何処の誰の娘さんだ？ 君、すまないが親との待ち合わせは外で——」

「インペリオ」

「社長室までご案内します」

ロンドンにある大手製薬会社の本社ビル。

私は正面玄関から堂々とビルの中に入ると、私を追い出そうとするもの全員に手当たり次第に服従の魔法を掛けた。

薬の研究をするなら魔法界の設備よりマグルの設備の方が月の環境に近い。

自分で土地から購入し研究所を建ててもいいが、それにはあまりにもお金も時間も掛かりすぎる。

完成品が目の前にあるなら、それを利用したほうが効率がいいというものだ。

私は服従させた職員の案内でエレベーターに乗り込み、ビルの最上階にある社長室を目指す。

途中乗り合わせた女性職員が不可解な視線を私に向けてきたが、特に口を出してくることはなかった。

どうやら私が服従させ、案内をさせている男性はそこそこの高い人物だったらしい。

私はその男性とともに最上階まで上がると、エレベータを降りる。そして廊下の奥にある社長室の扉を開けて中に入った。

「ん？ エバンス君じゃないか。どうしたノックもなしに……そちらのレディーは？」

社長室の中には上等な机と椅子が設置しており、そこにはキツチリと髪を整えた男性が腰かけていた。

社長と思われる男性はいきなり現れた私たちに一瞬眉を顰めたが、

すぐに笑顔を顔に張り付かせる。

私はそんな男性に対し、まっすぐ杖を突きつけた。

「インペリオ。私に服従なさい」

服従の呪文を掛けられた男性はすぐに恍惚とした表情を浮かべる。その様子はまるで私に服従することがなによりの喜びであるかのように。

「私はね、別にこの会社を自分のものにしたとか、そういう意図があるわけではないの」

「はい」

「ただね。自由に使える研究室と研究資金が欲しいなって。それを望んでいるだけなの」

「はい」

「だから、早急に私のために研究室を用意なさい。職員まで寄越せとは言わないわ」

「はい。直ちに」

男性はそう返事をする、机の隅にある電話の受話器を取る。

そして業績の上がってない部署を一つ直ちに閉鎖し、職員の配置換えをするように指示を飛ばし始めた。

「えっと、エバンス君だったかしら」

私は私をここまで案内した男性に向き直る。

「はい。なんでもお申し付けください」

「ひとまず、貴方は私の助手として私の研究に携わりなさい。三年後に殺すから、家庭があるなら今のうちに保険の見直しをしておいた方がいいわよ」

「はい。かしこまりました」

エバンスは少し虚ろな目で私に対し頷く。

「いい返事ね。気に入ったわ。あとで頭蓋骨に穴を開けて直接服従の呪文をかけてあげましょうね」

「はい。ありがとうございます」

同じ人間を長く研究に関わらせるのは少々危険だが、流石に製薬会社の正社員を数か月に一度殺すわけにもいかない。

同じ会社から毎月のように死者が出るというのはあまりにも不自然だ。

リスクはあるが、エバンスには数年の間は私の助手を務めてもらうことにしよう。

「社長さん、研究室は空きそう?」

「はい。問題なく。三日後には用意が整います」

「上々ね。何か問題が発生したら貴方の部下に全責任を押し付けなさい」

「はい。そのように致します」

これで一先ず研究室は確保出来た。

準備が整うまでの間にこの製薬会社にある設備を見て回って、使えそうな物を物色しよう。

それと、人体実験用の人間の確保先も探さなければならない。

私自ら攫うのが一番確実ではあるが、時間も掛かるしリスクも高い。

ここはドロホフたちが攫ってきた人間を買ったほうが効率がいいだろう。

「エバンス、行くわよ」

「畏まりました」

私はエバンスを引き連れて乗ってきたエレベーターへ戻る。

そして研究施設がある階のボタンを押した。

製薬会社のビルに併設されているカフェで私は手帳にペンを走らせる。

先程まで施設見学のカレッジ生という肩書でエバンスと共に製薬会社の設備を確認したが、私が思っていた以上に機材の質がいいことが分かった。

原始的で低俗な地上の施設なのであまり期待はしていなかったが、思わぬ誤算だ。

「エバンス。コーヒーと何か甘いものを買ってきなさい」



「はい」

私はエバンスにドリンクを取りに行かせると、引き続き手帳の上に集中する。

月レベルで高度な薬の調合は厳しいが、魔法薬の調合精度を上げた工程を自動化させたりすることは可能だろう。

「だとしたら、先行して動いた方がいいわね」

取り敢えず研究室の準備が整うまでは蓬莱の薬の材料集めを行なうことにしよう。

流星に地上の設備のみで月と同じように薬が調合できるとは思っていないが、一度地上の設備だけでどこまでできるかは試してみるべきだ。

材料の殆どは製薬会社を通じて入手可能だが、製薬会社では手に入ることができない材料もいくつかある。

「取り敢えず、月の石を何とかして入手しないことには始まらないわ」そう。蓬莱の薬の調合には月の石が欠かせない。

月の都だつたらそれこそ庭に落ちている石を適当に拾えばいいが、ここ地上ではそう簡単にはいかない。

「流星に月まで取りに行くわけにもいかないし……ねえエバンス。地上にいなながら月の石を手に入れるにはどうすればいいと思う?」

私はカウンターからコーヒーカーップ二つとドーナツの盛られた皿が載ったお盆を運んできたエバンスに問いかける。

エバンスは私の前にコーヒーカーップとドーナツの盛られた皿を置きながら答えた。

「月の石……ですか? それならNASAにあるのではないでしょうか?」

「NASA? ……なるほど、盲点だったわ」

確かにアメリカにあるNASAのアポロ計画では月面への着陸に成功している。

となれば、サンプルとして月面の石などを採取しているはずだ。

「あとはNASAがどれぐらいの量の月の石を確保しているかだけ………実験を繰り返すことも考えると二十キログラムは欲しいわね。」

正式な手段でそれだけの量の月の石を譲ってもらえるとは思えないし。ねえエバンス、貴方今からNASAに忍び込んで月の石を盗んでこいって言ったらどうする？」

「金でその道のプロを雇います。ですが、アポロ計画はアメリカとソ連の冷戦の明暗を分けるほどのかなり重要なプロジェクトです。そのセキュリティも相当なものかと。それに——」

「あまり強引に侵入するとソ連の侵攻だと勘違いされて核戦争が始まってしまう可能性があるものねえ。アポロ計画に深く携わっている人物を服従させて持つてきてもらうのが一番かな？」

だとすると、一度アメリカへ渡る必要が出てくる。

流石にレイセンを飛ばしたようなランダムワープはやりたくないし、姿現しで行くには距離が遠すぎる。

大西洋を箒で飛んでいくなど論外だ。

「マグルの空路を利用するのが一番かしら。エバンス、今日中にアメリカへ飛ぶわよ」

「畏まりました。一度パスポートを取りに家へ——」

「その必要はないわ。パスポートを確認するのはマグルだし」

空港の職員を適当に服従させて飛行機に乗り込んでしまえばこっちのものだ。

私はドーナツを一つ手に取り口に運ぶ。

「取り敢えずタクシーを呼びなさい」

「畏まりました」

エバンスはコーヒーを飲み干すと、近くの公衆電話へと歩いていく。

私はその後ろ姿を見ながらドーナツを順番に胃袋の中に収めた。

カフェでコーヒーとドーナツを食べ終えた私は、エバンスと共にビルの前に止まっているタクシーに乗り込む。

運転手はミラー越しに私とエバンスの顔をちらりと見たが、すぐにくすまし顔で行先を聞いてきた。

「どちらまで？」

「ヒースロー空港までお願いします」

私がそう答えると運転手はアクセルを踏み込んで車を走らせる。製薬会社のビルから空港までの距離は車で二十分もない距離だ。

特に会話もないまま車はすぐに空港へと辿り着いた。

私とエバンスは二人で空港内へ入ると、ワシントンD・C. 行きの飛行機のフライト時間を確認する。

幸いあと三十分もしないうちに搭乗時間だ。

私はエバンスをエントランスで待たせ、自分はトイレの個室に入る。

そして全身に目くらまし魔法を掛けると、エバンスの元へと戻った。

「エバンス、トイレの個室に入りなさい」

私の命令にエバンスは疑問を抱くことなく頷くと、まっすぐトイレに向かう。

私はその後ろにぴったりくっついて歩くと、エバンスと共にトイレの個室へと入った。

「飛行機の出るターミナルもわかったし、搭乗口近くのトイレまで付き添い姿現しするわよ」

私はエバンスの手首を掴むと、ワシントンD・C. 行きの飛行機が出るターミナルのラウンジ近くのトイレへと姿現しする。

そしてまたエバンスと共にトイレを出ると、エバンスをラウンジに待たせ今度は私一人で女子トイレへと入り個室の中で目くらまし呪文を解除した。

私はトイレにある洗面台で軽く手を洗うと、エバンスの待つラウンジへと戻る。

これで保安検査や税関検査、出国検査をショートカットすることができた。

あとは搭乗の時に魔法で誤魔化しさえすれば飛行機に乗り込むことができる。

「さて、あとは搭乗時間になるまでゆっくりしましょうか」

私はラウンジのソファア―に腰かけると、手帳を取り出し月の石以外の入手困難な材料を書き出し始めた。

## 第十六話 少女は一人燃え続ける

着陸寸前の飛行機から姿現わして近くの建物の陰に移動した私とエバンスは、もうすっかり暗くなったダレスの街を歩く。

そして空港から少し離れた位置でタクシーを拾うと、運転手に服従の呪文を掛けてNASAの本部へと車を走らせた。

「長時間滞在する気はないわ。このままNASAの職員に服従の呪文を掛けたらすぐにイギリスに戻るつもりよ」

「畏まりました」

エバンスは機械的に返事をする。

私はふと思いつき、杖を取り出してエバンスに突きつけた。

「そういえば処置がまだだったわね。顔をこちらに近づけなさい」

私の命令に、エバンスは素直に顔を私へと近づける。

私は魔法でエバンスの頭蓋骨をくり抜くと、エバンスの右脳と左脳の間で杖を差し込んだ。

「貴方は殺されるまで私に尽くすの。幸せでしよう？」

「はい。ありがとうございます」

私はビクビクと体を震わせるエバンスに対して服従の呪文を掛け直す。

これでエバンスは私の命令に対して決して逆らえなくなった。

私が娘を生きたまま喰らえと命令したら、エバンスは嬉々としてそれを実行するだろう。

私はエバンスの脳から杖を引き抜くと同時に穴の開いた頭蓋骨を修正した。

「さて、そろそろNASAの本部前ね。運転手さん、正面の道路に停めなさい」

運転手は私の命令通りにタクシーを道路に路駐する。

私は自分とエバンスに目くらましの呪文を掛け、タクシーの中に誰もいないように見えるよう装った。

このまま待っていればそのうち職員がこのタクシーの中に乗り込んでくるはずだ。

私の予想通り十分もしないうちに仕事終わりと思わしきスーツ姿の男性がタクシーの扉を開ける。

私は男性が乗り込もうとしたその瞬間に男性に失神魔法を掛け、エバンスに命じて後部座席に引き込ませた。

「車を出さない」

運転手は私の命で車を発進させる。

私は少々狭くなった後部座席から助手席へと脱出すると男性に服従の呪文を掛けてから気付け呪文で意識を覚醒させた。

「おはよう。名前は？」

「ミラーです」

「ではミラーくん。貴方はアポロ計画の関係者かしら？」

「いいえ、私はアポロ計画の関係者ではありません」

これはハズレ个体かもしれない。

私は少し気落ちしつつも質問を重ねる。

「貴方は月の石を盗み出せる立場にある人間かしら？」

「いいえ、私は月の石を盗み出せる立場にはありません」

私はため息を吐くと、ミラーの記憶を消去する。

そして財布からいくらか金を抜き、血中アルコール濃度を急激に高めて歩道に放り出した。

「次よ。NASAの本部に車を戻さない」

「はい」

タクシー運転手は車をUターンさせる。

ミラーはこのまま酔っ払いとして警察のお世話になることだろう。

私はその後もNASAの本部前でマグルを攫っては酔わせて路上に放り出すという行為を数回繰り返し返す。

分かってはいたが、思った以上に石を盗める立場の者が見つからない。

アポロ計画の関係者でも機体の設計であったり全体の調整であったりと、石に関わる立場のものではないのが殆どだった。

だが、試行回数は正義だ。

繰り返しているうちについて月の石に近づける人物を捕まえることに成功する。

「月の石の成分を研究している部署の責任者をしています」

「ビング。貴方に決められたわ。月の石を二十キログラム、イギリスに送りなさい」

私はその男に石を送る詳細な住所を伝える。

届け先はイギリスにいるコレクターだ。

筋書きとしてはこの男が金欲しさに月の石をイギリスのコレクターに売ったことにしよう。

それならもし石を盗み出したことがバレてもこの男が何らかの処分を貰うだけで済むだろう。

私はタクシーを止めて男を歩道に降ろす。

「空港へ戻りなさい」

「はい」

そしてイギリスに戻るためにタクシーを空港へと走らせた。

イギリスに戻った私はエバンスを製薬会社に待たせ、自分は姿現わして石が送られてくる予定のコレクターの家へ移動する。

私が目星をつけたのはイギリスでも有数の資産家の女性だ。

欲しいもののためなら金に糸目をつけないことで有名な人物であり、今回の件の隠れ蓑にするにはもってこいと言えるだろう。

私は無駄に巨大な家の中に侵入し、リビングにあるソファアに腰かける。

そして壁に飾ってあったウイスキーの酒瓶を一本手元に飛ばすと、栓を飛ばしてグラスに注いだ。

「月の酒に比べると色も香りもまだまだだね。きつと熟成期間が足りないんだわ」

私はグラスを傾け、ウイスキーを少し口に含む。

「あ、でも味はいいわね」

「あ、貴方だけ?! なんでうちのリビングにいるの?!」

私が勝手にくつろいでいると、ヒステリックな悲鳴が聞こえてくる。

視線を向けるとそこには全身を貴金属や宝石で飾った四十代ぐらいの女性が立っていた。

今回月の石を受け取らせる予定の資産家だ。

「気にしないで。あ、お酒ご馳走になってるわ」

「そ、それは私が先週競り落とした六十年物のマツカラン！ あなたそれいくらすると——」

「インペリオ」

「好きなだけお飲みになってください」

私はニコリと微笑み、もう一口ウイスキーを煽る。

いい感じに酔いも回ってきたところで私は上機嫌に女性に話しかけた。

「近いうちにアメリカから荷物が届くわ。貴方は荷物が届いたらこの紙に書いてある口座に百万ドル振り込みなさい」

「かしこまりました」

「荷物は開封することなく私に渡すこと。いいわね？」

「勿論でございます」

女性はぼんやりした顔で恭しく頭を下げる。

これで月の石は問題なく確保出来るだろう。

「それじゃあ、私は帰るわ。あ、この瓶貰ってくわね」

私はヒラヒラと手を振ると、ソファアの上で姿をくらませた。

「んー、やっぱり限界があるわねえ」

蓬莱の薬を作るための一通りの材料を揃え、マグルの研究機材で薬を煎じ始めて早三ヶ月。

私は目の前でもがき苦しむ人間を見ながら一人呟いた。

目の前の人間は拘束具を引き千切らんばかりに暴れる。

まるで全身火に炙られているかのようだ。



いや、比喻ではすまない。

しばらく観察していると目の前の人間の指先に火が灯る。

その火はそのまま全身に広がり、人間の肌を焼いた。

私とエバンスは目の前で燃えている人間をしばらく無言で観察する。

普通なら全身に火がついたら数分もしないうちに死に至るだろう。

だが、目の前の人間の絶叫は止むことはなく、既に火がついてから三十分が経とうとしていた。

「体の再生は中途半端に再現できているわね。でも穢れを多く取り込みすぎてただの新陳代謝で身体が燃えてしまっている」

私は燃えている様子を何枚か写真に撮る。

そしてある程度データをとり終わったところでエバンスに命じた。

「撃て」

「はい」

エバンスは目の前で燃える人間に向けて拳銃を構えると、引き金を引き絞る。

拳銃から放たれた弾丸は吸い込まれるように燃える人間の脳を破壊した。

その瞬間、燃えている人間は電源が切れたように動かなくなる。

「脳の破壊に耐えられるほどの再生能力はないつと。それに、やっぱり魂の固定化は出来てないわね」

私は目の前で炭化しかかっている死体を魔法で消失させる。

そして人間を拘束していた拘束具を魔法で清めた。

「エバンス、次よ」

「はい」

私の指示でエバンスは隣の部屋から次の実験体を連れてくる。

次の実験体は私と同じ年ぐらいの少女だった。

「あら、ハズレだわ」

「ひっ……」

エバンスに後ろから首を掴まれている少女は私の顔を見て小さく悲鳴を上げる。

「あら偉いわねえ。大きな声で泣き喚かないなんて」

「わ、私強い子だもん！」

「そう。なら安心だわ。エバンス、拘束具をつけなさい」

エバンスは少女をベッドに寝かせると、手足を拘束具で固定している。

私は拘束具のサイズが少女に対応していることを確かめると未成の蓬萊の薬を少量少女の静脈へ注射した。

「さて、せいぜい長生きしてね？」

「え？」

少女は一瞬キョトンとした表情をしたが、次第にその表情は苦悶に満ちたものになっていく。

「あつい……熱い！ 熱い熱い熱い熱い!! ごめんなさい！ ごめんなさいいいい……」

「エバンス」

「はい」

「そのまま奥の観察室へ」

エバンスは苦しむ少女を乗せたベッドを押しいき、研究室の奥にあるガラス張りの部屋へ格納した。

そのまま数十分観察していると、先程と同じように少女の体に火がつく。

私は薬の投与から火がつくまでの時間を先程の実験体と比べた。

先程よりも火がつくまでの時間が早い。

やはり体重の差で薬の効果に差異があるのだろう。

「さて、彼女にはこのまま死ぬまで燃え続けてもらうとして、やっぱり今のままじゃ限界あるわね」

私は再生を繰り返し延々と燃え続ける少女を眺めながら一人呟く。マグルの機材じゃこの辺が限界だろう。

月の都で研究をしていた頃は不老と身体の再生能力までは付加することが出来ていた。

魂の固定化は時間操作の能力がないと再現が出来ないから、それはまあ一先ず置いておくとして、今のままでは月で調合できていた薬の

十分の一程の性能しかない。

原因はわかっている。

設備や機材の精度が月のものと比べると雲泥の差だからだ。

だが、文句を言っても始まらない。

機材の精度を月のレベルにまで進化させるか、製法や原料に手を加え、地上の機材のレベルに合わせたレシピを作る他ないだろう。

まあ、機材の精度を上げると言っても簡単な話ではない。

それを行うには機材の精度を上げるための工作機械を作るための工作機械を作るための工作機械ぐらいのレベルから作り出さなければならぬ。

「それに私機械工学は専門じゃないし。だとしたら……」

だとしたら製法や材料に手を加えていくしかないだろう。

幸い魔法界には蓬萊の薬の効果を高めることが期待できる素材がいくつかある。

その中には月の石以上に入手が困難なものもあるが、まずは入手が容易なものから試していこう。

「食事にしましょうか。エバンス」

「はい」

私は持っていたバインダーを机に投げ、椅子から立ち上がる。

そして燃えている少女を横目にエバンスと共に研究室を出ると、魔法でしっかりと鍵を掛けた。

「というわけで、進捗状況としてはこのような感じですね」

三月の中頃。私はヴォルデモートに対してここ数ヶ月の成果を報告していた。

ヴォルデモートは動かないマグルの写真付きの資料を眺めながら口を開く。

「なるほど。俺にはサツパリだな」

「貴方様ほどのお方でも、ですか？」

「俺の真髄は杖を用いた魔法の行使にある。もつとも、魔法薬学自体

苦手というわけではないがな。だが、マグルの設備を使った応用的なものとなるとさっぱりだ」

ヴォルデモートはそう言っただけで肩を竦める。

私はヴォルデモートの横に横に移動すると、研究の成果を噛み砕きながら説明を始めた。

「まずは月の都で研究したときのデータを元に、製法や原料を変えずに作成しました。その結果が写真にある二体の実験体です」

「この燃えているやつだな。記録を見る限りだと、体の再生能力も脳の破壊には耐えられないと」

「まあ、そもそも蓬莱の葉自体そこまで高い治癒能力を与えるものではありませんから、その点に関しては大きな問題ではありません。魂の固定化がなされているかを確認めたのですが、結果としては実験体は死亡しました」

ヴォルデモートは小さく唸りながら資料を捲る。

「もしこの蓬莱の葉が完全なものだった場合、同じように脳を破壊するとどうなる？」

「脳を破壊された瞬間一度死に至ります。ですが魂は現世に固定されているためあの世へと向かうことはありません。その後、周囲の穢れをエネルギーとして肉体の再生、復活を遂げます」

「穢れをエネルギーに？　そもそも穢れとはなんだ？」

「地上の言葉で説明するのは少し難しいのですが……そうですね。簡単に言ってしまうえば生きること、死ぬことが穢れにあたります」

「そんな概念のようなものを力に変えることが出来るのか？」

やはり穢れというものに疎い地上の民には理解しにくい話ではあるか。

「月では穢れを明確に観測できておりますので」

「では、今回の実験体二人は穢れによる身体の再生自体は成功しているが、魂の固定化が出来ていなかった故に二人とも死亡したと」

「あ、いえ。子供のほうはまだ生きてますけどね」

「……は？」

ヴォルデモートは不可解な顔をこちらに向ける。

「今も研究室で燃え続けていますよ？ 今日でちょうど二週間でしょうか」

「殺してないのか？」

「殺したらデータが取れないじゃないですか」

ヴォルデモートは資料を一枚捲る。

そこには現在研究室で燃え続けている少女の顔写真が貼ってあった。

「私の見立てでは一年ぐらいは持つんじゃないかと考えてます。今のところ身体が燃える速度よりも再生する速度の方が上です。でも投与した当初と比べると少しずつですが再生速度が落ちていってはいるのでどこかのタイミングで死に至るでしょうね」

「そ、そうか。だが薬の製法を新しくするなら殺してしまってもいいんじゃないか？ ほら、いつまでも研究室の片隅で燃え続けると邪魔だろう？」

「そうですね？ キラキラしていいインテリアだと思うんですけど。でもまあ確かに原料から製法を変えるならばあまりこの先は有用なデータを取ることは難しいでしょうね」

「そうか、ならあれだ。殺すべきだな」

「そうですね。では帰ったら死の呪いで処分することにします。身体の破壊ではなく、魂そのものを殺すとどうなるか気になりますし」

私は資料をまとめると、鞆の中に丁寧に仕舞う。

そしてヴォルデモートに恭しくお辞儀をし、ノクターン横丁のアジトを後にした。

## 第十七話 闇癒者(ごっこ)

一九七三年、六月末。

私は解析したデータのまとめられた資料にペンを走らせながらエバンスの淹れたコーヒーを飲む。

その時、卓上のカレンダーがふと目に留まり、私は顔を上げた。

「そういえば、そろそろクローンが帰ってくる頃ね。学校生活が上手く行っているか確認しに行った方がいいかしら」

私は肘掛椅子を回転させると、部屋の隅で試験管を洗っているエバンスの方を見る。

「そういえば、貴方の娘もそろそろ帰ってくる頃よね？」

「はい」

「そう。なら一旦研究室を閉めましょうか。一週間ぐらいは家族水入らずで過ごしてきなさい」

「畏まりました」

エバンスは無表情で頭を下げる。

私は手元の資料をまとめて机の引き出しに仕舞った。

ホグズミード駅を出発したホグワーツ特急は、日が暮れる少し前にロンドンにあるキングス・クロス駅へと到着した。

車内販売で買ったお菓子をあらかた食べ終え、ぼんやりと窓から駅のホームを眺めていたクローンの肩をシリウスが後ろから叩く。

クローンは少しびびくりしたかのように肩を震わせて後ろを見たが、肩を叩いた者の正体が実の兄ということになっている少年だとわかるとほっと息を吐いた。

「驚かせないでくださいお兄様」

「驚かせないでくださいじゃない。お前がいつまで経っても列車から降りてこないからこうやって探しに来たんじゃないか」

クローンは視線を窓へと戻すと、小さくため息を吐く。

その様子を見て、シリウスは意外そうな顔をした。

「もしかして、クリスマスで帰った時に親と喧嘩したとか？」

「いえ、ただここから動くのが少々億劫だっただけです」

クローンはコンパートメントの座席から立ち上がると、座席の下に入れていたトランクを手に取る。

そして半ばそれを引きずるようにしながらシリウスと共にホグワーツ特急を降りた。

この部屋に帰ってくるのも久しぶりだ。

私は自分の部屋に作った隠し部屋に姿現わしすると、隠し部屋の扉になっっている本棚をずらし部屋へ入る。

そして自分の部屋のベッドに腰かけると、部屋をぐるりと見回した。

クリスマスに見た時と内装は殆ど変わっていない。

まあ、クリスマスにクローンをホグワーツへと送り出してから誰もこの部屋を使っていないので当たり前と言えば当たり前なのだ。

きつと屋敷しもべ妖精のクリーチャーがたまに掃除に入るぐらいなのだろう。

「…………ん。帰ってきたわね」

私は魔法で気配を殺すと、部屋の隅に隠れる。

しばらくそのまま待っていると、クローンが大きなトランクを引きずりながら部屋の中に入ってきた。

クローンはトランクを部屋の隅に投げるように置くと、疲れたように無言でベッドに横になる。

そして、天井を見上げながらぼそりと呟いた。

「…………これでいいんでしょうか」

「それでいいのよ」

私が声を掛けた瞬間、クローンは電撃でも浴びたかのように跳ね起きる。

そして驚愕の顔を私に向けてきた。

「あ、ああああ…………あのあ——」

「落ち着きなさいな。何をそんなに慌てているのよ」

私はクローンに対しニツコリと微笑みかける。

クローンは無言で口を何度か開閉させると、何かを諦めたかのように息を吐いた。

「お、お久しぶりです」

「ええ、久しぶり。ホグワーツは楽しいかしら？」

クローンは、何を話せばいいか迷っているかのように目を泳がす。

私はそんなクローンに対し開心術を掛けた。

「……なるほど。無事に学校には馴染んだようね。バーテミスとも仲がいいみたいだし」

「あ……はい。その通りです」

「生まれてまだ一年経ってないわけだし、そりや何もかも新鮮か」

私はローブから杖を抜くとクローンに近づく。

クローンは私の黒く細い杖を見てブルブルと体を震わせはじめた。

「あら、震えてるわよ？ 処分されるって思ってる？」

「あの、私はもう用済——」

私は杖を振り上げると、クローンの口元についていたヌガーの破片を魔法で消した。

「ホグワーツ特急でしこたまお菓子を食べてきたわね。夕食が食べれなくなるわよ？」

私は杖を仕舞い、ベッドに座っているクローンの隣へ腰かける。

クローンはほっと息を吐くと、少しもじもじとしながらホグワーツでの思い出を話し始めた。

「そう。充実しているようでなによりよ。その調子で引き続き私の代わりにセレネ・ブラックとして生きて頂戴」

小一時間クローンの話を聞いた私は、そう言いながらベッドから立ち上がる。

先程まで楽しそうにホグワーツでの思い出話を話していたクローンだが、少し不安そうな顔で私に聞いていた。



「もし、私が用済みになったら、やはり私は処分されてしまうのでしょうか？」

「そうねえ……どうして欲しい？」

私は少し意地悪そうな顔でクローンに問う。

クローンはさらに深刻そうな顔になりながら答えた。

「大広間で提供される料理は美味しいです。ルームメイトの女の子たちはみんな優しいですし、魔法の勉強も楽しいです」

「そう」

「毎日が新鮮で、毎日がキラキラしてて……」

「ええ」

「……お願いします。殺さないでください……お願いします。お願いです。お願いですから……」

私はクローンの頭にポンと手を置く。

そしてくしゃくしゃと髪を撫でた。

「まあ、その点に関しては安心しなさいな。用済になったからって、これが理由で殺したりなんかしないわ」

「本当ですか？」

「ええ、勿論本当よ。月の民である私が卑しい地上のた——いや、それは関係ないわね。自分自身に嘘をつかないように、自分の分身である貴方に嘘をつくわけじゃない」

クローンは少し恥ずかしそうに顔を赤らめる。

やっぱり生まれたばかりのクローンは単純で扱いやすい。

私は名残惜しそうに白く長い髪をスツと撫でると、ベッドから立ち上がった。

「それじゃあ、私はもう行くわ。新学期からは貴方も先輩なわけだし、しっかりするのよ」

クローンは大きく頷くと、柔らかな笑みを浮かべる。

私はその顔を見て一度頷き、姿くらましてグリモールド・プレイスの実家を後にした。

一九七三年、七月。

私が研究室で暴れる検体から眼球を摘出していると、研究室の隅に置かれた場違いな見た目のキャビネットがガタガタと音を立て始める。

私はその音を聞き、途中まで引っこ抜いた眼球から手を離した。

「エバンス、急患が来るわ」

「準備致します」

私が指示を飛ばすと、エバンスは空きのベッドを私の近くへと転がしてくる。

私は血まみれのゴム手袋をゴミ箱に捨て、一度綺麗に手を洗う。

そうしているうちにキャビネットが勢いよく開き、中から二人の男が転がり出てきた。

「くそっ、やられた……ホワイト！　いるか!？」

中から出てきたのはマルシベールとドロホフだった。

二人ともボロボロだが特にドロホフの方がかなり怪我が酷い。

体の半分が焼け焦げており、特に右腕などはほぼ炭化している。

何なら指先にはまだ火が灯っていた。

「いるわよ。って、また手酷くやられたわね」

私は杖を引き抜き、ドロホフの指先に灯っている火を消火する。

そしてエバンスと二人でドロホフをベッドに寝かせ、服を全部剥ぎ取った。

「悪霊の火で自滅した?」

「あー……まあそんなところだ。自滅したってよりかはさせられたって言う方が正しいが」

マルシベールは気まずそうに目を逸らす。

私はドロホフの全身に魔法薬を塗りたくると、治癒の魔法で細かい怪我の治療を始めた。

そう、現在私の研究室とノクターン横丁にあるヴォルデモートの拠点は姿をくramsキャビネットとは、対になったもう一つのキャビネットと内部が繋がっており、内部を通ることで離れた場所に瞬時に移動

できる魔道具だ。

煙突飛行に近いが、煙突飛行とは違い行き先が固定されている。それだけ聞けばただただ煙突飛行の下位互換だが、魔法省が管理している煙突飛行とは違い移動した形跡が魔法省に察知されることがない。

ドロホフたちのような日陰者が使うにはもってこいな魔道具というわけだ。

私はドロホフの処置をある程度終わると、マルシベールの方に顔を向けた。

「貴方は怪我は？」

「多分肋骨が折れてる。内臓に刺さってはいないと思うが……あとあちこち痛え」

「服を脱いで怪我を見せなさい」

マルシベールは痛みを我慢しながら不器用に体を動かし下着以外の服を脱ぐ。

確かにドロホフと違い火傷自体は軽度だ。

私はマルシベールにいくつか魔法薬を飲ませると、皮膚の上から折れた肋骨を魔法で正規の位置へ動かし、そのまま元の形へ接合した。

「誰にやられたの？」

「ムーデイだ」

「ああ、御愁傷様ね」

ムーデイ家といえば代々優秀な闇祓いを輩出している家系だ。

特に今代のアラスター・ムーデイは天性の戦闘センスを持っているらしく、既に何人かのヴォルデモートの仲間がムーデイによって捕えられていた。

「早いうちに始末してしまった方がいいんじゃないの？」

「そう思っつてこつちから襲撃したんだよ。……クソっ！」

マルシベールはドロホフの寝ているベッドを力任せに殴りつける。

「で、返り討ちにあったと。マヌケね」

「なんだと!?!」

私はマルシベールの怪我が全て治ったことを確認し、最後にポロポ

口になっている服を修復する。

これでマルシベールの方は終わりだ。

私はもう一度ドロホフの処置を再開する。

先程魔法薬を塗った火傷がだいぶ回復してきている。

私は魔法で炭化した皮膚を全て除去すると、ベッドに拘束されている先程眼球を摘出しかけ検体に近づき、メスを用いて背中や臀部の皮膚を切り取った。

そしてその皮膚をドロホフの肌に丁寧に合わせ、魔法で馴染ませる。

「なあ、そんなツギハギしなくても魔法や薬だけで治るんじゃないか？」

私がドロホフの皮膚移植をしていると、その様子を見ていたマルシベールがやや顔色を悪くしながら呟く。

「勿論、魔法や薬でも治るけど、ゼロから皮膚を再生させるのってちよつと時間が掛かるのよね。だったら完成品を貼り付けて魔法で馴染ませた方が早いし、仕上がりもいいのよ」

まあ、魔法界ではこのような切ったり縫ったりといった治療は一般的ではない。

私のこれはどちらかというマグルの治療のそれに近いだろう。

「あ、指先は骨まで炭化してるわね。折角だから新しい指を移植しましょうか」

私は追加で男の指を切断し、ドロホフの手へと繋げる。

そして接合部へと治癒の魔法を掛け、完全に一体化させた。

これで怪我自体は完全に治った。

あとは体力さえ戻せば元通りだ。

私はドロホフの頭を何度か叩き、意識が戻るか確かめる。

ドロホフは最初は苦しそうな表情を見せたが、すぐに目を開けてベッドの上から跳ね起きた。

「——ッ!!」

「おはよう。痛いところはないかしら？」

ドロホフは状況が掴めていないのか、素っ裸のまま研究室を見回



ないだろう。

「まあこんな感じだからドロホフには使えないわ」

「あ、ああ。そうだな。あんたが正しい……」

マルシベールはチラチラと検体を見ながらそう言った。

「エバンス、掃除の準備をしなさい。アバダケダブラ」

これ以上研究室が肉片だらけになると私の白衣の裾が汚れる。

私は検体に死の呪いを掛けながらエバンスにモップを準備させた。

「まあとにかく、傷の治療は終わりよ。ただ体力自体は戻ってないから今日と明日は早く寝て身体を休めること。あと、エネルギーの補給も忘れずにね」

「ああ、助かった。今後ともよろしく頼む」

ドロホフは少し検体から目を背けながら言った。

「怪我しないのが一番なんだけどね。いつでも来なさい」

私は死んだ検体を魔法で消失させると、机の隅に積んであるドーナツを一つ手に取り、その穴越しにキャビネットに帰っていくマルシベールとドロホフを見る。

そして、そのドーナツを一口齧った。

## 第十八話 不老の魔法使い

一九七四年、一月。

私は研究室の机の上に広げた資料と睨めっこしながら小さく唸る。

「何か決め手に欠けるわ」

蓬莱の薬というのは、原料にそれほど貴重な素材を使わない。

ありふれたとまではいかないが、比較的容易に手に入る素材で構成されている。

月の石だけが地上では少々ネックではあったが、それも運良く入手することができた。

だが、やはりというか、月のレシピは地上の技術では不可能な行程がいくつか存在している。

いくら同じ素材を使っても、製法がそのまま適用できないなら意味がない。

となれば、その行程を変更させても問題ないように薬の成分を変えるしかないだろう。

「エバンス、少し出るわ」

「いってらっしゃいませ」

私は今まさに私の元にコーヒーを運んできたエバンスにそう告げると、椅子にかけていたローブ代わりの白衣に袖を通す。

そして研究室の隅にあるキャビネットの扉を開け、その中に入った。

キャビネットを抜けた先はノクターン横丁にあるヴォルデモートの隠れ家の一室だ。

私は体についた埃を軽く払うと、部屋の中を見回す。

普段ならロジエールやドロホフが酒を飲みながらポーカーで盛り上がったたりしていたりするが、今日はその二人の姿は見えない。

代わりに、金髪の長髪を後ろで結んだ青年がこちらを見ながら口をポカンと開けていた。

「あら、新人？」

そう声を掛けたが、私はその肌が青白い青年に見覚えがある。

去年までホグワーツに在学していたルシウス・マルフォイだ。

闇の魔法使いと繋がりがあるといふ噂は聞いていたが、まさかそれがヴォルデモートだったとは。

「昨年ホグワーツを卒業したルシウス・マルフォイです。貴方は？」

「魔法省魔法法執行部闇祓い局所属アメリカ・テイラーよ」

私がそう名乗った瞬間、ルシウスがわかりやすく硬直する。

私は小さく肩を竦めながら続けた。

「マルフォイと言ったわね。聖二十八一族のマルフォイ？ このボロ屋は貴方の家の所有かしら。このボロ屋を死喰い人が根城にしているというタレコミがあつてね。まさかこんなロンドンの街中に拠点を構えるはずがないから多分ガセ情報だとは思うけど一応調べないといけないでしょう？ というわけで家宅搜索させて貰うわよ」

私は一方的に捲し立てると普段ヴォルデモートが使っている部屋の方へと歩き出す。

ルシウスは私が背を見せたことでようやく我に返ったのか、慌てて私を引き留めた。

「ま、待ちたまえ。勝手に漁られては困る。それにタレコミだと？」

「一体誰から？」

「勝手に漁らないと家宅搜索にならないでしょう？ あ、この部屋から見るわね」

私はルシウスの制止を払い除けると、ヴォルデモートの部屋のドアノブに手を掛けると、ゆっくり押し開く。

部屋の椅子にはヴォルデモートが腰掛けており、机に広げた地図に羽ペンで書き込みをしていた。

「ヴォルデモート、この新人早々に処分したほうがいいわ。何の役にも立たないじゃない」

私はルシウスの肩をバンバンと叩きながらヴォルデモートに告げる。

ヴォルデモートは少し顔を上げると、すぐに地図に視線を戻した。

「あまり新人を虐めるなホワイト。何か用か？」

「薬の素材で必要な物があるのよ。少し相談に乗って欲しくてね」



私はルシウスを解放すると、部屋の中に入っていく。

ルシウスはわけがわからなと言わんばかりの表情を浮かべると、そっと部屋の扉を閉じようとした。

「次は無いぞルシウス」

「——ッ!?! 申し訳ございません我が君……」

ルシウスは急いで扉を閉めると走って逃げていく。

ヴォルデモートは既にルシウスに興味を失くしたのか、手に持っていた羽ペンを机に置いてこちらに向き直った。

「必要な素材と言ったな。生きた人間か？」

「それは今のところ間に合ってるわ。私が今欲しいのは賢者の石よ」

「なるほど、賢者の石か……賢者の石だ?!」

ヴォルデモートは思わずと言った様子で座っていた椅子から立ち上がる。

「蓬莱の薬の調合法を見直そうと思ってね。魔法界で一番使えそうな素材が賢者の石なのよ。入手法に心当たりはない？」

「そう簡単に入手できるものなら、今頃魔法界は不老者で溢れている」  
ヴォルデモートは小さくため息をつきながら椅子に座り直す。

「今現在、賢者の石を所有しているのはニコラス・フラメルだけと言われている。やつについては知っているか？」

「本で読んだことがあるわ。有名な錬金術師よね? まだご存命なの?」

「ああ、まだ生きています。既に六百歳を超える老齢だ」

六百歳。マグルと比べて長生きする傾向にある魔法使いと言えども、二百歳に届く者は少ない。

賢者の石から生成できる命の水による延命効果がなければ到底ここまで長生きは出来ないだろう。

「まだ生きていますなら話は早いじゃない。ドロホフあたりを派遣してサクツと製法を聞き出してきて貰いましょう」

「そう簡単な話ではない。今現在、賢者の石が全くと言っていいほど世に流通していない理由はわかるか? 卑金属を黄金に変え、老いることがなくなる命の水を生成することができ石だ。誰もがその石

を狙うだろう。だが、今現在ニコラス・フラメルは襲撃を受けることなく平和に暮らしている」

「何かトリックがあるのね？」

ヴォルデモートは私の言葉を鼻で笑うと、愚かなことだと言わんばかりに口を開いた。

「トリックなんて大層なものではないさ。もつと馬鹿げた話だ。やつは精製した賢者の石をグリーンゴッツに預けると、その製法を綺麗さっぱり頭の中から忘却したのだ」

「製法を忘却した？」

私は思わずヴォルデモートに聞き返す。

「ニコラス・フラメル、やつは知識の探求者ではなかったという話さ。死にたくないという私利私欲のために石を作り上げ、自分の身が危険に晒されないように製法を完全にこの世から消し去った。フラメルを襲っても意味がない。やつはもうただ長生きしているだけの老人だ」

「でも、生きていくということは賢者の石の現物はあるわけでしょう？ それを奪うことはできないの？」

「まあ、それは出来るだろうな。だが、それに関しても万全の備えをしているはずだ。そう簡単にはいかないだろう」

確かに守りが万全でなければ、今頃ニコラス・フラメルは老衰により死んでいる。

今も生きていくということはすなわち、五百年以上は石を守り抜いているということだ。

「どのように管理しているかは知らないのね？」

「流石にな」

「私としては、一瞬でも賢者の石の実物に触れることが出来ればそれでいいのよねえ。成分さえ判れば再現できるでしょうし」

ニコラス・フラメルほどの高名な魔法使いを襲うのはそれ相応のリスクが伴う。

ニコラス・フラメル自体六百年を生きるベテラン魔法使いであるし、人脈もそれなりに広いため多くの魔法使いを敵に回すことにな

る。

ニコラス・フラメルを殺すこと自体はそう難しくもないだろう。

だが、死ぬまで拷問にかけたところで石の在処がわからなければ何の意味もない。

マグルを相手にする時とは違う。

慎重に動かざるを得ないだろう。

「今回に関しては任せっぱなしというわけにも行かないわね。私自身が動くとしましょう」

「何か作戦が？」

「ええ。誰も不幸にならない。それはそれは素敵な作戦よ」

私はヴォルデモートの向かい側の椅子に腰掛け、今思いついた作戦の詳細をヴォルデモートに話して聞かせた。

一ヶ月後、私はダイアゴン横丁の入り口になっているパブ、漏れ鍋を訪れていた。

もつとも、店主は私の幼年期の姿を知っているため、多少の変装はしている。

白い髪はブロンドに染め、後ろで一つに纏めている。

服装もいつもの白を基調としたものではなく、茶色っぽい落ち着いたものだ。

それに大きな鼈甲の眼鏡をしてしまえば、いつもの私の面影はなくなる。

魔法で全くの別人に変装することもできるが、今回に限ってはそれをする方がリスクが伴うだろう。

魔法界には、相手の変装を暴く魔法が無数に存在している。

もしそのような魔法で変装が解けてしまえば、何かやましいことがあると言っているのと同義だ。

だとしたら、変装は魔法を使わずに出来る範囲に留めておいたほうがいい。

私はカウンターで紅茶を注文すると、テーブル席に腰掛ける。

待ち合わせの時間は既に過ぎているため、もうそろそろ待ち人も店にやってくるはずだ。

そんなことを考えていると、店の奥が一瞬緑色の光で照らされる。私がそちらに視線を向けると、かなり老齢の男性がローブについた埃を払いながらこちらに歩み寄ってきた。

「日刊予言者新聞の記者というのはアンタか？」

「はい。お待ちしております。フラメル様」

私は椅子から立ち上がると老齢の男性、ニコラス・フラメルに向かって頭を下げる。

フラメルは私のお辞儀に軽く手を上げて応え、私の前の席へと腰掛けた。

「本日は遠いところご足労いただきありがとうございます。私はルナ・ホワイト。日刊予言者新聞で記者をやらせて頂いております」

「わしのような古い人間の記事に需要があるとは思えんがな」

「とんでもない。フラメル様は生きる伝説ではありませんか」

私はカウンターに合図を送り、フラメルの紅茶を用意させる。

「取材の内容は手紙でお送りした通りです。錬金術の終着点である賢者の石とはどのような物質なのか。そして、それを調査してみせた天才錬金術師は現在どのような生活をしているのか。そのような内容の記事を書かせて頂くと思います」

「手紙では、簡単な取材のあと、実際に石の現物や命の水の生成風景まで写真に収めたいという話じゃったな」

フラメルは少し悩むような仕草で私の顔を見る。

「はい。あらゆる金属を黄金に変える石。不老不死の薬を作り出す石。読者へのインパクトは絶大です。忘れ去られた錬金術という分野に新たな人材を引き込むチャンスでもあります」

私は近くに他の客がいないことを確かめると、少し声を潜めて言った。

「それに、石の守りがどれほど万全なのかを今一度人々に知らしめることこそ、窃盗犯や闇の魔法使いに対する大きな抑止力になると思いませんか？ 現在、ヴォルデモートと呼ばれる凶悪な魔法使いが影

響力を広げています。もし彼らが石を求めたとしたら、一番初めに襲われるのはフラメル様、貴方です。そうならないためにも石がどこに、どれほどの守りで保管されているかを世間に周知した方がいいと思いますませんか？」

「口が上手いのう……じゃが、利害は一致しておるようじゃな」

フラメルは私の言葉に何度か頷く。

「今日、お主の取材を受けようと思った一番の理由はまさにそれじゃよ。石の守りが盤石であるという事実を広く世間に知らしめようと思っておる。お主の言う通り、強盗犯の矛先をわしから保管場所へと移すためじゃ。わしも妻も長い時を生きるベテランではあるが、二人で対処できる人数には限りがあるからの。自宅を襲われたら堪ったものじゃないわい」

フラメルは店主からティーカップを受け取ると、静かに口をつける。

「それに、錬金術が現在メジャーな学問ではないというのも確かな話じゃ。賢者の石には、人々を惹きつける魔力がある。この記事をきっかけに錬金術に興味を持つ魔法使いが増えればわしとしても嬉しい限りじゃ」

「よかった。取材をお受けしてただけるんですね」

私はほつと安堵の息を漏らして見せる。

「では、初めにフラメル様の簡単な経歴と、錬金術に興味を持ったきっかけなどお話頂ければと」

「よかろう。わしが錬金術に興味を持ったのは、わしがポーバトン二年生のとき……」

フラメルは今まで何度も似たような取材を受けてきたのか、まるで台本でもあるかのように流暢に話し始める。

私は時折メモを取りながらフラメルの話をさも興味があるように聞いた。

## 第十九話 命の水

ニコラス・フラメル六百年の歴史は、フラメル本人の語りによって小一時間程に纏められた。

私はその話を簡単に手帳にまとめると、興味深そうに相槌を打つ。「と、こんなところかの。学者の生涯など、さして面白みもない話じゃないわい」

それにしては随分ノリノリで語っていたように思うが。

私は手帳を閉じながら、軽く首を振る。

「いえいえ、そんなことは。大変興味深い話でした」

「それならばよいが……と、次はなんだったかの？」

フラメルは空のカップを手に持ち、中身が入ってないことに気がつくのと、そのままソーサーに戻す。

私はそれを見て、ポンと手を叩いた。

「はい！ 次はフラメル様が錬金に成功したという賢者の石の取材をさせて頂けたらなと」

「そうじゃったそうじゃった。では、このまま向かうとしよう」

フラメルはそう言いながら椅子から立ち上がる。

私はテーブルの上にお茶の代金分の硬貨を置くと、フラメルを追って立ち上がった。

「差し支えなければ、目的地をお聞きしても？」

ゆつくりとしたペースで歩き出すフラメルの横を付き添うように歩く。

フラメルは私の質問に対し、特に隠すことなどないと言わんばかりの口調で答えた。

「グリーンゴッツじゃよ。魔法界ではあそこ以上に物を保管するのに適している場所もない。何せ創業以来、一度たりとも盗みを許しておらんのだからな」

「なんと言いますか……意外ですね。もつと特殊な場所に保管しているものとはかり思っていました」

「適した場所がそこにあるのに、わざわざ他の場所を用意することもあるまい。お主だってそうじゃろう?」

フラメルはニヤリとすると、杖を取り出して中庭にあるレンガの壁を突く。

私はレンガの壁がアーチ状に変形するのを見ながら、ほっと胸を撫で下ろした。

もし強引な手段を取っていたら、グリーンゴッツを正面から破らなければならなくなるところだった。

流石にそれはリスクが高すぎる。

やってやれないことはないだろうが、全く痕跡を残さず金庫破りを行うのは至難の業だろう。

私とフラメルはダイアゴン横丁の通りをまっすぐ進み、グリーンゴッツの扉を潜る。

そして大理石の床を靴底で叩きながら受付へと足を進め、受付にいるゴブリンへと声をかけた。

「わしの金庫に用があるんじゃないか」

ゴブリンはフラメルの顔を見上げると、掛けていた眼鏡をくいと上げる。

そして横にいる私に目を向けた。

「そちらのお方は?」

「連れじゃ」

「奥様に怒られますよ」

ゴブリンはそんな軽口を飛ばしながら受付の席を立つ。

「お主が黙って居れば丸く収まる話じゃて」

「勿論、顧客の個人情報を守られるべきものです」

ゴブリンは慣れた様子でフラメルを案内し始める。

きっとこのゴブリンがグリーンゴッツに入行した時からの付き合いなのだろう。

私たちはゴブリンの案内で大理石のエントランスから狭い石造りの通路へと進み、小さなトロッコへ乗り込む。

ゴブリンは私とフラメルの体がトロッコに収まったことを確認す

るとトロツコを発進させた。

トロツコはかなりの速度で地下へ地下へと下っていく。

ブラック家の金庫へヴァルブルガと共に何度か行ったことがあるが、賢者の石が保管されている金庫はかなり深いところにあるようだ。

「今回は早かったですね。前回から半年も経っていないのでは？」

「命の水の備蓄自体はまだある。今回は別件じゃよ」

「……ああ、なるほど」

ゴブリンは私の方をチラリと見て、納得したように頷く。

私はそんな二人のやりとりを聞きながら入り口から金庫までの道のりを記憶した。

発進してから十分ほどが経過しただろうか。

トロツコは甲高い音を立てて速度を落とし、一つの扉の前で停止した。

「七二三番金庫です」

ゴブリンはトロツコから飛び降りると、扉の前へと歩いていく。

私はフラメルがトロツコから降りるのを手伝いながら、金庫の扉を観察した。

基本的にグリーンゴッツの金庫の扉には鍵穴が付いているが、この金庫の扉には鍵穴らしきものは存在しない。

どうやら物理的な施錠ではなく、魔法的な施錠がなされているようだ。

「下がってください」

ゴブリンは私に向かってそう言うと、細く長い指で扉を撫でる。

すると扉は溶けるように消え去った。

「グリーンゴッツの小鬼以外の者がこれをやりますと扉に吸い込まれて中に閉じ込められてしまいます。ですので、近くの金庫の扉にも不用意に触らないようにしてください」

ゴブリンは扉の前を開けるように一歩下がる。



「さて、中へおいで」

フラメルは少々得意げに金庫の中に入ると、私に対して手招きした。

「それでは、失礼いたします」

私は招かれるままに金庫の中へと入りこむ。

金庫の中には小さな茶色の包みが一つ置かれていた。

フラメルはその小さな包みを拾い上げると、そっと包みを解く。

その中には片手で握りこめるほどの大きさの深い赤色の石があった。

「これが賢者の石じゃ」

「おお……。写真を撮りたいので、手のひらの上に乗せて掲げて貰ってもよろしいですか？」

フラメルは私の要望通り片手の上に賢者の石を置き、胸の前に掲げる。

私は首から掛けていたカメラで数枚写真を撮り、フラメルに笑顔を向けた。

「もう大丈夫です。ありがとうございます」

「ふむ。それじゃあ、命の水を作るとしよう」

フラメルはローブのポケットから小さな巾着袋を取り出すと、さらにその中から透明な液体が入った瓶を取り出した。

「それは？」

「ただの水入りの瓶じゃよ」

フラメルは瓶の蓋を開け、賢者の石を瓶の中に落とす。

その瞬間、瓶の中の水が一瞬で沸騰したかのように泡立ち、それが収まると同時に淡い光を放ち始めた。

「これが、命の水の作り方じゃ。非常に簡単であろう？」

「凄いですね。賢者の石の成分が溶け出しているのですか？」

「溶け出しているのではない。賢者の石が触媒となり、ただの水を価値のあるものへと変化させたのじゃ」

フラメルは今度は小瓶を巾着袋の中から取り出すと、命の水を小瓶の中に注ぐ。

そしてその小瓶を私の方へ向けて差し出してきた。

「飲んでみるかね？」

「……いいのですか？」

私は真意を探るようにフラメルの顔を見る。

「飲み続けなければ意味はないからの。この量じゃ老いをひと月ほどしか止めることは出来ん。不老を体感することも難しいじやろうな。もしお主が怪我をしておったり、極度の疲労を抱えていたとしたら、多少は体感できるじやろうが」

「傷を治す効果もあるのですね。うーん、残念ながら今の私には虫刺され傷すらありませんが」

私はフラメルから命の水が入った小瓶を受け取る。

そしてフラメルとゴブリンが見守る中、その中身を一気に飲み干した。

「どうじゃ？ 何か変わったかの？」

フラメルは得意げな表情を浮かべながら私に聞く。

私は舌で感じた成分を分析しながらその問いに答えた。

「うーん、よくわかりませんね」

「まあ、そうじやろうな。少なくとも数年、確実に実感を得るには十年近く薬を飲み続ける必要がある」

私の喉を通った命の水は、胃袋を経由してすぐさま腸へと流れ込む。

そして一瞬で吸収され血液に成分が流れ込むと、そのまま血液に乗って全身へ行き届いた。

なるほど、かなりの即効性だ。

効果としては細胞の活性化と老化の防止。

若干ながら若返りの効果もあるかもしれない。

これで、命の水の成分は分析できた。

あとはこの成分を逆算して賢者の石を再現するだけだが、可能であれば賢者の石そのものにも触れておきたい。

私は小瓶をフラメルへと返すと、物欲しそうな目で賢者の石を見る。

フラメルは私のその視線に気がついたのか、少々意地悪そうな笑みを浮かべた。

「持ってみるかね？」

「え!?! いいんですか!」

「この場で盗みを働くほどお主は愚かではなさそうなので」

確かに、今この瞬間、ここにいる二人を殺害することは難しくはないだろう。

だが、その後無事にグリーンゴッツを脱出できるかが問題だ。

私は少々恭しい態度でフラメルから賢者の石を受け取ると、微かな魔力を賢者の石へと流し成分を解析する。

「おお、宝石みたいです。研磨したらルビーのように輝きそうです」  
「貴重な賢者の石を削ってしまおうというのは、なんとも女性らしい価値観と言えるかもしれんの」

なるほど、賢者の石とはかなりの魔力を溜め込める性質を持っているらしい。

内部に莫大な魔力を感じ取ることが出来る。

そして、宝石のような見た目をしているが、主成分は水銀のようだ。つまりは、賢者の石とは内部に溜め込んだ莫大な魔力を用いて金属を変化させたり、水に魔力を与える物質ということらしい。

内部に内包されている魔力が枯渇すればそれらの効果は無くなってしまう。

変換器付きの魔力タンクという説明が一番しっくりくるだろうか。

「ありがとうございます」

私はフラメルに賢者の石を返す。

フラメルは賢者の石を元あった通りに包み直すと、広い金庫の中心に置いた。

「では、戻るとしよう」

「それでは金庫を施錠しますので、トロツコにてお待ちください」

私とフラメルが金庫を出ると同時に、ゴブリンは金庫の横の壁を撫でる。

すると消えてなくなっていた扉があつという間に出現し、金庫を塞

いだ。

私はフラメルがトロツコに乗り込むのを手伝うと、頭の中で賢者の石の成分から製法を逆算し始める。

私の予想が正しければ、賢者の石を作成することはそう難しくはないだろう。

行きと同じように十分ほどトロツコに揺られ、私たちはエントランスへと戻ってきた。

フラメルは担当者のゴブリンを簡単に挨拶を交わすと、用は済んだと言わんばかりに真っ直ぐ出入り口を目指して歩き始める。

私もその横に寄り添いながらグリーンゴッツの外に出た。

「いやあ、本日は本当にありがとうございました。おかげで良い記事が書けそうです」

私は少々わざとらしく手帳を叩いてみせる。

「記事に關しましては執筆後、編集長の確認が終わり次第日刊予言者新聞に掲載させて頂く予定です」

「そりや楽しみじゃわい」

フラメルは陽気に笑うと、通りの真ん中で立ち止まる。

「わしはこの後妻から頼まれている買い物を済ませてから帰ろうと思っておる。この場で失礼させてもらおうよ」

「おっと、そうでしたか。道中お気をつけておかえりくださいね」

私はにこやかな笑みで手を振る。

フラメルも軽く手を振りかえすと、私に背を向けた。

それを見て、私もヴォルデモートが潜伏するノクターン横丁のアジトへ戻ろうとする。

その時だった。

「おっとそうじゃ」

フラメルは軽くこちらを振り返ると、今まで以上に自然な笑みを浮かべて言った。

「高みは示した。後はお前さん次第じゃ。応援しておるよ」

バチンという空気を切り裂く音と共にフラメルはその場から姿をくまらます。

私は先程までフラメルが立っていた場所を見ながら、小さく呟いた。

「狸ジジイめ」

フラメルは私が日刊予言者新聞の記者ではないことを見抜いていたのだろう。

あの口ぶりからして、私のことを駆け出しの錬金術師か何かだと思っっているに違いない。

まあ、賢者の石を作ろうとしているという点だけ見ればそれも間違っていないが。

私は路地裏へ入り込むと、自分の研究室へ姿くまらしました。

一週間の研究と三度の試作の末、賢者の石は完成した。

私は研究室の蛍光灯に賢者の石を透かす。

まだ、魔力は込めていないのでこの賢者の石は機能していない。

フラメルが所持していた石にはかなり莫大な魔力が込められていたが、フラメルは一体どこから魔力を入手したのだろうか。

「ま、どうでもいいことか。エバンス、コーヒー」

「はい。只今」

研究室の片隅でモップを掛けていたエバンスは、私の命令を聞くと洗面台の方へと歩いていく。

私はその様子を眺めながら魔力の入手先に考えを巡らせる。

手っ取り早いのは魔法使いが直接石に魔力を込めることだ。

変換の必要もなく、大きなコストも掛からない。

だが、それで集まる魔力は高が知れている。

「蓬萊の薬のように周囲の穢れを魔力に換える……いや、すぐに周囲の穢れが尽きてしまうだけだわ。だとしたら、もっと根本的な……」

私は少し考えた後、研究室の隣に設置してある実験体用の牢からマグルの男を一人研究室へと連れてくる。

服従の呪文を掛けられている男は、恍惚とした表情を浮かべながらベッドの上に寝転んだ。

「フラメルがこんな方法を取ったとは思えないけれど、私にはどうでもいいことね」

私は男のお腹の上に石を置き、賢者の石を触媒として男の生命力を魔力へと変換し始める。

やはりというか、賢者の石の変換効率には目を見張るものがある。月の都の水準で見ても、かなりの高効率だ。

私は目の前の男の生命力が尽き、死んだことを確認すると賢者の石を取り上げる。

溜まった魔力の量は決して多くはないが、薬の研究用に命の水を生成するぐらいなら十分だろう。

私はビーカーに水を注ぐと、その中に賢者の石を入れる。するとグリーンゴツツの金庫の中で見た通り、水は一瞬で泡立ち、それが収まると同時に淡い光を発し始めた。

私はその命の水を空のビーカーに半分注ぎ、今まさにコーヒーを私の元にとってきたエバンスへと渡す。

エバンスは私からビーカーを受け取ると、少し首を傾げた。

「ホワイト様、これは？」

「不老の薬。貴方にお裾分けしてあげる」

私は自分のビーカーをエバンスのビーカーへと軽く打ちつける。そしてエバンスと共にビーカーの中身を一息で飲み干した。

## 第二十話 人間牧場

「はい。これ上げるわ」

ノクターン横丁にあるヴォルデモートの隠れ家の一室。

私は目の前に座るヴォルデモートに対し賢者の石を差し出した。

ヴォルデモートは私から石を受け取ると、しばらく不思議そうに見つめる。

「なんだこれは」

「なについて、賢者の石だけだ」

賢者の石という単語に、ヴォルデモートの目の色が変わる。

私はその表情を見て内心ほくそ笑んだ。

「成分さえ分かれば再現は難しくはなかったわ。それは研究用の予備としていくつか作成したうちのの一つ」

「それじゃあ、その石を使えば不老が手に入る。そういうことだな」

ヴォルデモートは賢者の石をランプに透かし、ニヤリと笑う。

私はそれを見て大袈裟に肩を竦めてみせた。

「残念だけど、そこまで美味しい話ではなかったわよ。賢者の石を使って延命を図ることは出来るけど、真の意味で不老不死を手にすることは叶わない」

私はヴォルデモートに賢者の石が魔力の変換器であること、大容量の魔力タンクとしての性質があることを説明する。

ヴォルデモートは私の話を聞き終わると、少しむすつとした顔でため息をついた。

「なるほどな。自分の魔力で命の水を生成し続けるというのはあまり現実的ではなく、他者の魔力を奪う必要があるということか。それに、延命と怪我の治療程度の効果しかなく、肉体が大きく損傷した場合に死に至ると」

「そういう意味では吸血鬼になった方がよっぽど不老不死と言えるかもしれないわね。命の水による延命はあくまで老化しないだけで、不死を保証するものではない」

ヴォルデモートは少し残念そうに賢者の石を机の上に置く。

私は鞆の中から少々大きめのボトルを取り出しながら言った。

「でも、貴方の場合は命の水を飲み続けたほうがいいわ。貴方、あまりにも魂が希薄すぎるもの。それ、何かの呪い？　魂を引き裂かれたりでもした？」

私がそう言った瞬間、ヴォルデモートが勢いよく立ち上がり、私を仰向けに押し倒す。

ヴォルデモートはそのままの勢いで私の上に馬乗りになると、私の眉間に杖の先端を押し付けた。

「まさか感付かれるとは。いつから気が付いていた」

打ち付けた背中がジンジンと痛む。

右手に持っていたボトルは私の手から零れ落ち、床を転がっていった。

「初めて貴方に会った時から。月ではね、魂や生命という概念さえも研究し、ある程度自由に操作できるレベルにまで達している。貴方の魂は一人の人間としてはあまりにも希薄。まるで半分以上が既に死んでいるか、もしくは分裂でもしたかのよう」

私は杖が眉間に食い込むのも躊躇わず、ゆっくりと体を起こす。

そして先程までボトルを持っていた右手でヴォルデモートの後頭部に触れた。

「……いや、違う。貴方、自分で自分の魂を千切ったわね。目的は……分霊箱か」

分霊箱という言葉にヴォルデモートは表情を固くする。

私はヴォルデモートにニコリと微笑むと、ヴォルデモートの頭部を自分の目の前へと引き寄せた。

「分霊箱は殺人という行為によって自らの魂を引き裂く。ふふ、少し意外だわ。かのヴォルデモート卿に罪悪感があったなんて」

「罪悪感だと？」

「ええ、そうよ。貴方は殺人に罪の意識を感じている」

私は両手でヴォルデモートの顔を包み込みながら、ヴォルデモートの目を見る。

ヴォルデモートの固く閉ざされた心はまるで新月の森の中のように



だ。

「罪の意識があるからこそ、魂が傷つく。例えばだけど、アリを踏みつぶした時に魂が傷つくと思う？ 思わないわよね。アリ一匹を殺す程度のことでは罪の意識は生まれません。貴方が人を人だと認識し、殺人という行為が許されないことであると理解しているからこそ、貴方の魂は傷つき、そこから二つに割くことができるのよ」

優しい気な笑みを浮かべ、ヴォルデモートの頬を撫でる。

ヴォルデモートは小さく身震いすると、私の上から立ち上がり、杖を仕舞った。

「……このことは他言無用だ。分霊箱のことも絶対に他人に漏らすな」

「話すつもりはないわ。っと、本題に入っていない？」

私は背中についた砂を魔法で綺麗にすると、地面に転がっているボトルを拾う。

そして改めてヴォルデモートに手渡した。

「とにかく、貴方の魂はダメージを受けている。それを癒すためにも命の水は飲んだ方がいいわ」

「命の水は魂の傷にも作用するの？」

「元通りとまではいかないけれど、多少は修復させることが出来る」

ヴォルデモートはボトルの栓を開け、少し匂いを嗅ぐ。

そして意を決したようにボトルの中身を一気に飲みました。

その瞬間、崩れかかっていたヴォルデモートの魂の形が整い始める。

ヴォルデモート自身実感があるのか、ボトルを取り落とし何かを確かめるように自らの手のひらを見つめていた。

「これは……凄いな。というか、僕の魂はここまで疲弊していたのか」

「一人称崩れてるわよ」

私のそんな指摘が聞こえているのかいないのか、ヴォルデモートはもう一度杖を引き抜き、私が渡した賢者の石を調べ始める。

「素晴らしい触媒だ。ただの水にここまで効果を付与するとは……この命の水はセレネが生成したのか？」

「まあ、そうね。今貴方が持っている石と同じものにマグルの魂を吸わせて、その石で生成した命の水よ。人間一人の生命力をそのまま魔力に変換した」

「マグルの生命力を魔力に……なるほど、そういうことも可能なんだな」

「だからって、大規模マグル狩りなんてやめなさいよ？ それに関してはちゃんと考えがあるんだから」

ヴォルデモートは視線を賢者の石から私へと移す。

「考え？ ホワイト、次は一体何を――」

「簡単な話。資金集めも兼ねて人間牧場を作ろうと思っているわ」

「にんげ……は？」

「生命力を魔力に変換できることはわかった。後は数を用意するだけでしよう？ マグルの女を複数用意して、無理矢理十つ子を出産させる。生まれた子供には成長魔法をかけ、一年で十歳ほどの大きさに育て、収穫。生命力は賢者の石に。肉は吸血鬼や人狼に売って寸法。吸血鬼や人狼も何のリスクも冒さず人肉を食べれるならそれに越したことはないだろうし、需要はあると思うのよね」

「蓬莱の薬の研究で忙しいんじゃないか？ そんなことしなくとも――」

「いえ、これに関してはシステムだけ構築して、運営は貴方の部下にやってもらおうと思っているわ。その方が貴方にとっては都合がいいんじゃない？ 命の水を生成するために必要な魔力集めと資金集めが同時に出来るんですもの」

実際のところいいことづくめだ。

蓬莱の薬の研究にそこまで大量の命の水は必要ない。

人体実験用の人間が少しと、少量の命の水の提供さえ受ければ十分だ。

「……そうか。なら配下の人狼に声を掛けておく」

「人狼ってグレイバックのこと？ 施設を管理できるほどの知能があるの？」

「お前は人狼をなんだと思ってるんだ。人の姿の時の知能は人間と変

わからない。それに、奴らも馬鹿じゃない。満月の夜に本能に任せて管理している人間を全て食い尽くしてしまうようなことにならないようにはするはずだ」

「人狼がつてよりかはグレイバック本人の知能を疑っているんだけど……まあいいわ。貴方の言うことなら従うでしょうし」

管理を人狼に任せるなら、それに合わせて施設を設計したほうがいいだろう。

「施設の場所に希望が無ければこっちで適当に選定するけど……どこかいい場所ある？」

「特にない。お前に任せるよ、ホワイト」

ヴォルデモートはため息交じりにそう言うと、どこか疲れたようにソファアに腰かける。

私は空のボトルを鞆に仕舞い直すと、ヴォルデモートのいる部屋を後にした。

一九七四年、八月。

私はエバンスを連れて完成した人間牧場の視察に来ていた。

牧場といっても放牧地があるわけではなく、施設の殆どは地下に建設されている。

そのためどちらかと言えば牧場というより工場に近いかもしれない。

私は白で統一された清潔感に溢れる施設の階段を下り、母体が収容される予定の部屋へと入る。

「なんというか。まさか事業を本格的に始める前に出資者が現れるなんてね。どう思う？ エバンス」

「怪しさ満点ではありませんが、出資者は吸血鬼なのでしょう？」

「事業を横から掻っ攫おうとしているようにしか見えないのよねえ。まあ、私としてはそれでもいいんだけど」

出資を申し入れてきたのはスカーレット家の当主、レミアア・スカーレットだ。

一体どこから人間牧場の話を聞きつけてきたのかはわからないが、責任者ということになっているグレイバックに相当な金額を出資してきたらしい。

グレイバックもアホなので二つ返事でその出資を受けてしまった。「この事業に関して、私は表向きには関与していないことになってるし、実際に私に大きな利益があるわけでもない」

「では、どうしてこのような面倒くさいことを？ 蓬萊の薬の調合に必要な命の水の分量を考えても、人間牧場を作るほどではないでしょう。牧場の設計や母体を多胎させるための魔法薬の開発などにも少ない時間を割いています」

「半分は保険。攫ってきた人間を使うのもリスクが付きまとうし」「もう半分は？」

私は足を止め、エバンスにニコリと微笑む。

「彼のためよ」

そう、人間牧場の一番の目的は、ヴォルデモートに命の水を飲ませ続けることだ。

彼自身が思っている以上に彼の魂は傷ついている。

今のままでは彼は蓬萊の薬が完成するよりも前に自我を崩壊させるか、歪な化け物へと変貌してしまうだろう。

「少なくとも、蓬萊の薬が完成するまでは生きてもらわないと。薬を処方する前に患者に死なれるなんて三流もいいところでしょう？」

「そういうものですか」

「そういうもの。まあ、ここまでの規模になるのは少し予想外だけどレミリア・スカーレットの思惑がどうであれ、経営権を取られることだけは避けなければ。」

人間牧場の一番の目的は育てた人間の生命力を魔力へ変換することだ。

経営権を取られてしまったらそれを行うのが困難になる。

「まあ、その辺はヴォルデモートからグレイバックに釘を刺しておいてもらいますか」

私は母体の体を固定する器具や栄養を流し込むためのホースが設

計通りに部屋に設置されているかを確認めた。

「ふむ。まあ及第点かしらね。母体は母体としての機能以外は切除する予定だし、問題なく機能するでしょ」

「研究室で導入しているような培養槽ではいけなかったのです？ わざわざ本物の人間の母体を使う必要はないのでは？」

「貴方最近質問が多いわねえ。そろそろ潮時かしら」

脳に直接服従の呪文を掛けているため、エバンスが私を裏切るということはあり得ない。

だが、エバンスの脳が服従の呪文に慣れきってしまい、かなり正常な思考を取り戻しつつあるのは確かだろう。

「でも貴方かなり優秀だし、もう少し使ってあげる。そうね。確かに培養槽を用いて人間を複製することも出来る。でも、それはあまりにも管理にコストが掛かりすぎるのよ。母体を使えば、母体の体調にさえ気を使っていればあとは母体が勝手に赤子を生産してくれる。私が付きっ切りで管理するならまだしもね」

あれからグレイバックとは何度か話したが、やはり知能は高いとは言いがたい。

施設の管理もある程度自動化しておかなければならぬだろう。

「母体の改造は私が手掛けるとして、母体に与える栄養などは栄養価の高い魔法薬を使用する予定。そのための実験も研究室で行っているでしょう？ 胃袋に直接管を通して、巨大なタンクから一定量の魔法薬を母体へ投与する。グレイバックたちはタンクの魔法薬が無くならないように補充さえすればいい。それなら魔法薬を与え忘れるということもないしね」

まあ、初めのうちは何らかの手違いで母体を殺してしまったり、産まれてきた赤子が成長しきる前に死んでしまったりといった事故が多発するだろう。

人狼たちが仕事に慣れ、生産が軌道に乗り始めるには少なからず時間が掛かるはずだ。

「さて、視察はこの辺にして帰りましょうか」

「はい」

私は階段を上り、地下から地上へと戻る。

そして最後に視察が終わった旨を伝えるために施設の事務所へ顔を出した。

事務所の中にはグレイバックと、その配下だと思われる人狼が机の上でチェスにいそしんでいる。

グレイバックは私が顔を出したことに気が付くと、シメたと言わんばかりにチェス盤の駒をぐちゃぐちゃにした。

「おっと、お偉方の登場だ。このゲームはお流れだな」

「あ、ズルいぞグレイバック！ 負けてるからって」

グレイバックは悪びれる様子もなく私の元までやってくる。

私はそんなグレイバックに施設が設計通りに完成していることと、もう研究所に帰る旨を伝えた。

「おっと、そうですかい。そいつはなによりなことだ」

「ええ。今度顔を出すのは施設を稼働させるときかしら。それまでに若いマグルの女を十人以上は攫っておくのよ」

「そいつらが、初期の母体になるわけだな。へへ、にしてもホワイトさんよう。あんた綺麗な顔して相当な鬼畜だな」

「あら、誉め言葉として受け取っておくわ」

私はグレイバックにニコリと微笑むと、事務所を後にする。

そしてエバンスの右腕を掴み、そのまま付き添い姿くらしで研究所へと帰った。

## 第二十一話 永遠に完成しない薬

一九七五年、三月。

私は研究室にある椅子に座りながらビーカーの中身を静かに揺らす。

「追いついた……」

今、私が手にしている液体は、蓬萊の薬ではない。

だが、この薬は時間を掛ければ蓬萊の薬となり得る液体だ。

月の都にいた頃も、ここまでは調合することが出来ていた。

月の都にいた頃の研究に取り敢えず追いついたと言えるだろう。

「まあ、ここから先が手詰まりなんだけど」

私はビーカーを机の隅に置き、椅子に深く腰掛ける。

このビーカーの中身をどうすれば蓬萊の薬になるのかはわかっているのだ。

蓬萊の薬の調合法の最後の工程に熟成というものがある。

未完成の蓬萊の薬を密閉容器に詰め、長い時間放置するのだ。

なんなら今手元にある液体を適当な小瓶に詰めてその辺に放置しておくだけで蓬萊の薬は完成する。

まあ、完成する頃には宇宙は終わりを迎えているが。

蓬萊の薬とは、今手元にある液体を永遠に熟成させることで完成するのだ。

十万年や百億年、それこそ無量大数年という有限の時間ではない。

極限まで無限に近い時間熟成させる必要があるのだ。

それを実現させるには、時間を操作する技術が必要になってくる。

月の都には、追放された蓬萊山輝夜を始めとして何人か時間を操ることが出来る能力者がいた。

私の師である八意××が蓬萊の薬を調合した時も、蓬萊山輝夜能力を用いて薬を永遠に熟成させ、薬を完成させた。

「薬の時間だけを無限に加速させることが出来れば、この薬は完成する」

だが、それを行う方法がない。

魔法界には逆転時計という時を移動する魔道具があるが、それでは飛べる時間というのは高が知れている。

有限の時をいくら繰り返しても無限には、永遠には届かない。

「研究の方向性を根本的に変える必要があるわね」

蓬萊の薬の研究は一旦ここで終わりだ。

ここから先は、この薬の時間だけを無限に加速させる方法を研究しよう。

「エバンス、ちよつとこつちに来なさい」

私がそう命令すると、試験管を洗っていたエバンスは作業の手を止めてこちらに歩いてくる。

私はエバンスの頭に杖を向けると、エバンスの脳内の血管に血栓を作った。

「今日はもう家に帰りなさい。愛する妻との最期のひと時を楽しむといいわ」

「かしこまりました」

エバンスは深く頭を下げると、いつも通り白衣を普段座っている椅子に掛けて研究室を出ていった。

今日の夜にはエバンスは脳梗塞で死ぬはずだ。

エバンスが死ねば、蓬萊の薬の製法を知る者は私一人になる。

「さて、新しい助手を探さないと。ここから先、主な活動場所が魔法界になるだろうし、次の助手は魔法使いにしようかしら」

その辺にいる魔法使いを攫ってきて服従させてもいいが、出来れば優秀な助手が欲しいところである。

「死喰い人から誰か貰おうかしら……いや、もつと適任がいるはず」

そこそこ優秀で、しばらく家を後にしても不自然ではなくて、ノクターン横丁を歩いていても違和感のない人物。

——ああ、適任がいるではないか。

「というわけで前の助手を殺して、私の実の父であるオリオン・ブラツクを次の助手にしたわ」



「頭おかしいんじゃないか？」

ノクターン横丁にある死喰い人のアジトの一室でヴォルデモートが頭を抱える。

私の横には脳に直接服従の呪文を掛けたオリオン・ブラックが佇んでいた。

「頭おかしいとは酷いこと言うわね。彼以上に私の助手に適任な魔法使いはいないわ。そこそこに魔法が使えて、家を空けることが多くて、どちらかと言えば闇の陣営に属している。ね？ これ以上の人材はいないでしょ？」

私はオリオンの肩をポンポンと叩く。

「服従させるのに苦労したのよ？ なまじ実力があるから手足を吹き飛ばして完全に身動きを取れなくさせてからじゃないと服従の呪文を掛けられなかったし」

「実の娘に四肢を飛ばされる父親の気持ちになってみる」

「それに関しても問題ないわ。もうオリオンには自我がないし。受け答えはできるけどそこに心はない」

ヴォルデモートは疑うような視線をオリオンに向ける。

オリオンはそんな視線を受けて、苦笑混じりに答えた。

「うちのところのホワイトがすまないな。こういうやつなんだ。許してやってくれ」

オリオンはスラスラと違和感なく言葉を発するが、そこに心はない。

ヴォルデモートも開心術でその事実を確認したのか、深いため息をついた。

「俺の部下に手を出したら承知しないからな」

「理由もなくそんなことしないわ」

私はオリオンに指示を出し、部屋の隅に立たせる。

そして自分はヴォルデモートの向かい側のソファアーへと腰掛けた。

「それにしても……周囲にはどういった説明をするんだ？ 流石に純血の魔法使い、それも死喰い人に理解のあるブラック家の当主を無理矢理服従させていると知られれば流石に反感を買うぞ。俺以外はお

前がブラック家の人間であることを知らないのだからな」

確かにヴォルデモート以外の死喰い人たちは私のことを闇癒者のホワイトだと認識している。

「だから受け答えに違和感がないように上手く調整してるんじゃない。オリオンは私の仕事仲間ということにするわ。死喰い人の中にはオリオンと面識がある人間もいるだろうし。それか——」

私はヴォルデモートに対しイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「私はオリオンの不倫相手だということにするのもいいかもしれないわね。そもそもセレネ・ブラックはオリオンにもヴァルブルガにも似ていないわけだし。私という不倫相手がいた方が自然ではなくて？」

「それはダメだ」

ヴォルデモートは即答する。

「あら、なんで？」

私が問い返すとヴォルデモートはわかりやすく視線を泳がせた。

「ダメなものはダメだ。普通に仕事の協力者でいいだろう」

「まあ、夫婦仲に不和が生じててもクローンが困るだろうし。じゃあ不倫相手という設定はやめておこうかしら。オリオン、今日はもう帰っていいわよ」

「ああ、そうさせて貰う」

オリオンは私の言葉に頷くと、姿くらましでその場から居なくなる。

私はヴォルデモートと二人きりになったところで改めて話を切り出した。

「で、本題はここからなんだけど、貴方、時間を操る魔法に心当たりはない？」

頭を抱えて俯いていたヴォルデモートだったが、その言葉を聞いて静かに顔を上げる。

そして真剣な表情で言った。

「今度は何を考えている？　時間改変を目論んでいるのだとしたら流石に止めるぞ」

「流石に私もそこまで馬鹿じゃないわ」

私は蓬莱の薬の完成が見えていること、完成させるのに無限の時間が掛かることをヴォルデモートに伝える。

ヴォルデモートは小さく胸を撫で下ろした後に、真剣な表情で言った。

「残念だが逆転時計以上の知識は俺にはないな。アレすらも既に製法は失われている」

「どうにかして実物を確保できないかしら。時間魔法の研究に着手するにあたって、一度実物を見ておきたいのよね。管理は魔法省が行っているんだっけ？」

私の質問に、ヴォルデモートは何かを思い出したかのような顔をした。

「そうか。ホワイトはホグワーツに行つてなかったな」

「どうしてそこでホグワーツの名前が出てくるのよ」

私が疑問に思っていると、ヴォルデモートが説明してくれる。

「ホグワーツでは授業を選択しすぎた影響で授業時間が被り、物理的に履修が困難だと判断されると魔法省で逆転時計を借りることになるんだ」

「そんな些細なことで貸し出しの許可が下りるのね」

「些細なことだから許可が下りるのさ。学年一の天才と言われるような生徒は大体逆転時計を手にしたことがある」

「貴方も逆転時計を使ったことがある？」

私の質問にヴォルデモートは首を振る。

「いや、俺はない。全教科を履修していたわけじゃなかったからな」

「まあ、マグル学とか占い学とか、貴方嫌いそうなものね」

「否定はしない。まあつまりは、ホグワーツの生徒なら逆転時計を手にするのはそう難しくはないという話だ。それこそお前の影武者としてホグワーツに通っているクローンに全教科を履修させれば逆転時計が貸し出されるだろう」

今年のクリスマスに家に帰ってきたクローンに話を聞いた限りでは、クローンは全教科は履修していない。

来年度から履修させるとなると、逆転時計を手にするのは早くても

九月ということになる。

半年も先というのは少々長すぎる。

「それじゃあ遅いわ。トム、貴方確かホグワーツのスリザリン生にも何人か唾をつけてるでしょ？ 逆転時計を手にしていそうな学生はいないの？」

「その名前で呼ぶな」

「リドルの方がよかった？」

リドルという名前を呼ばれて、ヴォルデモートは呪いでも掛けてきそうな顔で私を睨む。

私は肩を竦めると、皮肉混じりに訂正した。

「はいはい。名前を言っただけじゃないあの人さん。で、実際のところどうなの？」

「一人いる。スリザリン生で、学年ではとびきり優秀な三年生だ。だが、家がな……」

「家？ マグル生まれとか？」

「そいつはクラウチ家の一人息子だ。現当主のバーテミウス・クラウチ・シニアは魔法法執行部の部長を務めている」

意外な名前が出てきた。

クラウチ家の一人息子ならよく知っている。

私のクローンとも仲のいいバーテイのことだ。

「バーテミウス・クラウチね。暴力には暴力を。死喰い人を捕えるためなら手段を選ばない過激派だという話よね。息子も似たような思想を？」

「いや、ルシウスの話ではこちら寄りらしい。多少危険ではあるが、早めにこちらに引き込んでおくのも悪くはないかもしれない」

逆転時計の件もあるしな、とヴォルデモートは付け加える。

「何にしても、長期休暇中は逆転時計を教員に預けることになっていく。接触するとしたらホグズミード行きの日を狙うのがいいだろかな」

「そう。じゃあ早速クローンに次のホグズミード行きの日を聞かないと」

私は踵を返して研究室に戻ろうとする。

だが、ヴォルデモートにガツチリと肩を掴まれてしまった。

「待て。お前が直接行つたら碌なことにならない気がする。クラウチ・ジュニアの引き込みは俺に任せろ」

「酷い言い草ね。まあ、でも、そういうことなら任せようかしら」

ヴォルデモートがバーティを仲間に引き込みたいのだとしたら、私は手を出さない方がいいだろう。

「それじゃあ、ホグズミード行きの日だけ聞き出しておくわ」

私は今度こそキャビネットを潜り、研究室へと戻った。

次の日、エバンスが死亡したという連絡がエバンスの妻から入った。

告別式は二週間後の日曜日に行われる予定らしい。

私は告別式には参加しない旨をお悔やみの言葉と添えて伝え、静かに電話を切った。

「貴方の前任者が死んだわ」

「どうやらそうみたいだな」

オリオンはベッドに横たわっている死体を解剖しながら返事をする。

今オリオンが解剖しているのは例の人間牧場で取れた一番初めの人間だ。

この後、各臓器や筋肉、脳などを検査し、天然の人間と比較を行う予定である。

「まあ、私が殺したんだけどね」

「どうやらそうみたいだな」

「貴方のこともきつといつか殺すでしょうね」

「どうやらそうみたいだな」

オリオンは受け答えをしながらも、解剖の手を止めることはない。

「面白い命乞いをしたら助けてあげるかもしれないわよっ」

「それはいい。では殺さないでくれ」

「三点。百点満点中ね」

私は牧場で育てられた人間の脳を魔法で浮かし、シナプスがどのように接続されているかを観察する。

「そんなんじや貴方も数年後に殺すことになるわ」

「そうか。それは残念だ」

オリオンは表情を変えることなくそう言った。

やはり、人形との会話はそう面白いものではない。

こんなことなら、弟子という形でレイセンを手元に置いておけばよかつたと少し後悔する。

私は今解剖している死体から抽出した生命力で作り上げた命の水を一口飲むと、抽出した脳を保存液に浮かべた。

## 第二十二話 名前を言ったら飛んでくるあの人

一九七五年、四月。

逆転時計の話をつオルデモートにして一ヶ月ほどが経過した頃、私の研究室をつオルデモート自身が訪ねてきた。

まあ、訪ねてきたなどと大層なものでもないか。

つオルデモートのアジトとこの研究室は姿をくらますキャビネットで繋がっている。

実際のところ部屋を一つ移動するのと変わらない労力だ。

つオルデモートはノクターン横丁にあるアジトと比べてあまりにも近代的な研究室の内装を軽く見回してから私の元へと近づいてくる。

そして私に金色のチェーンが付けられた逆転時計を手渡してきた。

「明日の夜にはクラウチのガキに返す手筈になっている」

「そう。墮とすのに意外と時間が掛かったわねえ」

私は小言混じりに逆転時計を受け取り、無造作に半回転ひっくり返す。

その瞬間、周りの景色が高速で逆再生のように流れていった。

私がこの研究室に戻ってきたのは三十分前。

それまではオリオンを連れて人間牧場の視察に行っていたので時間を跳躍した私が過去の私と研究室で鉢合う可能性はないだろう。

十秒もしないうちに逆再生の速度が次第にゆっくりになり、やがて時間が通常通り進み始める。

私は部屋にあるデジタル表記の時計の時刻を確認した。

「十時二十五分。さつきからちようど一時間前ね」

つまりこの逆転時計は中の砂時計を一度ひっくり返すごとに一時間の時間移動が出来るということである。

「さて、カフェで食事でも摂ろうかしら」

私が帰ってきてしまったため、この部屋に長居はできない。

私は逆転時計を首から下げると、製薬会社に併設されているカフェに向けて歩き出した。

一時間後、腹ごしらえを終えた私は自分の研究室へと戻る。

そして部屋の中の私が逆転時計をひっくり返したのを確認してから研究室の中へと戻った。

「確かに本物のようね」

私は逆転時計についたチェーンをつまんで軽く揺らしながらヴォオルデモートへ話しかける。

ヴォオルデモートは研究室に戻ってきた私の方を振り向き答えた。

「当たり前だ。偽物を渡すわけないだろう?」

ヴォオルデモートは軽く肩を竦めて、部屋の中にある肘掛け椅子へと腰掛ける。

「これで一時間前の自分に会いにいったらどうなるのかしら。興味ない?」

「一時間前に自分に会ったか?」

「会ってないわ」

「ならやめておけ。何が起るかわからないぞ」

私は逆転時計を机の上に置き、流しの近くに置いてあったケトルに水を注ぎ火にかける。

そして棚からティーセットを取り出し紅茶を淹れる準備を始めた。

「まあ、流石にそんな危険は冒さないわ。でも、その正体を探るためには様々な実験をしないといけないのは確かでしょうね。今の今まで、その魔法の解明はおろかレプリカすら作れてないんだから」

「その辺に関しては今まで作る気がなかったというのもあるだろうがな」

「作る気がなかった?」

「ああそうだ。既にある物を使えばいい。魔法省にいる連中なんてそんなものだよ」

それはなんとも、探究心のかけらもない。

「あいつらは今が良ければそれでいいんだ。未来のことを考えようともしない」



「貴方は違うってどういうの？ 純血主義に未来なんか無いと思うけど」  
「そんなことはないさ。人というものは基本的に環境さえ良ければ勝手に増えていくんだ。一度徹底的に穢れた血を排斥し、純血だけで魔法界を構築する。何故マグル生まれのことを穢れた血と呼ぶかわかるか？」

「一度混ぜてしまえば、もう取り除くことが出来ないから、でしょう？」

ストレートの紅茶に牛乳を注いでミルクティーにするのは簡単だ。

だが、ミルクティーから牛乳を取り除いてストレートの紅茶に戻すことは困難を極める。

純血主義者からしたら、まさに文字通りの意味で穢れた血なのだろう。

「現在の魔法界で純血である魔法使いが減少傾向にあるのは何故だと思う？ 魔法族そのものが減ったわけではない。純血でない魔法使いが増えたからだ。このまま魔法族がマグルと混じり合い続ければ、いずれ魔法族は魔力を失うだろう」

「初めから純血の魔法使いがいなければ、マグル生まれが生まれてくることもない。純血同士が子を作り、魔法族を繁栄させていく」  
愚かなことだ。

地上で暮らしている時点で、マグル魔法族関係なく既に穢れているというのに。

「貴方って結婚出来なさそうね」

「どういう意味だ？」

私はヴォルデモートの肩にそっと触れる。

「いや、自分の子供を作る相手はかなり選り好みそうだなって。実際のところ結婚願望はあるの？」

「あると思うのか？」

「闇の帝王様をやってるうちはなさそうね」

その答えが気に入らなかったのか、ヴォルデモートは私の手を払いのける。

私はそんな子供っぽい一面にクスリと笑うと、逆転時計を慎重に分

解し始めた。

二日間徹底的に逆転時計を調べた結果、どのような仕組みで時間を跳躍しているのかある程度解明することができた。

まず一つ言えることは、逆転時計に時間を自由に操るほどの力はないということだ。

逆転時計による時間の跳躍は、時間を物理的に巻き戻したり早めたりするものではない。

言ってしまうえば、姿現わしに近いだろう。

姿現わしは空間を飛び越える術だが、逆転時計は時間を飛び越える。

ここで重要なことは、時間を飛び越えてしまうところだ。

蓬莱の薬を完成させるには、未完成の薬に流れる時間を無限に加速させ、有限の時の中に無限を作る必要がある。

そのためには時間そのものを自由に操る必要が出てくるが、逆転時計ではそれは叶わないだろう。

「とりあえず、サクツと複製してしまいますか」

逆転時計に掛けられた魔法は複雑ではあるが、再現不可能なレベルではない。

それこそ製法さえ確立されていれば、優秀な魔法使いなら製造可能な一品だ。

私は適当なメモ用紙に逆転時計の製法を書き記すと、逆転時計を持って姿をくまますキャビネットを潜りノクターン横丁にあるヴォルデモートのアジトに移動した。

アジト側にあるキャビネットから室内に出ると、そこには見知った顔がテーブルを囲んで話をしている最中だった。

テーブルを囲んでいるのはヴォルデモートを筆頭に、ルシウス・マルフオイ、ベラトリックス・ブラック、ロドルファス・レストレンジ、アントニン・ドロホフ、そしてパーテミス・クラウチ・ジュニアの

六人だ。

ルシウス・マルフォイやベラトリックス・ブラックは若手だが、家が力を持っていることもあり死喰い人内での発言力も高い。

私がテールブルへ近づくと、皆こちらに気がついたのか話し合いを一度中断し、全員が私へと振り向いた。

「これ返しにきたわ」

私はバーティに逆転時計を投げ渡す。

バーティは慌てて逆転時計を掴み取ると、小さく頭を下げた。

「お役に立てたのなら光栄でございます」

「あら、いい心がけね。死にそうになっただらいつでもいらっしやい。生きてさえすればどんな状態からでも治してあげるわ」

私はバーティの頭に軽く手を置くと、ヴォルデモートに近づく。

その様子に私の従姉妹であるベラトリックスが顔を顰めた。

私の今の容姿は動きやすいように成長した姿を取っているのです、ベラトリックスは私の正体がセレネ・ブラックであることには気が付いていない。

それはルシウスもバーティも同じのようだ。

まあ、それはそうだろう。

いくら顔が似ているからといえ、セレネ・ブラックはセレネ・ブラックとして存在しているし、ホグワーツにもちゃんと通っている。

それに私は普段オリオン・ブラックを付き従えてここに来ることが多い。

きつとベラトリックスやルシウスは、私がオリオン・ブラックの浮気相手で、セレネ・ブラックは私とオリオンの子供であると思っっていることだろう。

そんな女がヴォルデモートに馴れ馴れしく近づいてくるのだ。

ベラトリックスからしたら複雑な心境だろう。

まあ、誰にどう思われようともいいことではあるが。

「何かわかったか？」

「逆転時計の仕組みはある程度。参考にはなっただけど、私が欲しいものの本質とは少し違ったわ」

ヴォルデモートの問いに私は小さく肩を竦める。

そして、逆転時計の製法が書かれた紙をヴォルデモートに手渡した。

「これは？」

「逆転時計の仕組みと製法。一応、腕の立つ魔法使いなら誰でも製造できるように簡単にまとめておいたわ」

まあでも、と私は付け加える。

「正直あまり活用しない方がいいでしょうね。知らないうちに過去が変わると、計画も何も無くなってしまうし」

「無論だ。これを使う時は真に追い詰められた時だ。それ以前には不確定要素が大きすぎて使えたものじゃない」

未来というものは非常に不安定だ。

過去が些細に変化するだけで未来にいる自分がどこかのタイムミン  
グで死んでしまい、未来に戻った瞬間自分が消滅してしまうというこ  
とも起こりうる。

魔法省がこの戦争に逆転時計を用いないのはそれが一番の原因だ。  
戦争に勝つための武器としては、逆転時計はあまりにもリスクが大  
きすぎる。

「まあ、時間を扱う魔法に関する基礎は何となくわかったから、あとは  
研究を重ねるだけよ」

正直なところ、まだうつすらと道筋が見えたただけだ。

だが、時間を操る能力を得ることは決して不可能ではない。

蓬萊山輝夜という前例。

彼女の能力を参考にして、更にその能力を強化させることが出来れ  
ば……。

「ところで、何の話し合いをしていたの？」

私はふと思いい立ち、皆が囲んでいる机の上を見る。

そこにはグレート・ブリテン島の大きな地図が広げられていた。

「今までは仲間を増やすことに尽力していたが、この数年で死喰い人  
の数もかなり増えた。そろそろ敵対勢力の数を減らしていく」

「それじゃあ、表立って攻勢に出るのね？」

「いや、それは時期尚早だ。まずは少しずつ戦力を削り取っていく。闇討ちが基本になるだろう」

「それって、結構難しいと思うけど」

私は即座にそう反論する。

「どうやらルシウスやベラトリックスも私と同意見だったらしく、少し安堵の表情を浮かばせた。」

「一応理由を聞いておこうか」

「そもそも、私たちだってロンドンの中心に呑気に居を構えていられるような状態よ。隠れ家を探そうにも、忠誠の呪文で隠されては見つけられない。魔法省やホグワーツぐらい場所がはつきりしていればその限りではないけど……」

私の言葉に、ヴォルデモートは腕を組んで考え始める。

そんなヴォルデモートを見て、私は小さくため息をついた。

「ではこういうのはどうかしら。貴方に反抗する意思のあるものを炙り出す魔法をグレート・ブリテン島全土に掛けるというのは」

「そんなことが可能なのか？」

「この島単体ならそう難しい話でもないわ。実際、魔法省は同じことをやっているわけだし」

それを聞いて、バーティがはっと顔を上げる。

「未成年につけられた匂いか」

「その通り。イギリス魔法界には未成年の魔法の使用を嗅ぎつける魔法が掛けられている。アレと同じ原理のものをこっちでも用意してしましましょう。そうね……例えば——」

私はそこで言葉を切ると、ヴォルデモートに対し微笑みかけた。

「ヴォルデモート卿と臆せず口にした者の居場所を炙り出す魔法なんだろうかしら？ そうして口にした者を次々に襲撃すれば、人々は恐れ、誰も貴方の名前を口にしなくなる。貴方は名実ともに名前を言っではいけないあの人になるのよ」

「なるほどな。確かにそうすれば闇祓いや不死鳥の騎士団員だけでなく、表立って活動していない者も炙り出せるということか」

「貴方の最終的な目標は魔法界の支配なのでしょう？ だとしたら、

人々の上に立つことになる。その時重要になるのは大いなるカリスマか、絶対的な恐怖。貴方は自分の存在そのものを恐怖の対象にすればいい」

実際この手は相手にバレるまではかなり有効だろう。

今現在、ヴォルデモートの名は少しずつ魔法界に浸透してきているが、絶対的な恐怖とは程遠い。

それを、名前を聞くだけで震え上がるような存在にするには、戦争とは無関係な者も含めて反抗的な人間は皆殺しにしていくしかない。

「ドロホフ、実現性はありそうか？」

「ホワイト次第かと」

「私にはそんな時間はないわよ？ 術の構築はそっちでやって頂戴」

私が拒否すると、ドロホフは少し困った顔をする。

それを見て、ヴォルデモートが口を開いた。

「ふむ、なら俺も手を貸そう」

ヴォルデモートは杖を掴むと座っていた椅子から立ち上がる。

それを見てドロホフは慌てたように言った。

「そんな、我が君のお手を煩わせるわけには——」

「だがお前たちの中にホワイトの代わりが出来るものはいないのも確かだ。ならば、必然的に俺が力を貸すしかない」

「我が君、我が愛しの君。それには及びません」

ヴォルデモートの言葉を遮るようにベラトリックスが立ち上がる。

「その魔法、私めが完成させましょう」

「お前がか？ ベラトリックス。私やホワイトと並ぶほど優秀であるところ？」

「我が君には到底及ぶところではございませんが……」

ベラトリックスは横目で私の顔を見る。

「必ずや、お役に立つことをお誓い致します」

「ほう。面白い。ではその件はベラトリックスに任せることにする」

ベラトリックスはこの上ない喜びだと言わんばかりにヴォルデモートに頭を下げる。

「ロドルファスを下につける。何かあった時の保険だ」

「我が君、ですが――」

「お前のことを信用していないわけではない。だが、いつ死ぬかわからないのも確かだ。お前が死んだ時、ロドルフアスが仕事を引き継ぐ。それだけのことだ」

そういうことならば、とベラトリックスは納得した様子を見せた。

まあ、既存の魔法を模倣するだけだ。

ベラトリックス程度の魔法使いでも不可能ではないだろう。

「話もまとまったみたいだし私は研究室に帰るわ」

私は手をヒラヒラと振ると、テーブルを離れてキャビネットへ向かう。

「あ、そうだ」

だが、キャビネットを潜る瞬間に思い出し、バーティに対して微笑みかけた。

「セレネをよろしくね。バーティくん」

「――ッ！」

私の言葉にバーティと、その横にいたベラトリックスも体を硬直させる。

この際だ。私のことをセレネの本当の母親だと勘違いしてくれていた方が都合がいいだろう。

私は二人の反応に満足し、上機嫌でキャビネットを潜った。

## 第二十三話 肉の塊

逆転時計を入手してからしばらくの間研究を続けたが、時間を操る魔法の研究は暗礁に乗り上げている。

初めのうちは逆転時計の機能を拡張し、時間の操作が行えるようにしようとした。

だが、そもそもの仕組みが大きく違うため、一から新しく設計した方が手っ取り早いことに気がつく。

言ってしまうえば、飛行機に潜水機能をつけるようなものだ。

潜水機能しか必要としていないのに、飛行機をベースにする必要はない。

次のアプローチとしては拡大呪文を時間を操る魔法に変化させようとした。

時間と空間は密接に関わり合っている。

時間が変化すればそれに合わせて空間も姿を変える。

逆に空間が変化すればそれに合わせて時間が変化する。

魔法界にはすでに空間を変化させる魔法が存在している。

ならばその応用で時間の操作も可能はずだ。

私のこの考えは割と的を射ており、数ヶ月の研究で多少ながら時間の操作が可能な魔法が完成した。

だが、本当に多少なレベルだ。

体感出来るほどの時間の変化はなく、精密に測定すればほんの少しだけ時間が早くなっている程度のものだ。

このレベルではとてもじゃないが蓬莱の薬を完成させることなどできない。

時間の変化量を大きくするには、それと釣り合うだけの空間の変化が必要になる。

一般的な拡大呪文は靴の中を部屋ほどの大きさにする程度の拡大率だ。

そのレベルの拡大率では時間の変化は高が知れている。

それこそ靴の中の空間が無限に拡張し続けるほどの拡大率が時間



を操る魔法には必要になってくる。

だが、それほどの魔法ともなればそれ相応の魔力が必要になってくる。

イギリス魔法界中の魔法使いから魔力を吸い上げたとしても到底足りないだろう。

そんな研究をしているうちに、一年が過ぎ、二年が過ぎ、気がつけば一九七八年の夏になっていた。

この頃になると死喰い人もかなりの勢力となり、魔法省やダンブルドア率いる不死鳥の騎士団と真っ向からぶつかってもいい勝負ができるほどになっていた。

毎日のように私の研究室には怪我や呪いに掛かった死喰い人たちが転がり込んでくる。

その人数は数年前の比ではない。

私はそれらの人間を完全に治療しては、また戦場へと送り返す。

死喰い人という名前には、「死を喰らい、克服する」という意味が込められているとヴォルデモートから聞いたことがある。

なるほど、死を喰らう者か。

私はこちらの陣営にいる限り、死喰い人は死なない。

どのような怪我を負ったとしても、一日あれば完全に回復させてみせる。

魔法省や不死鳥の騎士団の団員からしたら恐怖そのものだろう。

死に至るような負傷を負わせた相手が次の日には無傷で目の前に立っているのだから。

「オリオン、お茶を入れなさい」

「わかった」

研究室の机の上でカルテを整理していた私はオリオンに指示を出す。

オリオンは部屋の隅へと歩いていき、いそいそと紅茶を淹れ始めた。

実の父親であるオリオン・ブラックを操り、助手として使い始めてからもう数年が経過しただろうか。

今のところオリオンは特に問題なく助手をこなしている。  
もうしばらくは使い物になるだろう。

「そういえば、シリウス・ブラックがホグワーツ卒業と同時に不死鳥の騎士団入りしたんだって？ とんだ血の裏切り者ね」

「今更な話だ。奴はホグワーツに入学する前から反抗的だった。もう血族とも思っていない」

「それじゃあ、ブラック家はセレネ・ブラックが継ぐことになるのね？」

つまりは私のことだが、ブラック家を背負って立ち上がるほど私は暇ではない。

ブラック家はそのまま私のクローンに継いでもらおうとしよう。

私はオリオンが用意した紅茶にゆっくり口をつけると、ふう、と小さく息を吐く。

その瞬間、ガタガタという物音と共に、姿をくまますキャビネットが震え出した。

何者かがこの研究室へと向かっているのだろう。

十中八九怪我人だ。

私は紅茶のカップを机の隅に置くと、オリオンに患者用のベッドを用意するように指示を出す。

それと同時にキャビネットの扉が開け放たれ、数人の人影が研究室に雪崩れ込んできた。

「頼むー、今にも死にそうなんだー！」

研究室に入ってきたのはベテランのアントニン・ドロホフとホグワーツの制服姿のバーテミス・クラウチ・ジュニアだった。

バーティは背中に血まみれの女性らしき塊を背負っている。

微弱に魔力を感じるためまだ死んではないようだが、持ってあと数分の命であることは確かだ。

「巨人とクイディッチでもしたの？」

私は冗談交じりに言いながら患者をベッドの上に寝かせるように促す。

バーティはそんなことを言っている場合ではないと言わんばかり

の口調で私に叫んだ。

「怪我してるのはあんたらの娘だ！ セレネ・ブラックだよ!!」

それを聞き、私は患者の赤く染まった髪をかきあげ、顔を確認する。バーティの言う通り、運ばれてきた患者は私のクローンだった。

ぶふ、ぶふ、と血の泡を噴きながら、か細い呼吸を続けている。

私は杖を取り出すと、クローンの気道内にある血液を消失させる。そして備蓄してある命の水を口の中に流し込み、ぐちゃぐちゃになっっている手足の修復作業を始めた。

「聖マンゴじゃなくてこっちへ連れてきて正解だったわね。向こうに運んでいたら間に合わなかったわよ」

私は折れ曲がった足の骨を一直線に並び替えながら研究室の床にへたり込むバーティに言う。

バーティは私の言葉に返事をするのではなく、ただ悔しそうに自分の膝を叩いていた。

クローンの怪我の処置は一時間もしないうちに終了した。

私は血まみれのベッドを魔法で綺麗にすると、研究室にある洗面台で手を洗う。

私と同じ遺伝子情報を持つ血液が水道水に溶け出して下水へと流れていった。

手術の最中に片手間にドロホフから話を聞いたが、どうやらクローンはバーティとの買い物中に闇祓いと死喰い人の戦闘に巻き込まれ、倒壊した建物の下敷きになったらしい。

戦闘が起きた場所はダイアゴン横丁のすぐ近くらしく、聖マンゴより死喰い人のアジトから私の研究室に運び込んだほうが早いとバーティは判断したそうだ。

「戦闘があつたってことは、追加で何人か運ばれてくる?」

「それはない。襲われた張本人がここにいる」

ドロホフが自分自身を指差す。

「ムーティだよ。あのイカレ頭だ。白昼堂々襲いかかってきやがっ

た。何が仲間の仇だよ」

アラストター・ムーディ。

闇祓いの中でもベテラン中のベテランだ。

「そいつがやたらめったら魔法を撃ちまくったせいでお嬢さんはご覧の有様さ。にしても、あの時会った少女とこんな形で再会することになるとはな」

ドロホフは懐かしそうに腕を組む。

ドロホフからしたら、私とレイセンがロジエールたちに捕まったあの日からセレネ・ブラックとは一度も会っていないことになっているのか。

私の正体がセレネ・ブラックであることを知っているのはヴォルゲデモートとクローンだけだ。

ドロホフは元通りになったクローンの顔を覗き込むと、私の顔と見比べる。

そして一瞬躊躇う素振りを見せた後、私に聞いた。

「この際だから聞いておくが……ホワイト、お前はこいつの母親か？」  
「ご想像にお任せするわ。でも、全く関係ないと言えば嘘になるわね」  
ドロホフは私とオリオンの顔を交互に見て、やれやれと肩を竦める。

「ヴァルブルガが知ったらなんて言うか」

「知ったことではないわ」

実際のところ、私とオリオンとの間に身体の関係はない。

確かに目の前にいるクローンはヴァルブルガの子供ではないが、私はヴァルブルガが腹を痛めて産んだ子供であることは確かだ。

だが、今の私の存在を理由付けるのに、オリオンの不倫相手というのは説得力があり過ぎる。

何故オリオンとヴァルブルガどっちにも似ていない子供が産まれたのか。

何故クローンと私が瓜二つなのか。

何故オリオンを助手として引き連れているのか。

私がオリオンの不倫相手であり、セレネ・ブラックはオリオンと私

の間に出来た隠し子であったとしたら全てが綺麗に説明出来てしま  
う。

もう、そういうことにしてしまったほうが手っ取り早いかもしれな  
い。

そんなことを考えていると、ベッドの上のクローンが小さく呻きな  
がら目を開ける。

そしてゆっくり身体を起こすと、周囲を見回し始めた。

「ここは……病院ですか？」

どうやらまだ視界がボヤけているようだ。

クローンは目をシバシバさせながら私の方を見る。

そして、小さく悲鳴を上げて固まった。

「あら、随分な反応ね」

「あ、いや……その……お久しぶりです」

クローンは自らが作られた存在であることを今思い出したかのよ  
うに軽く視線を逸らしながら私に挨拶する。

そんなセレネの様子に、バーティが意外そうに口を開いた

「セレネ、もしかしてお前知ってたのか？」

「知っていた？ なんのことです？」

クローンはバーティの方を振り向いたあと、私の顔を見て、そして  
私の横にいるオリオン・ブラックを見る。

そして若干目を白黒させた後、何かを悟ったかのように呟いた。

「ああ、なるほど」

どうやらクローンは、クローンと私の関係をバーティがどう考えて  
いるか理解したらしい。

私がベースになっただけあって、頭は良いようだ。

「知らなかったと言えば嘘になります。以前にお会いしたこともあり  
ますし」

クローンは視線を私からオリオンへと移す。

「でも、どうしてお父様がこちらに？ というか、ここはどこですか？

マグルの病院かと思いましたがどうにもそうではないみたいです  
し」

「ここは私の研究室よ。そして、貴方のお父さんは私の下で研究の手伝いをしているわ」

「……心配して駆けつけた、というわけではないんですね」

クローンは少し表情に影を落とす。

「何を言う。心配したとも。運ばれたのがここではなかったら、お前は死んでいた。そうなった場合、私は娘の死に目に立ち会えなかっただろう」

「いや、何言ってるのよ。死んだ方が良かったでしょ」

私は随分適当なことを言うオリオンの言葉を否定する。

やはり服従の呪文で操られているものには若干の知能の低下が見られるようだ。

「死んだ方が良かったってどう言うことだ？」

そんなことを考えていると、クローンの近くに立っていたバーティが少し声を荒げた。

どうやら服従の呪文に掛かっているにも関わらず、バーティにはその理由が理解できないらしい。

「考えてもみなさい。この女学生はあくまで一般人。今回は戦闘に巻き込まれただけなんですよ。そして、建物の倒壊の原因を作ったのは闇祓いのアラスター・ムーディ。つまりはムーディの周りの安全を顧みない危険行為が招いた事故ということになる」

しかも、今回ドロホフに戦闘の意思はなかった。

必要以上に死喰い人を深追いした結果、ホグワーツの生徒を一人巻き込んだのだ。

「ここで貴方が死んでくれたら、調子に乗っている闇祓いの鼻っ面をへし折ることが出来たのに。ブラック家の権力でゴリ押せばムーディを免職にすることが出来たはずだわ」

「けどそれじゃあセレネは！」

「でも実際そうでしょうか？ 正義の味方というのは、正しくあらねばならない。純白のドレスにシミを作るのは簡単よ。そして、シミだらけのドレスに価値などない」

私はベッドに腰掛けているクローンの肩にそつと手を置く。

「貴方もそう思うでしょう？ セレネちゃん」

「……は、はい。その通りだと思います」

「ほら！ セレネちゃんもこう言ってるし」

私はニコリとバーティに微笑みかける。

バーティは言葉が出ないと言わんばかりの表情で歯を食いしばっていた。

「まあ、過ぎたことを悔いても仕方がないわね。で、今後どうするの？」

私はクローンにそう質問する。

クローンは質問の意味がわからないと言わんばかりに首を傾げた。

「どう、とは？」

「貴方の意思ではなかったにしろ、貴方は死喰い人のアジトを経由し、極秘中の極秘である私の研究室まで入ってきてしまった。もう後戻りは出来ないわよ？ この場で死ぬか、死喰い人になって闇の帝王に忠誠を誓うか。二つに一つね」

バーティは咄嗟に身を乗り出し口を開きかけたが、結局一言も発することなく歯を食いしばる。

バーティのそんな様子を見てドロホフが言った。

「忘却術じゃダメなのか？」

「忘却術が完全じゃないことは貴方もよく理解してるでしょ？ 何のために磔の呪文が存在してると思ってるのよ」

忘却術は本当に記憶を消し去っているわけではない。

忘却術はその名の通り、記憶を思い出せないようにする魔法だ。

脳や精神に強い刺激が加わったり、強力な魔力干渉があると忘却術自体がかき消されてしまうこともある。

そもそも、磔の呪文は元々は拷問用の呪文ではない。

脳に直接魔力を送り込み、掛けられた忘却術を無理矢理かき消すために考案された呪文だ。

今ではもつと穏便に忘却術を打ち破る方法が考案されているため、磔の呪文は拷問用途にしか使われないが。

「というわけよ。セレネちゃん。貴方、死喰い人になりなさい」

「……はい」

クローンは少し当惑した表情で頷く。

バーティもそれしかないかと渋々納得したようだった。

「決まったな。怪我が治ったなら、すぐにでも我が君の元へ向かうぞ。だが、何の問題もなく死喰い人入り出来るかは保証できない」

「大丈夫よ。私も一緒に行くわ」

ドロホフは私の顔をチラリと見ると、少々苦々しげな笑みを浮かべた。

「ついてくるな、とは言えんな。我が君に物怖じせず意見できるのはホワイトぐらいだ」

「というわけで、お留守番よろしくね。オリオン」

「ああ、わかった」

オリオンは私の言葉に静かに頷く。

「実の父親は置いていくのか……」

そんなオリオンの様子に、ドロホフがボソリと呟いた。



## 第二十四話 高みを目指して

「と、そういうわけなの。仲間に入れてもいいわよね?」

研究室から死喰い人のアジトへと移動した私たちは、真っ直ぐヴォルデモートのいる部屋へと向かい、事の経緯をヴォルデモートに話した。

ヴォルデモートは私の話を最後まで聞くと、口元を隠すように顔の前で指を組む。

そして明らかに機嫌が悪そうな声色で言った。

「お前の話はよくわかった。ドロホフ、クラウチ、席を外せ」

「仰せのままに、我が君。おい、行くぞ」

ヴォルデモートの機嫌が良くないことを察したのか、ドロホフは慌てた様子でクラウチの首根っこを掴み、部屋の外に引きずっていく。

クラウチは心配そうな視線をクローンに向けたが、特に抵抗することなく部屋の外へと出ていった。

ヴォルデモートは部屋から出ていく二人を見送ると、指を組んだまま深いため息をつく。

そして明らかに疲れた顔で口を開いた。

「なぜそれがそこにいるんだ……こいつ、お前のクローンだろう?」

クローンという言葉にクローンがピクリと反応する。

「クラウチの小僧と仲がいいことは知っていたが……まさかこんなことになるとは。おいホワイト、どうするつもりだ?」

「どうするつもりって?」

「お前とクローンの関係の話だ。まさか、本当に母親として通すつもりか?」

「それが一番真実に近いっていうのが笑えるわね」

私がクスリと笑うと同時に、ヴォルデモートは大きなため息をつく。

「笑い事じゃないぞ。とにかく、こいつが死喰い人になることは認めよう。だが、それによって生じた不都合は全部お前が責任を持って処理するんだ」

「それはいいけど……不都合なんて起こるかしら？」

「今は大切な時期なんだ。お前の家族のいざこざを俺の組織内に持ち込むな」

話は以上だと言わんばかりにヴォルデモートは椅子を回転させて背中を向ける。

クローンはどうしていいかといった表情でオロオロとしていたが、私が部屋を出て行くこうとすると慌ててヴォルデモートに対し頭を下げた。

「こ、これからよろしくお願いします！」

「……え？ 今なん」

「アホなことやってないでいくわよー」

私はクローンの腕を掴んで部屋の外に引つ張り出す。

そして姿をくramsキャビネットが設置されているリビングルームへと歩き始めた。

「とりあえず、今後はホグワーツに通いながら、死喰い人としての活動も行おうこと。死喰い人内には優秀な魔法薬師が少ないし、それなりに重宝されると思うわ」

「わ、わかりました。おか……ホワイト様のお手伝いをするわけではないのですか？」

「貴方程度に手伝えることなんてないわ。雑用はオリオンで足りてるし。貴方を使い捨てるわけにはいかないでしょう？」

私の研究に深く関わった者を生かしておくつもりはない。

オリオンも、必要がなくなった時点で処分する予定だ。

「まあとりあえず、貴方の直属の先輩には挨拶しときなさいね。私は研究室に帰るから」

「直属の先輩って——」

「スリザリンに魔法薬学が得意で闇の魔術に陶醉していた先輩がいたでしょう？」

クローンは心当たりがあったのか、ハツとした表情をする。

私は軽く手を振るとキャビネットの中に潜り込んだ。

クローンが死喰い人入りして一週間ほどが経ったある日。  
私はクローンの様子を見にキャビネットを通ってアジトへとやってきていた。

今頃はスネイプと一緒にポリジューズ薬の量産でもやっているだろうか。

それとも満月が近いこともあり、人間牧場で働いている人狼向けの脱狼剤の調合でもしているかも知れない。

そんなことを考えながらリビングへと向かうと、室内の様子が普段と大きく異なることに気がつく。

「なんというか、全体的に小綺麗になっているのだ。」

埃の溜まっていた窓の棧は本来の色を取り戻しているし、床に散らばっていた食ベカスなども存在しない。

多くの魔法使いが滞在していることもあって、ついにこのボロ屋にも屋敷しもべ妖精がついたのだろうか。

そんなことを考えていると、奥の廊下からクローンが顔を出す。

その手にはトレイとティーセットを持っており、私の顔を見た瞬間ビクンと跳ねてその場で固まった。

「あ、そのホワイト様、よくいらつしやいました……お茶でもいかがですか？」

クローンはおずおずといった様子で廊下の陰から出てくると、そつと私の前にティーカップを置く。

私はその紅茶を一口飲んだ後、クローンに聞いた。

「何やってるの？ 家事手伝い？ 私は魔法薬の調合を手伝えと言っただけだよ」

「そ、それがその……スネイプ先輩に『俺一人で十分だから部外者は消えろ』って言われてしまつて。仕方なくここの掃除や帰ってきた人へのお茶出しとかを……」

「自分の仕事を奪われると思ったのかしらね。そんな大した仕事もしてないくせに。でも、だからって屋敷しもべ妖精の真似事をしなくてもいいんじゃない？ 外回りの仕事も沢山あるでしょうに」

私がそう指摘すると、クローンはしゅんと縮こまる。

「危険だからついてくるなってみんな言うんです」

まあ、クローンはまだ学生ではあるし、それにブラック家本家の人間でもある。

みな何かあった時の責任を取りたくないのだろう。

「だったら尚更スネイプを蹴り飛ばしてでも魔法薬の製造を——」

「いや、セレネはそれでいい」

その時、私の言葉を遮るようにヴォルデモートが顔を出した。

「それでいいってどういうことよ」

「そこまで人手が足りないわけでもない。セレネにはそのまま家事をしてもらいたい」

クローンはヴォルデモートにペコリと頭を下げると、トレイを胸に抱えてパタパタと走り去っていく。

ヴォルデモートはそんなクローンを目で追いながら言った。

「人は育つ環境で変わるものだな」

「どういう意味よそれ」

「どうもこうもそのままの意味だよ。あの子にお前と同じ血が流れているとは到底思えない。やはり子供の頃の情操教育というのは大事だな」

ヴォルデモートはしきりに何度も頷く。

「お前もホグワーツに通った方がよかったんじゃないか？ ……いや、お前の場合はもう手遅れか」

「散々な言いようじゃない。そんなにあの肉人形が気に入った？」

「ああ、あの子は天使だな。俺の下に舞い降りた天使だ」

「あほらし。まあセレネのことは貴方に任せるわ。好きに使って。ワイフにしてもいいわよ」

「ああ、それもアリかもな」

そこまでか。

私は大きく肩を竦めると、キャビネットへと踵を返す。

この様子なら放っておいても問題はなさそうだ。

私がキャビネットの扉に手を掛けた瞬間、ヴォルデモートが思い出

したように言う。

「おいホワイト、薬の方はどうなんだ？」

「九割ほどは完成しているわ。決め手に欠けている感じよ」

私はそれだけを伝え、キャビネットを潜った。

研究室に帰ってきた私は、背もたれ付きの回転椅子に座り脱力する。

アレが今現在魔法界で恐怖の対象になっているヴォルデモート卿の姿だと思うと笑えてくる。

あの様子では、半年もしないうちに結婚して子供でもこさえるんじゃないだろうか。

「育児に追われるヴォルデモート……もうパパ、赤ちゃんの様子ちゃんと見てて……ふふ」

考えるだけで滑稽だ。

「オリオン、お茶を淹れなさい」

「ああ」

部屋の隅で待機していたオリオンは私が命じた瞬間動き出し、紅茶の準備を始める。

私はそんなオリオンの背中に向けて話しかけた。

「そういえば、貴方とヴァルブルガは恋愛結婚だったの？ それとも見合い結婚？」

「子供の頃に親が結婚相手を決めた。子はそれに従うだけだ」

「それじゃあ、私の結婚相手もある程度目星はつけていたわけ？」

私の問いに、オリオンは首を横に振る。

「お前は俺の子ではなく、ヴァルブルガが不倫相手と作った子供だろうとずっと考えていた。故に、結婚相手を決める気はなかった」

「私が産まれた時に大喧嘩したって話は聞いていたけど、まだ納得していないかったわけ？ この際だから言うけど、私は正真正銘二人の实子よ。容姿が二人に似ても似つかないのは、私が月からの転生者だから」

そう、私は月の都から地上へ落とされた転生者だ。

故に、私の体にはブラック家の血は流れておらず、遺伝子情報も月

の都にいた時と変わっていない。

そういう意味では、二人の子供ではないというのもある意味正しいかもしれないが。

「そう、私には月の民の血が流れて……」

そうだ。私の体には月の民の血が流れている。

そして遠縁ではあるが、蓬萊山輝夜も祖先を辿ればいずれ私の家系と合流するのだ。

「何かしらの方法で遺伝子情報の中に眠る輝夜の能力を引き出すことが出来れば……」

もしかしたら、時間を操ることも可能かもしれない。

私は机の上に広げていた資料を脇へどかすと、新しいコピー用紙を引き出しの中から取り出し万年筆を走らせる。

「私の中に眠る蓬萊山輝夜の能力のルーツとなった遺伝形質を上手く取り出して発現させることが出来たら……輝夜の能力は昔お師匠様と二人で散々研究したことがある。完全に再現出来なくてもきつかけさえ掴めれば」

そのためには、まずは私の遺伝子を詳しく調べる必要があるだろう。

私は必要な機材をリストアップすると、手元にある受話器を持ち上げる。

そして服従の呪文で操っている会社の人間に必要な機材を準備するよう内線で指示を飛ばした。

数週間ほど私の遺伝子を調べた結果、私の中にも微かに時間を操る能力が秘められていることがわかった。

まあ、力が弱過ぎて体感出来るほどの時間操作を行うことは不可能だが。

だが、今重要なのは私の力の強さではない。

この微かに発現している時間操作の能力を、どうにかして極限まで高めなければならない。

そもそも、時間操作の能力は血液に発現する。

身体の中を巡り続ける血液を時間の流れに見立て、それを操作することで相対的に時間の流れを操るのだ。

血液中に含まれる時間操作の因子が多ければ多いほど、時間に大きな影響を与えることができる。

つまりは、血液中のその因子の濃度を極限まで高めることができれば、輝夜を超える時間操作者を作ることができるのだ。

「私の血中にあるごく僅かな因子を効率よく増やす方法さえ見つければ……私は時間操作の能力を手に入れることが出来る」

そうなれば、私は自分一人の力で蓬莱の薬を完成させることが出来る。

輝夜の力を借りなければ薬を完成させることが出来なかったお師匠様を超えることができるのだ。

「はは、あははははは！ それって凄い素敵！」

月の都に居ては、絶対に成し得なかっただろう。

私はもしかしたら、お師匠様を超えるために地上へ落とされたのかもしれない。

とにかく、道は見えた。

あとはその道を辿るだけである。

## 第二十五話 最強最悪のサラブレッド

一九七八年、十二月。

時間操作能力者を人工的に作る基礎研究が終了した。

結局のところ、私の血中にある時間操作の因子だけを取り出し、それを増やしていくのが一番手っ取り早いということがわかった。

まず初めに行ったのは血液の人工培養だ。

私の血液を人工的に増やし、その中から時間操作の因子を抽出していく。

いい方法だと思ったが、これは上手くいかなかった。

人工的に培養した血液には全くと言っていいほど時間操作の因子が含まれなかったのだ。

「どうやら体内で生成したものでなければならぬらしい。」

そうなる私の中で増やしていくしかないのだが、それも限界がある。

私の血液中に含まれる時間操作の因子はほんの僅かだ。

私の計算では、時間を意のままに操るには少なくとも時間操作の因子を持っている血液が血中に九十パーセントはないといけない。

私の体から血を抜き、その中から時間操作の因子を持つ血液だけを体に戻すという方法で少しずつ血中の因子量を増やすことは可能だが、計算上では一万年ほどの時間が掛かる。

流石にこの方法では時間が掛かり過ぎだ。

初めから時間操作の因子が百パーセントの状態で、そこから増やしていくのが一番望ましい。

だが、それをするには一度体内の血液をゼロに近い状態にしなければならぬ。

そんなことをしたら失血で私の命はない。

どうすれば効率よく時間操作の因子を増やすことが出来るだろうか。

研究が行き詰まった時、私の頭の中に一つの疑問が浮かぶ。

そういえば、何故蓬莱山輝夜は時間操作の能力を持っているのだろ



うかと。

彼女の両親にそのような能力は無かったはずだ。

それを考えた時、一つの仮説が浮かんできた。

輝夜の両親のうち、どちらかが血中に微量の時間操作の因子を有しており、その微量な時間操作の因子が胎児の頃の輝夜に流れ込み、増えていったのではないだろうか。

もつとも、胎児は血液を母親と共有している。

そのためそこまで単純な話ではないだろうが、遺伝子を少し弄り、子供に時間操作の因子を体内に留めるフィルターのようなものを作ってしまうえば効率よく時間操作の因子の濃度を高めることが出来る。

因子の濃度が少しでも高い状態で産まれ、そこから成長していけば数年もしないうちに体内の因子濃度がかなり高くなるだろう。

「つまりは、子供を作って、その子供の中で時間操作の因子を増やせばいい。……あはは、私ってやっぱり天才だわ」

道は見えた。

あとは辿るだけだ。

「というわけで、貴方の卵子を使わせてもらおうわね」

次の日、クリスマス休暇で実家に帰ってきていたクローンを研究所へと呼び出した私は、今までの研究結果と合わせて今から行うことをクローン一通り説明した。

方法としてはこうだ。

まず初めに、クローンから卵子を取り出し、その中を時間操作の因子で満たす。

その後、強い魔力を持った男性の遺伝子と掛け合わせて受精させ、その受精卵を研究所の培養槽で成長させる。

大人と同じ大きさになったら培養槽から取り出し、血液を全て私の体内へと輸血する。

私の理論が間違っていないければ、これで私は時間操作能力を得るこ

とが出来るはずだ。

「それはえつと何というか……ご自身の卵子を使われては？」

クローンは私の話を最後まで聞くと、おずおずと質問をする。

「ちょうど時期が合わなくてねえ。次を待つのも面倒だし。その時思いついたのよ。自分と同じ遺伝子を持った存在がいるって。別にいいでしょう？ 腕を一本もぎ取るって話じゃないんだから」

「まあ、確かにそうですね……」

どうにもクローンの歯切れが悪い。

クローンは私の顔色を伺うように少しモジモジしながら口を開いた。

「そ、それって私の子供ということになりませんか？」

「は？ ええ、まあ。そうなるのかしら？ でも最終的には血液を全部抜いて私に輸血するわけだし、人間牧場の食用人間と扱いは変わらないわよ？」

私はため息交じりに肩を竦める。

「そもそも貴方は私じゃない。結局のところ何も変わらないわ」

「でも、強い魔力を持った男性の遺伝子と掛け合わせるって……それってつまりその男性と子供を作ることになりませんか？」

「まあ、捉え方によってはそうなるのかしら？ でも、それが何だかっていうのよ。別にその男と結婚するわけでも、そのままその子供を育てていくわけでもないのよ？」

「それはそうかもしれないけど……」

クローンはまだ何か引つ掛かっているのか、目を泳がせる。

私は小さくため息をつく、ポケットの中から小瓶を取り出した。

「まあ、もう抜き取ったんだけどね」

「ええ!? 一つのまに……」

「貴方がこの部屋に入ってすぐよ。魔法って本当に便利よね。外科手術も必要なし。何なら、開腹することなくお腹の中に手を突っ込むことだって出来ちゃうんだから」

「そんな勝手に……」

「何に使うか説明しただけ感謝して欲しいところだわ。秘密裏に行っ

ても良かったんだから」

私は小瓶に保存魔法をかけて棚の中に仕舞う。

クローンは半ば諦めたようにため息をつくど、改めて口を開いた。「で、その魔力の強い男性っていうのは……もしかして、バーティ……とかか?」

「は? あんな雑魚のを使うわけないでしょ。使うのはトム・リドル、ヴォルデモート卿の遺伝子よ」

「え? それって大丈夫なんです? 絶対に許可しないと思うんですけど……」

「適当に髪の毛採取して、勝手にやるから大丈夫よ」

たとえ蓬菜の薬を作るためとはいえ、ヴォルデモートがそんなことを許可するはずがない。

だが、時間停止の因子を効率よく増やすには、高い魔力量を持った肉体が必要だ。

「私のクローンである貴方だから話したのよ。そこところを理解しておきなさい」

「……はい」

クローンは渋々といった表情で頷く。

それを見て、私は話は終わったと言わんばかりに立ち上がった。

「もう帰っていいわよ」

「はい、失礼します」

クローンは私に対して小さく頭を下げると、キャビネットの方へと歩いていく。

そして、キャビネットの目の前で立ち止まると、こちらを振り返って言った。

「また、様子を見に来ていいですか?」

「成長のつてこと? まあ、それぐらいなら全然いいわよ。でもどうして?」

「薬学を研究する身としては、少々興味深いですから」

クローンはそう言い残すとキャビネットを潜っていく。

私はその後ろ姿を見届けると、部屋の隅でティーカップを洗っている。

たオリオンに話しかけた。

「どう思う？ やっぱり子供ってことになるのかしら」

「俺にそんなことを聞くな。お前の望む答えが返ってこないことぐらいはわかるだろう？」

オリオンはティーカップを洗う手を止めることなく返事をする。

「何言ってるのよ。服従の呪文の効果が薄れてきていることぐらい、貴方も実感しているでしょう？ 当初と比べたら随分と思考がクリアになっているんじゃないか？」

マグルのエバンスの時もそうだった。

服従の呪文を掛けた当初はまるで機械のような返答しか返さないが、数年も経つと人間らしい返事をするようになってくる。

服従心だけは脳に直接植え付けているので私の命令に逆らうことはしないが、オリオンはもうすでにかなり正常な思考を取り戻しているのではないだろうか。

「さて、どうだろうか」

「そういう返事が出来てしまうあたり、もう限界かもね。そろそろ切り時かしら」

私は冗談めかしてオリオンに笑いかける。

オリオンは少し困った様子で後頭部を掻きながら言った。

「死ぬ前に、孫の顔ぐらいみたいものだが」

「あら、貴方でもそんなこと思うのね」

私は小さく笑うと、棚から小瓶を取り出して軽く振った。

「それじゃあ、これの顔がハッキリするぐらいまでは生かしておいてあげる」

「やっぱりお前も子供だっと思ってるんじゃないか」

「私にとっでは何でもいいわ。どうせ殺す存在なんだし」

さて、卵子自体は手に入った。

あとは卵子に時間操作の因子を詰め込み、遺伝子操作を施したあと、ヴォルデモートの遺伝子を組み込んで育てるだけだ。

大人一人分の血液量が採取できるだけのサイズ、要は大人になるまで育てないといけない。

百パーセントの濃度で血液を輸血できるようになるまでには、長い時間が掛かるだろう。

だが、数百年、数千年という時間に比べたら十数年など須臾に等しい。

一九八〇年、二月。

培養槽で育て始めた赤子はかなりの大ききさになり、表情もハッキリしてきた。

人間で例えると生後四ヶ月。

厳密には産まれたという定義はおかしいから、育成を始めて一年と二ヶ月と言ったところだろうか。

赤子は普通の人間と同じペースで順調に成長している。定期的に体内の時間操作の因子濃度を計測しているが、かなり高い数値が出ていた。

このまま順調に育てば、問題なく血液を採取できるだろう。

「随分大きくなりましたね。赤ちゃん」

クローンは培養槽の中にいる赤子に対して手を振ると、ニコリと微笑む。

クローンは、こここのところ毎日のように私の研究室にある培養槽の置かれた部屋へと来ていた。

「もう目も開いてますし、もしかしたらこちらが見えているかもしれないですね」

「見えてるわけないでしょ。向こうは水中にいるんだから」

「それでも、ぼんやりとは見えてるはずです。それに音だって」

クローンは人差し指で培養槽をコツンと叩く。

それに反応するかのようには、培養槽の中の赤子はクローンの叩いた場所に手を伸ばした。

「ほら、反応してますよ。こっちを認識してるんです」

「そりゃ、生きてるし、それに五感も正常に働いてるんだから反応ぐらいするわよ」

私はクローンのそんな反応にため息をつく。

クローンは私の態度が気に入らなかつたのか、少し膨れっ面になつた。

「こんなに可愛いのに、ホワイト様は冷めてますね」

「あのねえ。そりゃ可愛いに決まってるでしょう？ 私の遺伝子を引き継いでいるんだから」

私は培養槽の中の赤子を覗き込む。

私と同じく真っ白な髪に青い瞳。

赤子ながらかなり整った顔立ちをしており、将来は私と瓜二つになることが用意に想像できた。

「そういう意味ではなくてですね……愛着とかないんです？」

「論外よ。私には養豚場の豚を愛でる趣味はないの」

私はそう言つて肩を竦める。

「それに、こうしてこれを見にくるのは貴方の勝手だけど、大きくなつたら殺して血を全部抜くつてことを忘れないように。これが培養槽から出る時は、死ぬ時よ」

「それは……わかつてますけど」

「わかつてないように見えるから言っているのよ」

あまりにも愛着心が強いようなら、クローンをこの部屋から閉め出したほうがいだろう。

だが、クローンはつまらなさそうに腕を頭の後ろで組むと、培養槽から数歩下がった。

「わかつてますよ。この子はあくまで時間操作の因子を作り出すためだけの存在。大きくなつたら殺されるつてことぐらいは」

「わかつてるなら、これにあまり執着しないことね」

私は培養槽の照明を切り、目隠しの幕を下ろす。

クローンは机の隅にある赤子に関する資料に手を伸ばすと、ペラペラと捲つた。

「健康状態は良好そうですね。成長が遅れている箇所もなし。凄いですね。この培養槽はほぼ完璧に子宮と同じ役割をこなしている」

「当たり前でしょう。私を誰だと思つているのよ。既存のレシピを弄

ることしかできない小娘とは違うのよ」

「それ私のこと言ってます？」

「他に誰がいるのよ」

クローンがホグワーツで研究していたテーマの一つが、既存の魔法薬のレシピの改悪だ。

レシピを改良し簡易化するのではなく、効能が変わらない範囲で可能な限り複雑にするのだ。

まるで、お前にこのレシピが再現できるかと言わんばかりに。

「そんな研究、生産性のかけらもないじゃない」

「誰かの役に立つような研究はしたくなかったんです。私は、私の魔法薬の腕を示せればそれでよかったから……」

「捻くれてるわねえ」

ホグワーツを卒業したクローンは、死喰い人の一人としてヴォルデモートの配下の一人となった。

クローンの仕事は基本的にスネイプが行っている魔法薬の量産の手伝いと、アジトの家事だ。

特に死喰い人には積極的に家事を行おうとするものがない。

そんな中で自分から進んで家事を行うクローンの使用はかなり重宝されていた。

そして何より、クローンはヴォルデモートに気に入られている。

ヴォルデモート曰く、クローンは俺の心の癒しだそうだ。

馬鹿馬鹿しい。

「基礎研究の大切さはホワイト様も良くご存知でしょう？」

「車輪の再発明をする趣味は私にはないわ」

私はクローンから赤子に関するデータを取り上げると、軽く整頓して棚の中に入れる。

その時だった。

「おい、ホワイト！……あれ？ いねえな」

キャビネットの置いてある部屋からマルシベールの声が聞こえてくる。

急患だろうか。

私は培養槽の置かれた部屋の照明を落とすと、キャビネットが置かれた研究室へと移動した。

「どうしたのよ」

研究室へと戻った私は、キョロキョロと研究室内を見回すマルシベールに声を掛ける。

マルシベールは私が見つかったことにほっと息をつくとき、少々早口に言った。

「スネイプのやつが何か重要な情報を入手したらしい。闇の帝王がお呼びだ」

「そう。行くわよセレネ」

「は、はい！」

私は白衣を脱いで椅子に掛けると、白衣代わりの白いローブを身につける。

そして黒いローブをいそいそと着込んでいるクローンを引き連れて姿をくらますキャビネットを潜った。



## 第二十六話 物語の主人公

「で、重要な話って何よ」

ロンドンのノクターン横丁にひっそり立つ死喰い人の隠れ家の一室。

私は多くの死喰い人が緊張した面持ちでヴォルデモートの言葉を待っている中、躊躇なく口を開いた。

ヴォルデモートは慌てるなど言わんばかりに軽く手を挙げると、勿体ぶった様子で口を開く。

「我が下僕のスネイプがホグズミードで大きな情報を掴んだ。俺に関する予言だ」

予言？ 予言とは……占い学とかで言うところの予言か？

「その予言では、今年の七月に、三度俺に抗った者から俺を撃ち破るかもしれない子供が産まれるらしい」

ザワリ、と死喰い人の間に動揺が走る。

私も、あまりのことに少し動揺してしまった。

「な、なにメルヘンチックなこと言ってるのよ。ティーンエイジャーじゃないんだから」

私は大きなため息を吐きながら椅子にもたれかかる。

ヴォルデモートはそんな私の態度を見て、不敵に笑った。

「まあそう言うなホワイト。俺もこの予言が新聞雑誌に掲載されたようなチンケなものなら相手にしていない。重要なのは、この予言を聞いたのが誰かということだ」

「スネイプなんじゃないの？」

私は大きなテーブルの末席近くに座っているスネイプを見る。

スネイプはわかりやすくびくりとすると、恐る恐る口を開いた。

「俺は盗み聞いただけです。この予言は、シビル・トレローニという魔法がダンブルドアに対して語った予言なのです」

ダンブルドアという名前に、またテーブルがざわつく。

ヴォルデモートは、これで分かっただろうと言わんばかりに口を開いた。

「と言うことだ。この予言の真偽は別にしても、ダンブルドアはこの条件に合った子供を探し、特別な何かを授けるかもしれない。そうなれば、俺の脅威となる可能性もある」

「考えすぎだと思うけど……」

まあでも、ヴォルデモートの言わんとすることもわかる。

人間というものは、役割を与えられるとそれになりきるという性質がある。

英雄として育てられた子供が、英雄になり得る可能性は十二分にあるのだ。

「俺に三度抗った者はそういないはずだ。魔法省の闇祓いか、騎士団の連中か。徹底的に調べ上げる。孕んでいる魔女を洗い出すんだ」

ヴォルデモートはその後も詳細な指示を死喰い人たちに与えていく。

まあ、そのようなことに手を回す余裕があるというのはいいことだろう。

賢者の石から精製される命の水によってヴォルデモートの魂はかなり回復している。

年相応の老化は感じるが、容姿が大きく崩れるようなことも起きていない。

やはり、人間牧場を作って正解だったと言えるだろう。

「ホワイト、お前はいつも通りだ。怪我人の治療と例の薬の調合を急げ」

「順調よ。道筋は立ったから、あとは待つだけ」

私は椅子から立ち上がると、ヴォルデモートに軽く手を振って部屋を後にする。

クローンもそれに合わせて立ち上がったが、ヴォルデモートに呼び止められて部屋に残った。

私はそのまま隠れ家の中を進み、キャビネットの扉を開ける。

その時、不意に後ろから声を掛けられた。

「ホワイトの姉御さんじゃないですかい」

私はキャビネットの扉に手を掛けながら後ろを振り返る。

そこには人狼のリーダーを務めているフェンリール・グレイバックの姿があった。

「あら、グレイバックじゃない。ここにいるのは珍しいわね」

「魔石の容量が一杯になっちゃったもんで」

グレイバックはそう言つてポケットから賢者の石をいくつか取り出す。

と言つてもグレイバックはこの石が賢者の石であることは知らないが。

「牧場の調子はどう？ 生産効率は落ちてないかしら」

私はグレイバックから魔力の溜まった賢者の石を受け取ると、代わりの石を手渡す。

グレイバックは石を無造作にポケットの中に突っ込むと、得意顔で言つた。

「生産効率自体には変化はないんですがね、人喰いの種族の中である程度知名度が出てきたといえますか、プレミアがついちまって。需要と供給のバランスが釣り合つてないつてのが現状ですわ」

「プレミア？ 養殖の人間が？」

「ええ、人狼や吸血鬼の間でえらい人気なんですさあ。そこでもう少し牧場の規模を広げようと思つてましてね。その相談がしたかつたんですが……お時間どうです？」

確かにグレイバックに管理させている人間牧場では賢者の石の魔力充填に必要な分の人間しか生産させていない。

私としてはこれ以上の規模はいらないのだが、増える分には何も問題はない。

私は少し考えるフリをしてからグレイバックに言つた。

「私としては今の規模で十分なんだけど……そうねえ。どれぐらいの規模が必要なの？」

「今の倍……いや三倍は管理出来ませ。それ以上になったら人を増やさないと厳しいですが」

「じゃあ三倍にしましょうか。そのうち空間の拡張と機材の搬入を行うから、従業員を少し増やしておきなさい」

「従業員を？ 三倍までなら大丈夫だって——」

私は分かりやすいため息をついてみせる。

「一人当たりの仕事量が増えるってことでしよう？ あんまりブラツクな経営だと従業員に逃げられるわよ」

「これでも姉御の髪色と同じぐらいホワイトな職場環境を心掛けているんですがね」

グレイバックは参ったなど言わんばかりに後頭部を掻く。

まあ実際、グレイバックはよくやっている方だと言えるだろう。

人間牧場の管理から人肉の販路、経営まで器用にこなしている。

どうやらグレイバックには商売の才能があつたようだ。

「まあ私としては引き続き魔石に魔力を充填出来ればなんでもいいわ」

「そいつに関してもおまかせください。何に使うかは存じませんがね」

「私自身そんなに魔力量が多くないから。その補充のためよ。魔法使いの研究つてびつくりするほど魔力を消費するの」

グレイバックはわかつたようなわかつてないような仕草で曖昧に頷く。

牧場さえ拡張されればあとはなんでもいいといった様子だ。

まあ、それぐらいの方が御しやすくて都合がいいが。

グレイバックが信仰しているのは純血主義でも、ましてやヴォルデモートでもない。

グレイバックは自らの利益のためにしか行動していない。

きつとヴォルデモートが減びるようなことがあれば真っ先に姿をくらますだろう。

「それじゃあ姉御。また近いうちに」

グレイバックは不器用に愛想笑いを浮かべると、のそのそと廊下を歩いていく。

私は新しい設備の設置に掛かる費用を計算しながら研究室へと戻った。

一九八〇年、八月。

私が研究室で培養槽の中の赤子のバイタルを取っていると、いつものようにクローンがキャビネットを潜って私の研究室に入ってきた。

「お疲れ様です。赤子の調子はどうですか？」

「どうもこうも、至って健康よ。誰が管理していると思ってるのよ」

私は軽く拳を握ると、手の甲で培養槽のガラスをコツコツと叩く。

「血中にある時間操作の因子の割合もかなり高い。このまま成長すれば予定通り血液を採取できるでしょうね」

「……そうですか。それは何よりです」

クローンはローブを脱ぎ椅子に掛けると、代わりに白衣を身に纏う。

そしてクローン用に用意している机につき、データの整理を始めた。

「そういえば、予言の子供の候補が二人まで絞れたみたいです」

クローンは机の上に積まれた書類の整理を進めながら私に話を振ってくる。

予言の子供……そういえばそんな話を数か月前にヴォルデモートがしていたな。

「そう。よかったじゃない。それじゃあその二人の子供を親族諸共皆殺しにしてその話は終わりでしょう？」

「それが、そう簡単な話でもないみたいで」

簡単な話ではない？

「どういふこと？」

「予言を聞いたのはかのアルバス・ダンブルドアです。予言に当て嵌まっている家庭を巧妙に隠してしまっただけで」

「まあ、簡単にはいかないでしょうね。で、その予言の子供っていうのはどこの家の子供なの？」

私は部屋の端で掃除をしているオリオンを呼びつけると、二人分の紅茶を淹れるように指示を出す。

オリオンは雑巾片手に流しの方へと歩いていった。

「ポッター家とロングボトム家です。どちらも不死鳥の騎士団のメンバーですよ」

「……そう。ポッター家とロングボトム家ね」

ロングボトム家は夫妻どちらも闇祓いというエリートの家だっただけだ。

その二人の間に生まれた子供なら、確かにヴォルデモートを打ち倒す可能性もあるかもしれない。

それに比べるとポッター家はそこまで強い印象は受けない。

ジェームズ・ポッターは確かに優秀な魔法使いではある。

だが、その妻のリリー・ポッターは平凡な魔女という印象だ。

「まあなんにしても、ダンブルドアが守護しているのだとしたら赤子を殺すのは一筋縄ではいかないでしょうね。魔法省にスパイを何人か潜り込ませているみたいだけど、騎士団内部に死喰い人を潜り込ませないと殺すのは難しいんじゃない?」

「あのお方も同じ考えのようです。というよりは、騎士団員を籠絡させて情報を探る予定のようですが」

「騎士団員を籠絡ねえ。簡単には行かないだろうけど、トム坊やの性には合ってるか」

ヴォルデモートの強みは強大な魔力と圧倒的なカリスマ、そして精度の高い開心術だ。

開心術で心を開き、相手の弱みに付け込んで自分の意のままに操る。

抵抗する気力すらなくすほど相手の心をグズグズに溶かし、屈服させるのがヴォルデモートのやり方だった。

「あ、でも手始めにスネイプ先輩をホグワーツへと送り込むみたいですよ」

「スネイプを?」

「はい。魔法薬学の教授としてホグワーツで働くことになったららしいです」

スネイプは学生の頃から闇の魔術に傾倒していた。

ダンブルドアとしてもスネイプが死喰い人であることは知っている

るだろう。

そんなスネイプをホグワーツへ招き入れるとは思えないのだが。

私の疑問を察したのか、クローンは少し首を傾げながら言う。

「あのお方の話ではスネイプは三重スパイとして働かせるということみたいです。ダンブルドア側へ寝返ったように見せてこちらに情報を流す……みたいなの」

「それ、本当に裏切られてるんじゃないの?」

私は肩を竦めるが、クローンは首を傾げたままだった。

「さあ。ですが、その程度のことをあのお方が考えていないわけないと思うので、何か考えがあるんでしょうね」

まあ、ホグワーツの教授として働くということは、ホグワーツに住み込みになるということだ。

こちらからあまりスネイプに情報を与えなければさほど大きな問題にはならないだろう。

ヴォルデモートも同じ考えに違いない。

「まあなんでもいいけど……というか、スネイプが担当していた魔法薬製造の仕事は誰がするのよ」

「その話なんですけど……私に一任したいとあのお方はおっしゃっていません」

「まあ、そうなるわよね」

死喰い人に魔法薬のスペシャリストは少ない。

私を除けば、スネイプかクローンぐらいしか担当できる魔法使いがいないのが現状だ。

「それじゃあ、ここでの仕事を離れて隠れ家で薬の調合を担当することになったのね」

「えっと、そういうことになりますかね?」

「はつきりしないわね。私としては構わないわよ。元々私一人でも十分回る仕事だし、雑用はオリオンがやってくれるし」

私はいいタイミングで紅茶を持ってきたオリオンからティーカップを受け取る。

クローンはオリオンに小さく頭を下げると、同じようにティーカップ

プを受け取った。

「そういうわけですので、ここへ来る頻度は低くなると思います」

「低く？ 来なくなるの間違いでしょ？」

私の雑用という仕事がなくなるのもうここへは用事はないはずだ。

私がそういうと、クローンは培養槽に一瞬視線を向けてから言った。

「そう、ですよね……ですが、いかせん初めてのお仕事にはなりますので……相談に来ててもよろしいですか？」

「そういうのは前任者に……って、連絡が取れなくなるんだったわね。ええ、それぐらいなら別にいいわよ。あなたは私の半身のようなものだし」

私がそう言うと、クローンは少し頬を赤くして頭を下げる。

「実際に仕事を引き継ぐのは九月の頭です。それまでは引き継ぎを行いつつこつちにも顔を出すと思います」

「別に今日からいなくなっても私としては構わないんだけどねえ」

「そんな、寂しいこと言わないでくださいよ」

「クローンの貴方にそういう感情があることに驚きだわ」

まあなんにしても、九月からはまた私とオリオンの二人きりか。

それはそれで今まで通りに戻るだけなのでなんの問題もないだろう。

私はオリオンの淹れた紅茶を一口飲むと、培養槽の中の赤子を見る。

赤子は何を考えているのか、それとも何も考えていないのか。

ただぼんやりと培養液の中に浮かんでいた。



## 第二十七話 ガラスの破片

ホワイト様から初めてその話を聞かされた時は、とんでもない話だ  
と思った。

薬を完成させるために人工的に人間を一人育てるなんてスケール  
の大きな話だ。

それに、時間もそれ相応にかかる。

ホワイト様が不老不死の薬を作ろうとしていることは知っていた。

なんだか、大変そうな話だなあと、自分自身の卵子を提供しておき  
ながらどこか他人事のように感じていた。

だが、豆粒のような細胞が次第に人の形を成していき、私に対して  
微笑みかけた時、私は気が付いたのだ。

ああ、この子は私の子供なんだと。

培養槽の中ですすくすくと育つ我が子を見ていると、複雑な感情がこ  
み上げてくる。

この子は、死んでなお研究室の外の景色を見ることが出来ない。

ただ時間操作の因子を増やすための肉袋。

ホワイト様はこの子にそれ以上の価値を見出していない。

このままでは、この子は養豚場の豚よりも悲惨な人生を送ることに  
なる。

この子には私しかない。

私以外には助けられない。

私が何とかしなければ。

私が……。

一九八一年、十月三十一日。

私はヴォルデモートからの呼び出しを受けてノクターン横丁の隠  
れ家へとやってきていた。

部屋の中にはヴォルデモートと私の他に、小太りの青年が立ってい  
る。

私はそのどこかで見たことがあるような青年を横目にヴォルデモートに話しかけた。

「で、話って?」

ヴォルデモートはソファアに座りながら足を組み直す。

「ずっと捜索を続けていたポッター家の所在がっいに判明した」

「なんだっけ……ああ、あの予言の赤子ね」

ここ一年以上、ヴォルデモートはスネイプが入手した予言の情報を元にその予言に当てはまる子供を探していた。

私は赤子の管理と怪我人の治療に専念していたため捜索に加わることはなかったが。

「というか、そんなことにかまけていいいの? 魔法省陥落まであと一押しってところまで来てるんでしょ?」

実際、それに比例するように研究室に運ばれる怪我人の数も増えてきている。

戦争もかなり激化しているのだろう。

「それを盤石にするために予言の子を探していたのだ」

ヴォルデモートは横に立つ小太りの青年の方を見る。

私が視線を向けると、青年はわかりやすく視線を逸らした。

「で、この男性は?」

「ピーター・ペティグリユ。不死鳥の騎士団のメンバーの一人であり、俺に忠実を誓った下僕だ」

「ペティグリユ? ……ああ、見覚えがあると思ったら」

ジェームズ・ポッターやシリウス・ブラックの腰巾着か。

まだホグワーツにいた頃、何度か目にしたことがある。

「まあ、このまま一生ポッターやブラックの腰巾着として生きていくよりかは、こっちについた方がいいわよねえ」

私はヴォルデモートの向かいのソファアに座る。

「で、それだけ? それだけのことで私を呼び出したの?」

「それだけとは随分な言い草だな」

「暇じゃないのよ。昼も夜もなく次々に怪我人が運ばれてくるし」

四肢断裂程度の軽傷ならばオリオンが対応するが、もうほぼ死にか

けているような場合私が処置するしかない。

魔法省が死喰い人に対する死の呪いを解禁したと言っても、まだ抵抗感が強いのか物理的な魔法による怪我が多い。

結果として即死する死喰い人がかなり少ないため、戦闘による死喰い人の死亡率はかなり低いと言っているだろう。

「というわけで私はこれで失礼させてもらおうわ。貴方はこれからポッター家を襲撃に行くんでしょう?」

「ああ、そのつもりだ。不確定要素は早急に潰した方がいい」

「気を付けなさいよ? ダンブルドアほどではないにしろ、ジェームズもリリーも相当な手練れでしょう? 貴方の手当なんてしたくないわよ私」

「手を捻る赤子の人数が一人から三人に増えただけだ。俺が敗れる道理などない」

「あ、そう」

私は肩を竦めると、ソファアールから立ち上がる。

そしてペティグリューを一瞥すると、ヴォルデモートのいる部屋へ出る。

そのまま廊下を進み、姿をくまますキャビネットを潜って研究室へと戻った。

研究室に戻った私の目に最初に飛び込んできたのはオリオン・ブルックの死体だった。

私は杖を引き抜くと、オリオンの頭を何度かつま先で蹴る。

反応はない。

私は周囲を警戒しながらオリオンの死体を魔法で調べる。

外傷もない。どうやら死の呪いで殺されたようだ。

「この場所を知っているのは死喰い人だけ。そして死喰い人ならばここに金目のものがないことは知っているはずよね」

つまり強盗殺人ではない。

オリオンに私的な恨みがあるものの犯行か?

私は警戒を解くことなく研究室の中を確認していく。  
室内に争った形跡はない。

机の上に置かれてある物の配置もそのままだ。

「……じゃないとしたら……まさか」

私は真つ直ぐ培養槽の置いてある部屋へと向かう。

通路を進み培養槽の置かれてある部屋の扉を押し開けた瞬間、私は  
全てを理解した。

割られた培養槽、床に飛び散る培養液。

その中心で浮かんでいなければいけない赤子の姿がどこにもない。

「オリオンを殺した魔法使いは、赤子が目的だったのね」

赤子の存在を知っている人間は私とオリオンの他に一人しかいな  
い。

クローンがオリオンを殺し、赤子を連れて逃亡したのだろう。

「私の研究成果を盗み出すなんていい度胸じゃない」

一体何が目的だろうか。

いや、目的なんて一つしかない。

時間操作能力だ。

「迂闊だったわ。あの肉人形にそこまでの欲があったなんて」

クローンがどこかへ姿を眩ませて子供を育成した場合、私が今から  
新しく赤子を育てたとしても一年以上出遅れることになる。

つまりはクローンの方が先に時間操作能力を手にするのだ。

そうなれば、オリジナルの私を殺すことなど容易だろう。

「面倒くさいけど、探すしかないわよねえ」

盗まれたのが賢者の石程度なら放っておいてもよかった。

ホグワーツを卒業した今、クローンに利用価値などない。

いてもいなくても特に研究に支障のない存在だ。

そもそもクローンが死喰い人としてヴォルデモートの仲間になり、  
私の研究に合流すること自体が予想外の事態なのだ。

「私としては、魔法省にでも就職して欲しかったんだけど……」

ホグワーツで仲良くなった同級生と恋に落ちて、結婚して、子供が  
産まれて。

そんな普通の人生を歩んで欲しかったのだが……。

「まあ、いくら考えても事態は解決しないし。探しに行くか」

私は杖を一振りし培養槽を元通りに修復する。

そして床に零れた培養液を綺麗に消滅させると、一度キャビネットの置かれている研究室へと戻った。

「あ、そうだ」

床に転がっているオリオンの死体、これの処理も必要だろう。

適当に焼却してしまってもいいが、そうなると行方不明扱いになってしまう。

それよりかはノクターン横丁の路地裏にでも放置したほうが都合がいい。

死体を発見したものが表の人間でも裏の人間でも最終的にはヴァルブルガの耳まで届くはずだ。

私はオリオンに杖を向け、魔法で小さくする。

そして小さくした死体を拾い上げると、ビニール袋の中に入れて輪ゴムで口を結んだ。

「ん？ どこかにいくのか？」

私がキャビネットを潜って隠れ家へと移動すると、隠れ家にいたクラウチが声を掛けてくる。

私が研究室を留守にした時間は十分程度だ。

クローンはその間にオリオンを殺し、赤子を盗み出したことになる。

私は隠れ家の廊下で足を止めると、クラウチの方に振り向いた。

「セレネを見なかつた？」

「セレネ？ 研究室にいないのか？ ついさつきキャビネットを潜っていたのを見たが」

「そう」

キャビネットを潜って、その後出てきていないということは研究室

内で姿くらまししたということだろうか。

だとしたら研究室に残る魔法の残滓を追跡したほうがいいだろう。

「見かけたら教えなさい」

私はクラウチにそう命令し、一度隠れ家から出る。

ノクターン横丁の中を少し歩き、特に人通りの少ない路地裏にオリオンの死体を投げ捨て、元の大きさに戻した。

「ブラック家ももう終わりね。シリウス・ブラックが正当に家を継ぐとは思えないし。クローンを殺したらセレネ・ブラックに復帰しようかしら」

ブラック家の遺産には興味がない。

だが実の父親であるオリオン・ブラックの不倫相手として認知されているのは少々気分が悪い。

「肉体年齢的には成人したばかりなのに、失礼な話よね」

私はゴミのように地面に転がるオリオンを見下ろすと、隠れ家へと戻る。

そしてキャビネットを潜って研究室へ移動した。

研究室に降り立った私は、先程までオリオンが倒れていた位置を中心に、入念に魔法の残滓を探る。

取り敢えず強く反応が残っているのは死の呪いだ。

それ以外には私が普段多用している浮遊魔法や消失魔法、そして治癒魔法の痕跡が見つかる。

だが、姿くらましの痕跡はまったくといっていいほど見つからなかった。

「この部屋じゃない」

私は魔法の残滓を探りながら場所を培養槽のある部屋へと移動していく。

道中に魔法の痕跡はない。

そして培養槽のある部屋までやってきたが、そこに残っているのは先程私が使用した修復魔法と消失魔法だけだった。

つまり、クローンは研究室で姿くらましを行っていない。

クラウチが嘘をついているのか？

その可能性も考えたが、私は一つ大きな見落としに気が付く。

私は急ぎ足でキャビネットのある部屋まで戻ると、研究室の入り口の扉のドアノブを捻る。

すると、普段鍵を掛けているはずの扉のドアノブは何の抵抗もなく回った。

施錠されていない。それが意味することは一つだ。

クローンは姿くらしではなく、歩いてこの研究室を後にしたのだろう。

「私もすっかり魔法使いか」

月の都にいた頃なら、真つ先に扉の指紋を調べただろう。

その発想に思い至らないあたり、私の思考回路は魔法使い寄りになっっているようだ。

私は椅子に掛けてある白衣を羽織り、数年は開けていない扉を押し開け、研究所の廊下へと進む。

ここの製薬会社の社長には服従の呪文を掛けてある。

所長の権力を使い、研究所入り口の監視カメラのテープを入手しよう。

クローンは魔力を辿られないように、極力魔法を使わないように移動しているはずだ。

だとしたら、研究所の入り口の監視カメラに映っているはずである。

私はエレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押す。

エレベーターは扉が閉まると同時に小さな機械音を立てながら上昇を始めた。

「魔法省のエレベーターと比べるとマグルのエレベーターは静かよね」

月の都にあるエレベーターはそもそも音を立てないが。

いや、そもそも玉兎含め大体の者が空を飛ぶことが出来るため人員用のエレベーターは設置されていない。

そんなことを考えているうちに、軽やかなベルの音と共にエレベーターの扉が開いた。

「さて、社長さんに会うのも久しぶりね」

私は特に何も考えずエレベーターの外に足を踏み出す。

その瞬間、私の足が何かに引っかかった。

「ん？」

私は違和感の正体を探るために足元に視線を向ける。

そこにはワイヤーが結ばれている金属ピンと、ダイナマイトがいくつも巻きつけられた手榴弾が転がっていた。

「あ」

私は姿くらしをするためにその場で回転を始める。

だが、改造されていたのか、手榴弾が爆発する方が早かった。

爆音と共に爆風と金属片が私の全身を襲う。

私はそのままエレベーター内に押し込まれるように吹き飛ばされるとき、そのまま壁に叩きつけられた。



## 第二十八話 死の呪い

「……っ、追って、きてない?」

すぐにでもホワイト様が追ってくるものだと思ったが、今のところその気配はない。

山のように仕掛けた罠の一つに運よく掛ったのか?

いや、オリジナルがそんなにマヌケだとは思えない。

すぐにでも追いつかれると思った方がいいだろう。

「彼は……一体どこに?」

私は夜のゴドリック村を走る。

この村のどこかに予言の子が匿われている家があるはずだ。

あの人は……あの子の父親は予言の子を殺しにこの村を訪れていないはずだ。

「あの人なら……あの人ならこの子を救える。あの人がこの子を認知してくれれば……ホワイト様もこの子に手出しは出来ない」

あの人はどこに……どこに……どこに……!?

ロンドンの路地裏に置いてきた子供のこともあり、あまり時間をかけることは出来ない。

息を切らし、村の中を走り回る。

そして、私は見つけた。

何もない空き地の上空に浮かび上がる闇の印を。

あの人が襲撃を行う際に打ち上げる闇の印を。

周期的な電子音が聞こえる。

周囲の人間の、唸るような声が騒がしい。

私は手足を動かさそうと試みるが、手足どころか全身の感覚がなかった。

ああ、なるほど。全身麻酔が掛けられている。

私はぼんやりとした視界とくぐもる音のみで周囲の状況を観察する。

周囲の医師たちの手つきや表情を見るに、どうやら私は傷の手当てを受けているようだ。

運がいい。私は実に運がいい。

あの建物が現役で人が働いている製薬会社で良かった。

きっと建物内に応急処置が出来る医療従事者がいたのだろう。

救急隊を待っていたらきっと私の命は助かっていなかったはずだ。

私は天井からぶら下がる照明をじつと見つめる。

照明にはうつすらと、ベッドに横たわる私が映っている。

それを見る限りでは、私は腹部に深い傷を負っているようだ。

『出血が酷い……』

私の横で治療を進める医師が呟く。

彼らに治療を任せてもいいが、現在時刻が分からない今、ここでのんびりしているわけにもいかないのだ。

照明に反射する自分の体を見ながら、私は体内の魔力を操作して傷を塞いでいく。

『……ッ!?…なんだ!?』

医師の驚く声が聞こえる。

それはそうだろう。

目の前で、患者の体が勝手に修復されていくのだ。

私は大きな血管を繋ぎ直すと、体内に残ってる手榴弾の破片を魔法で消失させる。

そしてきつと目の前の医師が開腹したのであろう腹部をぴったりと閉じ、回復魔法を使つて全身麻酔を解除した。

「う、いたたたたた」

麻酔によって麻痺させられていた痛覚が戻り、私はついそんな弱々しい声を上げてしまう。

「先生！…患者が……！」

手術の助手を務めていた看護師が悲鳴に近い叫び声を挙げる。

私はお腹を押さえながら起き上がると、指先を杖に見立てて医師と看護師に錯乱呪文を掛けた。

杖を使った魔法を比べると効果は落ちるが、マグルを少し錯乱させ

るだけなら問題ない。

錯乱呪文を掛けられた医師と看護師はとろんとした表情になると、手術室に置かれていた椅子に腰かける。

私は自らの体内に治癒魔法を重ね掛けし、服を取りに一度研究室へと姿現しした。

「今何時かしら。まんまとクローンの罠に引っかかったわ」

私は研究室に設けている仮眠室のクローゼットから私服を取り出すと、手術着から着替える。

そして予備の白いローブを身に纏い、杖を探しに製薬会社の最上階へと姿現しした。

マグルにとって杖は棒切れだ。

爆発の衝撃で部屋の隅に吹っ飛ばされたら、拾われている可能性は低い。

私は爆発の跡が残る室内を軽く歩き回り、黒く細い私の杖を見つけて出す。

爆発の影響で折れていないかが心配だったが、どうやら杞憂だったらしい。

私は少し埃の被った杖を服の袖で綺麗にすると、クローンの逃亡先について考える。

私のクローンということもあり、クローンは馬鹿ではない。

何の考えも無しに私と鬼ごっこを始めようとは思わないだろう。

「何か逃亡先に当てがあるのか。あるいは頼れる相手がいるのか……」

誰か人に頼るとしたら、中途半端な相手ではないだろう。

クローンは、私が何者かを知っている。

私に対抗できる魔法使いで、クローンとある程度の親交がある人物……。

「……いるわね。一人」

トム・マールヴォロ・リドル。

ヴォルデモート卿ならその条件に当てはまる。

「もしクローンが赤子を連れてヴォルデモートに会いに行ったら……」

少々面倒くさいことになるわね」

私は壁に掛けられている時計を見上げる。

私が気を失ってから三時間は経過している。

クローンはもう既にヴォルデモートと接触しているはずだ。

「もしヴォルデモートが自分の赤子を認知していたら、それはそれで厄介ね」

だが、そうなっていたとしても方法はある。

私は全身に目くらまし呪文や探知魔法を無効化する魔法を掛けると、ノクターン横丁にある死喰い人のアジトへと姿現しした。

アジトのすぐそばに姿現しした私は、建物の中を探知魔法で探る。きっとヴォルデモートは予言の子を始末し、とつくにアジトへと帰ってきているはずだ。

もしヴォルデモートの魔力の近くにクローンの魔力があれば、既にヴォルデモートはクローンから赤子の話を聞いている可能性がある。その場合は機会を伺うために一度アジトを離れたほうがいいだろう。

「……いないわね。どちらも」

だが、私の予想に反してアジト内にはヴォルデモートの魔力もクローンの魔力も存在しなかった。

私は目くらましの魔法を解くと、アジト内へと足を踏み入れる。

「誰だ！……って、ホワイトか」

見張りのために玄関ホールに立っていたバーティが咄嗟に杖を構え、そしてすぐに警戒を解く。

「研究室にいないと思っただら外に出ていたのか」

「あの人は？」

「何も知らないのか？」

クラウチは信じられないような顔を見ると、何かを振り払うように首を振る。

「何も知らないのかって……何かあったの？」

「我が君がお戻りにならない」

「まだ予言にあつた子供を殺しに行つてゐるんじゃないの?」

「それにしても遅すぎる。ゴドリツクの谷に闇の印が上がっていることは他の死喰い人が確認済みだ」

つまり、襲撃自体は既に行われている。

なのにまだヴォルデモートがアジトに戻っていないとなると……。

「既に接触している可能性が高いわね」

「何がだ?」

「こつちの話よ。なんにしても、少し心当たりをあたつてみるわ」

私はバーティに軽く手を振ると、アジトから出る。

こうなったら、手当たり次第にクローンを探すしかない。

まさか、まさかまさかまさか!

あり得ない……あり得るはずがない!

だけど、闇の印の真下に急に出現した瓦礫の山。

そこから聞こえる赤子の泣き声は、あの人の敗北を意味していた。

あの後すぐに数年前にロンドンで服従させた闇祓いに連絡を取り、セレネ・ブラックが死喰い人であるという証拠を魔法省に提出させた。

それと同時にオリオン・ブラックの死体もその服従させている闇祓いに発見させ、犯人がセレネ・ブラックであると報告させている。

これにより闇祓い局では急遽セレネ・ブラックを捕えるための緊急チームが発足。

死喰い人という組織は基本的には秘密結社だ。

死喰い人が活動を行う際は黒いローブと仮面で姿を隠しており、魔法省としても死喰い人のメンバーを把握しきれていない。

いや、むしろ主要な幹部に至っては名前さえわかっていないことも多いのだ。

そんな中、ヴォルデモート卿にかなり近い位置にいる死喰い人の名前と身元が判明したとなったら、魔法省はその死喰い人を捕まえることを第一優先にする。

死喰い人を一人生きて捕らえることが出来れば、芋蔓式に他の死喰い人の身元が判明する場合が多いからだ。

服従させた闇祓いには、セレネ・ブラックはヴォルデモートのもとで違法な魔法薬の製造や、毒物の精製を行っていると報告させている。

それに、ブラック家と言えば魔法界でも有数の名家だ。

その本家の人間が死喰い人となれば、死喰い人内でもかなり上のポジションである可能性が高い。

そういうこともあり、闇祓い局はセレネ・ブラックの捜索にかなり力が入っている。

私が服従させた闇祓いを中心にして十名ほどがクローンの捜索に割り当てられた。

と、ここまでは私の思惑通り。

だが、クローンが赤子を連れて私の元から逃げた次の日の昼。

私は服従させている闇祓いから少々信じられない話を聞かされた。

「その話、信憑性はあるの？」

「崩壊した家屋内でポッター家の子供が生き残っていたことは確かです」

闇祓いは無表情で淡々と語る。

「ポッター家の上空には闇の印が掲げられていました。ジェームズ・ポッターとリリー・ポッターの死体も確認されています。例のあの人ポッター家に襲撃を仕掛けたことは間違いないでしょう」

「そして、崩壊した家屋には赤子だけが残された……」

闇祓いは頷く。

「魔法省はポッター家の子供、ハリー・ポッターが例のあの人を討ち破ったものと見て調査を進めています」

「それはいささか軽率な気はするけどね」

「ですが、例のあの人が赤子一人殺せず逃げたのは確かです」

私は腕を組み、路地裏の壁にもたれかかる。

あのヴォルデモートが敗れた？

しかも、一歳の赤子に？

「……まあ、そのことについてはこの際置いておきましょう。セレネ・ブラックの捜索に関して影響はありそう？」

「それに関してはあまり影響はありません。例のあの人の勢力が拡大したならまだしも、いなくなったことで死喰い人を一網打尽にしようという動きが出てきています」

「セレネ・ブラックを捕まえることが出来れば、他の死喰い人の正体も掴めるということよね」

「はい。その通りです」

ヴォルデモートが赤子に敗れたという話は到底信じられないが、少なくともクローンの捜索には影響はなさそうだ。

「この件に託けてセレネ・ブラックの捜索を強化しなさい」

「はい。わかりました」

闇祓いは無表情で頷くと、姿くらましでその場から消える。

私は闇祓いから聞いた情報を頭の中で整理しながら路地裏を後にした。

クローンが赤子を連れて逃げ出してから数日後。

研究室の片付けや製薬会社が爆破された件のゴタゴタを処理していた私の元に服従させた闇祓いからフクロウにて連絡が入った。

なんでも、セレネ・ブラックをロンドンの街で見つけ、現在追跡中らしい。

私は椅子に掛けてある白いローブを羽織ると、姿現しで闇祓いとの打ち合わせ場所の路地裏へと移動する。

闇祓いはフクロウを送つてすぐに路地裏で待機していたらしく、既にその場に立っていた。

「セレネ・ブラックを見つけたっていうのは本当？」

「はい。現在フランク・ロングボトムとアリス・ロングボトムの二名が追跡しております」

「ロングボトム夫妻が？ 二人は確か休職中だったわよね？」

ロングボトム夫妻の間に生まれた子供も予言の赤子に該当する。

そのため表向きは体調不良という形で隠れていたはずだ。

「今日の昼過ぎに復職しました。そして、そのまま私の班に配属されたのです」

「……まあ、そのへんはどうでもいいか。で、セレネの現在地は？」

聞祓いはロンドンの地図を取り出すと、小さなチェス駒を二つ地図の上に置く。

するとチェス駒は地図上をひとりでに動き出した。

「駒の速度的に道の上を走ってると思われませう。姿現しを使つてないのは少々不自然ですね」

私は地図上を滑るように動くチェス駒を見る。

なるほど、きっとクローンは今赤子を抱えている。

姿現しは魔法の難易度もさることながら、体への負担も大きな魔法だ。

赤子、それも培養槽から出たばかりの体では耐えることができないだろう。

クローンもそれが分かっているから姿現しで逃げないのだ。

「できない事情があるんでしようね。とにかく、私は先回りするわ。

貴方は魔法省に戻つて自分の仕事をしなさい」

「わかりました」

聞祓いは姿くらましでその場からいなくなる。

私は先程の地図を頼りに、先回りするようにノクターン横丁へと姿現しした。

ノクターン横丁に姿現しした私は、杖を取り出して周囲の魔力の流れを探る。

魔法の撃ち合いはしていないようだが、こちらへと進む大きな魔力の塊を三つ感じ取ることが出来た。

「あと十秒もしないうちにこの路地に突っ込んでくるわね」



私は息を殺すと、建物の陰に移動する。

すると、路地の奥の方からクローンが何かを抱えながらこちらへと走ってくるのが確認できた。

その背後にはロングボトム夫妻だと思われる二人組の姿もある。

「ちようどいいわね」

私はクローンが私の横を通り過ぎた瞬間に死の呪いをクローンに向かって放つ。

私の杖から放たれた緑色の閃光は、クローンの無防備な背中に直撃した。